

上河内村文化財調査報告書 第5集

古 宿 遺 跡

——栃木県河内郡上河内村今里字大室——

1 9 8 6 . 3

上河内村教育委員会

序 文

本村には往古より先住の人々が住む環境が整い、羽黒山を中心とした丘陵面に約67カ所の遺跡が確認されています。

古宿遺跡は縄文中～後期に先住していた人々の生活の場であり、西北は羽黒山を背にし、東南には鬼怒の清流が流れ、日照・風防・食糧確保に最も適している場所です。

昭和52年度、この遺跡地内に宇都宮市水道局の給水管が増設されることになり、対象地を緊急発掘調査を実施することになりました。

昭和53年2月20日から同4月29日までかかった現地の発掘調査及びその後の整理にあたった担当者岩上照朗（県文化課主事兼指導主事）先生、木村等（県文化振興事業団技師）先生、宇都宮大学考古学研究会、専修大学考古学研究会、地元婦人の皆さん、報告書作成に協力された上野修一（県立博物館学芸員）先生、並びに終始指導助言を戴いた海老原郁雄（県立大田原高等学校教諭）先生には深く謝意を表すとともに、この報告書が広く活用されることを念願いたします。

昭和59年3月25日

上河内村教育委員会

教育長 増 淵 益 三

発 刊 に よ せ て

この古宿遺跡発掘調査に際しては、殊に緊急度が高かったため、スタッフ一同2月という最も寒い時期に取りかかり、苦しい現地調査ではありましたが。その甲斐あって、配石遺構等の重要な資料が確認され、今後の調査において貴重な成果をあげることができました。

原始の過去にこの地を生活の場として人類の営みがあった形跡が数多く残っている本村の地は、長い歴史の上できわめて重要な意味を持つものと思われます。近年の相次ぐ開発などにより、自然、あるいは過去からの遺産を壊してゆくことがどんなに罪深いことかと感じておる今日であります。

このような点からも、古宿遺跡発掘に際し、文化財保護の立場にある私共に理解と協力を示された宇都宮水道局当局の方々には感謝を申し上げると共に、この報告書が関係各位において広く活用されるよう願っております。

昭和59年3月25日

古宿遺跡発掘調査委員会

会長 市 埜 傳 一

目 次

序	
発刊によせて	
例 言	
第1章 調査に至る経緯	1
第2章 古宿遺跡の概観	3
第1節 地理的な位置	3
第2節 基準土層と遺物包含層	4
第3節 周辺の遺跡群	6
第4節 遺跡の時期区分	11
第3章 調査の経過等	12
第1節 調査の方法	12
第2節 調査の経過	13
第4章 検出した遺構	15
第1節 配 石	15
第2節 土器埋設遺構	25
第3節 ピ ッ ト	30
第4節 炉 跡	43
第5章 出土した遺物	44
第1節 縄文土器	44
1. 出土状態及び分布状態	44
2. 縄文時代中期の深鉢形土器	48
3. 縄文時代後期の深鉢形土器	61
4. 堀之内式Ⅰ土器の口縁部文様	75
5. 浅鉢形土器	80
6. 注口土器, 他	84
7. 底部破片	85
8. 底部圧痕	88
9. 土器接合痕, 補修孔	89
10. 堀之内式土器の概要—古宿遺跡を中心として—	90
第2節 土 製 品	97
1. 土器片錘	97
2. 土 偶	97

3.	垂飾	97
4.	有孔土製円盤	97
5.	土製円盤	100
第3節	石器	110
1.	打製石斧	110
2.	握り槌状石器	110
3.	磨石、磨石兼敲石、磨石兼凹み石	115
4.	石皿	118
5.	蜂の巣石	125
6.	石槍	126
7.	石鏃	127
8.	切り目石錘	129
9.	磨製石斧	130
10.	石錐	134
11.	削器	136
12.	礫石錘	137
13.	原石、石核、剥片	138
第4節	石製品	140
1.	垂飾	140
2.	異形石製品	140
3.	棒状石製品	141
4.	石棒	143
第5節	小結	143
第6章	総括	150
第7章	終言	157
	引用参考文献目録	158

付 編 栃木県の集石遺構 — その研究史抄 —

海老原郁雄、長谷川操

挿 図 目 次

第1図	古宿遺跡地形図	5
第2図	古宿遺跡周辺の遺跡群	7
第3図	古宿遺跡発掘調査検出遺構配置図	9
第4図	配石の検出層位	16
第5図	1号配石実測図	17
第6図	2号配石、1号・2号土器埋設遺構実測図	19
第7図	3号配石及び配石下ピット実測図	20
第8図	4号配石及び配石下ピット実測図	21
第9図	5号配石及び配石下ピット実測図	23
第10図	6号配石実測図	24
第11図	7号配石実測図	25
第12図	土器埋設遺構の検出層位	26
第13図	1号土器埋設遺構実測図	27
第14図	2号土器埋設遺構実測図	28
第15図	3号土器埋設遺構実測図	29
第16図	4号土器埋設遺構実測図	29
第17図	5号土器埋設遺構実測図	30
第18図	ピットの検出層位	31
第19図	各ピット実測図(1)	33
第20図	各ピット実測図(2)	34
第21図	各ピット実測図(3)	35
第22図	各ピット実測図(4)	36
第23図	炉跡実測図	43
第24図	各グリッド毎の土器出土点数(第1段階)	46
第25図	各グリッド毎の土器出土点数(第2段階)	46
第26図	各グリッド毎の土器出土点数(第3段階)	47
第27図	出土土器実測図(単独出土、包含層、2号ピット、3号ピット)	49
第28図	出土土器実測図(5号土器埋設遺構、6号土器埋設遺構 1号土器埋設遺構、2号土器埋設遺構 5号土器埋設遺構)	50
第29図	出土土器実測図(5号土器埋設遺構周辺、4号土器埋設遺構)	51

3号土器埋設遺構、4号土器埋設遺構
9号土器埋設遺構)

第30図	出土土器文様展開図(1号土器埋設遺構、2号土器埋設遺構)	52
第31図	出土土器拓影図(1)	54
第32図	出土土器拓影図(2)	55
第33図	出土土器拓影図(3)	56
第34図	出土土器拓影図(4)	58
第35図	出土土器拓影図(5)	59
第36図	出土土器拓影図(6)	60
第37図	出土土器拓影図(7)	62
第38図	出土土器拓影図(8)	64
第39図	出土土器拓影図(9)	65
第40図	出土土器拓影図(10)	66
第41図	出土土器拓影図(11)	73
第42図	堀之内I式土器の口縁部拓影図(1)	76
第43図	堀之内I式土器の口縁部拓影図(2)	77
第44図	堀之内I式土器の口縁部拓影図(3)	78
第45図	浅鉢形土器・注口土器他拓影図	81
第46図	浅鉢形土器拓影図	82
第47図	土器底部実測図(1)	86
第48図	土器底部実測図(2)	87
第49図	底部圧痕拓影図	89
第50図	土器接合痕他拓影図	90
第51図	県内各地の堀之内I式土器(1)	92
第52図	県内各地の堀之内I式土器(2)	94
第53図	土器片錘の地区別分布図	98
第54図	土器片錘拓影図	98
第55図	土偶、垂飾、有孔土製円盤実測図	99
第56図	土製円盤拓影図(1)	106
第57図	土製円盤拓影図(2)	107
第58図	土製円盤拓影図(3)	108
第59図	土製円盤拓影図(4)	109
第60図	土製円盤の地区別分布図	109
第61図	土製円盤の重量度数分布	109

第62図	打製石斧、握り槌状石器の地区別分布図	111
第63図	打製石斧、握り槌状石器実測図（1）	113
第64図	打製石斧実測図（2）	114
第65図	打製石斧、握り槌状石器の厚さ度数分布	114
第66図	打製石斧、握り槌状石器の重量度数分布	114
第67図	磨石、磨石兼敲石、磨石兼凹み石の重量度数分布	116
第68図	磨石兼凹み石の長さとの関係図	116
第69図	磨石、磨石兼敲石の地区別分布図	116
第70図	磨石兼凹み石の地区別分布図	117
第71図	磨石、磨石兼敲石、磨石兼凹み石実測図	119
第72図	磨石兼凹み石実測図	120
第73図	石皿、蜂の巣石の地区別分布図	121
第74図	石皿、蜂の巣石実測図（1）	123
第75図	石皿実測図（2）	124
第76図	石皿実測図（3）	125
第77図	石皿実測図（4）	126
第78図	石鏃の地区別分布図	127
第79図	石槍、石鏃、石錐実測図	128
第80図	切目石錘の地区別分布図	129
第81図	切目石錘実測図（1）	131
第82図	切目石錘実測図（2）	132
第83図	磨製石斧の地区別分布図	133
第84図	石錐、削器の地区別分布図	134
第85図	磨製石斧実測図	135
第86図	削器実測図	136
第87図	切目石錘、礫石錘の重量度数分布	137
第88図	礫石錘計測部位説明図（渡辺誠 1980 による）	137
第89図	礫石錘の地区別分布図	138
第90図	礫石錘実測図	139
第91図	石核実測図	140
第92図	石製品実測図	140
第93図	棒状石製品、石棒の地区別分布図	141
第94図	棒状石製品実測図	142
第95図	石棒実測図	143

第96図	打製石斧装着復原図	145
第97図	古宿遺跡周辺の地形概念図	149

付 表 目 次

第1表	周辺の遺跡群一覧表	8
第2表	出土土器片点数及び分類表	45
第3表	土器片錘一覧表	97
第4表	土製品一覧表	99
第5表	土製円盤一覧表	101
第6表	打製石斧一覧表	112
第7表	握り槌状石器一覧表	112
第8表	磨石一覧表	117
第9表	磨石兼敲石一覧表	117
第10表	磨石兼凹み石一覧表	118
第11表	石皿一覧表	122
第12表	蜂の巣石一覧表	122
第13表	石鏃一覧表	128
第14表	切目石錘一覧表	129
第15表	磨製石斧一覧表	133
第16表	石錐一覧表	134
第17表	削器一覧表	136
第18表	礫石錘一覧表	137
第19表	石製品一覧表	141
第20表	棒状石製品一覧表	142
第21表	石棒一覧表	143
第22表	古宿遺跡出土石器組成表	144
第23表	古宿遺跡出土石器と石質	147
第24表	原産地黒曜石の化学組成の一例	148
第25表	栃木県古宿遺跡出土黒曜石の化学組成	148
第26表	栃木県古宿遺跡出土黒曜石剥片の推定原産地	148
第27表	古宿遺跡出土土器観察表	159

写真図版目次

- 図版 1 遺跡遠景（東上空約 400 mより撮影、右羽黒山標高 458 m）
遺跡近景（東上空約 250 mより撮影、中央台地部が遺跡）
- 図版 2 遺跡近景（東より撮影）
炉 跡
- 図版 3 1号配石（南西より撮影）
1号配石（南より撮影）
- 図版 4 1号配石部分（左A配石、右B配石）
1号配石部分（手前C配石部分、遠方D配石）
- 図版 5 1号配石石棒出土状況
1号配石垂飾出土状況
- 図版 6 1号配石上土層断面状況
2号配石と1号・2号土器埋設遺構（右1号土器埋設遺構）
- 図版 7 3号配石
3号配石下ピット
- 図版 8 4号配石
4号配石下ピット
- 図版 9 5号配石（西より撮影）
5号配石下ピット
- 図版10 5号配石（手前）、4号配石（遠方）
5号配石西垂飾出土状況
- 図版11 6号配石（東より撮影）
7号配石（南西より撮影）
- 図版12 1号土器埋設遺構
同上埋設状況
- 図版13 2号土器埋設遺構
同上埋設状況
- 図版14 3号土器埋設遺構
同上埋設状況
- 図版15 4号土器埋設遺構
7号土器埋設遺構
- 図版16 阿玉台式土器出土状況
9号土器埋設遺構

- 図版17 ピット群検出状況（手前左P23、同右P13・14、中央P7・8とP11・12、北より撮影）
 ピット群検出状況（手前よりP5・16、3号配石下ピット、P10、P7・8、P9、P11・12、P23南より撮影）
- 図版18 ピット検出状況（P13・14、南より撮影）
 ピット検出状況（P16・15、北より撮影）
- 図版19 ピット群検出状況（手前右P4、左P3、中央左寄P1・2、北より撮影）
 ピット検出状況（P4、西より撮影）
- 図版20 発掘調査風景
- 図版21 縄文時代中期の深鉢形土器
- 図版22 縄文時代後期の深鉢形土器（1）
- 図版23 同（2）
- 図版24 縄文時代中期の土器片（1）
- 図版25 同（2）
- 図版26 同（3）
- 図版27 同（4）
 同（5）
- 図版28 縄文時代中期の土器片及び後期の土器
- 図版29 縄文時代後期の土器片（1）
- 図版30 同（2）
- 図版31 同（3）
- 図版32 同（4）
- 図版33 同（5）
- 図版34 堀之内式土器の口縁部文様（1）
- 図版35 同（2）
- 図版36 同（3）
- 図版37 堀之内式土器の口縁部文様及び加曾利B式土器
- 図版38 土器の底部圧痕（モデリング陽像）
 装身具・その他
- 図版39 握り槌状石製品
 打製石斧（撥形と短冊形）
- 図版40 打製石斧

- 図版41 磨石・磨石兼敲石
図版42 小形の磨石と石皿
破壊された石皿の接合例
図版43 切目石錘
図版44 石鏃・石錐
削器
図版45 土器片錘
磨製石斧
図版46 礫石錘
図版47 石棒
棒状石製品

付編挿図等目次

- 第1図 竹下遺跡・組石遺構
第2図 向原遺跡・配石遺構
第3図 槻沢遺跡・“集石No.13”等（西那須野町）
写真1 槻沢遺跡・集石No.13
写真2 勝山遺跡・柄鏡型遺構（氏家町）
第4図 九坊院遺跡・配石遺構
第5図 勝山城跡と昭和44年度発掘地点
写真3 勝山遺跡・集石遺構全景
写真4 勝山遺跡・各集石遺構（氏家町）
第6図 西ッ原遺跡・配石遺構

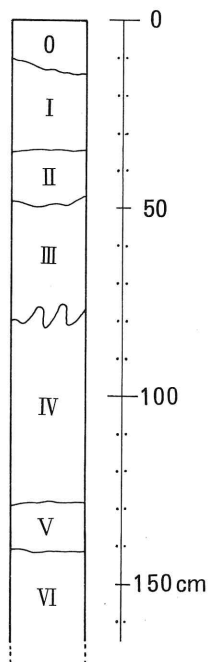
凡 例

1. 各図版の縮尺

遺構平面図	配石・ピット 1 : 40, 土器埋設遺構・炉跡 1 : 15
遺物実測図	土器 1 : 5, 土器片 1 : 3, 土製品 1 : 2
	石器 1 : 3 (石皿・石棒 1 : 6, 石鏃・削器・石核 2 : 3, 切目・礫石錘 1 : 2)
	石製品 1 : 2

2. 打製石斧実測図の側縁に沿って記された平行線は明瞭な歯潰し痕の認められる部分の長さを表している。

3. 調査区基準土層



0;表土 腐植土	10~15cm
I;褐色土	20~25cm
木の根等による腐植多い。指頭大の角礫を多量に含む。やゝ粘性を持つ。下位にSP粒を少量含む。遺物を包含するが、中位以下にとくに多い。	
II;褐色土	10~20cm
I層より赤味を増す。角礫を少量含む。木の根などによる浸食はこの層まで及ぶ。多量の遺物を含む。	
III;明褐色~黄褐色土	
SP粒を多量に含む。5cm角以上の礫を多量に含む。	
I, II層より砂質。遺物を多く含むが、主として中位以下に集中する。IV層とは上下の浸食が激しい。	
IV;暗褐色~黒褐色土	50~60cm
角礫を多量に含む。下位にSP粒, IP粒を多量に含む。粘性が強い。上半に多量の遺物を含む。ピットの底面は多くIV層中につくられる。	
V;SP層への漸移的土層	10~15cm
VI;SP層	
※ 遺構の大半はI層下位~II層にかけて検出されることが多い。まれにIII~IV層のものもある。SP,七本桜軽石。IP,今市軽石。	

古宿遺跡土層模式図

4. 第4・12・18図の各遺構検出層位のうち柱状図右横の縦線は遺物包含層の厚さを表わす。又、各遺構についての縦線は検出層位、底面の層位を表わす。

例 言

1. 本書は、栃木県河内郡上河内村教育委員会が、宇都宮市水道局の発掘依頼を受け、古宿遺跡発掘調査委員会を組織し、昭和53年に取り組んだ古宿遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査期間 昭和53年2月15日～同年6月20日
3. 古宿遺跡発掘調査委員会の組織は次のとおりである。(S53. 2. 15現在)

会 長	市 埜 傳 一	(上河内村文化財保護審議会長)
委 員	花 塚 庸 雄	(〃 副会長)
〃	古 橋 敏 雄	(〃 委 員)
〃	佐 藤 傳 作	(〃)
〃	江 連 基	(〃)
調査部長	丸 山 定 次	(上河内村教育委員会教育長)
調査担当	岩 上 照 朗	(栃木県立氏家高等学校教諭)
〃	木 村 等	(栃木県教委文化課調査員)
指導協力	海老原 郁 雄	(栃木県教委文化課指導主事)
〃	岩 淵 一 夫	(栃木県教委文化課技師)

調査補助 (宇都宮大学)

梶 和 彦	小 林 仙 哉
青 柳 三恵子	中 村 京 子
保 坂 育 子	増 山 美年子
飯 田 誠	篠 原 菜穂子
和 気 敏 章	高 橋 由 勝
直 井 正 行	金 沢 正 子
徳 原 久美子	梁 木 誠
地元今里婦人会有志	宮 崎 光 明
地元高松婦人会有志	
専修大学考古学研究会	

○ 宇都宮市水道局関係職員（当時・60年4月現在）

中 森 重 一 ㊦ 水道局水道事業管理者水道局長 ㊧ なし
木 村 邦 次 ㊦ 水道局総務課長 ㊧ 宇都宮市役所総務部長
中 山 甲 一 ㊦ 水道局建設課長 ㊧ 水道局水道事業管理者水道局長
岡 日 出 夫 ㊦ 水道局建設課調査係長 ㊧ 水道局給水課長
手 塚 源 一 郎 ㊦ 水道局建設課調査係主任技師 ㊧ 給水課給水操作
主任技師

○ 発掘報告書執筆者名（昭和60年4月現在）

岩 上 照 朗 （県文化振興事業団主事）
上 野 修 一 （県立博物館学芸員）
木 村 等 （県文化振興事業団技師）
協力 海老原 郁 雄 （県立大田原高等学校教諭）
岩 淵 一 夫 （県文化振興事業団技師）
長谷川 操 （湯津上村歴史民俗資料館学事補）

（担当事務局）

上河内村教育委員会社会教育課長	手 塚 英 弘（事務局長）
” 課長補佐	渡 辺 千 賀 子（事務局）
” 社会教育主査	小 林 茂（事務局）
元 社会教育課長	小 林 直 明
前 ”	古 橋 喜 太 郎

4. 本書の編集は岩上・上野の両名が協議の上行った

第1章 発掘に至る経緯

昭和52年10月、宇都宮市水道局による水道管理設工事前調査（地質調査）の際数片の土器片が出土したとの報告が上河内村教育委員会あてもたらされた。

村教委社会教育課は上記地質調査調査員より土器片の出土状況等について詳細な説明を受け、出土地が羽黒山東麓の今里大室にあったことを確認した。併せてこの地に水道管理設工事が予定されているとの連絡を受けたわけである。村社会教育課はその後速やかに担当者を現地に派遣し更に詳細な調査を行った。土器片出土地帯は2～3haの平坦な地形であり、踏査の結果全面的に縄文時代の土器片等が散布していると判明した。地形的な側面、土器片等の散布量から相当に大規模な遺跡の存在が予想された。遺跡名は遺跡地一帯の通称名をとって古宿遺跡と命名した。

村教育委員会としては、この踏査の結果を踏まえ栃木県教育委員会文化課へその事情を報告し、遺跡の取扱いについて今後の指導を仰いだ。ついで同年11月遺跡の取扱いについて県文化課、宇都宮市水道局、上河内村教育委員会の三者で検討協議を行った。同時に三者で現地調査を行い縄文時代中期から後期にかけての大規模な遺跡であると判明した。工事はこの遺跡の一画に予定されているわけである。協議の結果、水道管理設工事前にその予定地区について記録保存のための発掘調査を実施することになった。また発掘調査費については宇都宮市水道局が負担し、発掘調査は上河内村教育委員会が担当することになった。

これを受けて村社会教育課では上河内村文化財保護審議委員会（会長 市埜 傳一氏）を主体とし準備その他を進め、発掘の担当者として岩上照朗氏（現栃木県文化振興事業団）に依頼した。更に東洋大学考古学研究会、宇都宮大学考古学研究会、専修大学考古学研究会に調査補助を依頼した。ついでこれら併せて「古宿遺跡発掘調査委員会」を組織した。発掘作業については地元今里婦人会・高松婦人会の方々にお手伝い願うことになった。

古宿遺跡発掘調査は昭和53年2月20日より開始された。発掘調査開始後4日目に縄文式土器一片が出土し、まさしく縄文時代の遺跡であることが確認された。この発掘調査に際し調査員のための宿泊所の提供など大変お世話になった高橋国悦氏に特記して感謝の意を表したい。併せて発掘調査費用総額10,976,000円の負担はもとより、この発掘調査のためひいては文化財保護のため種々のご配慮を頂いた宇都宮市当局に対しても深甚なる敬意を表する次第である。

発掘調査は昭和53年2月から同年4月まで実施された。調査後出土した遺物は上河内村

立中央公民館へ移管し、洗浄・注記作業は昭和54年2月まで約一年に及んだ。その後、出土土器の復元・調査結果の分析検討・図版の作成・原稿執筆を通じ、いま古宿遺跡発掘調査報告書としていまここに上梓されるに至ったのである。

この古宿遺跡の発掘調査を契機に村民各位が地元文化財に対しより一層認識を深められることを期待したい。また、この遺跡が望ましい環境の下で子々孫々に至るまで保存伝承されることを念じたい。最後に、この発掘調査に関して諸方面から絶大な御支援を頂いたことに対し改めて感謝の意を表する次第である。

第2章 古宿遺跡の概観

第1節 地理的な位置

古宿遺跡は、河内郡上河内村今里に所在し、宇都宮市中心部の北方約17kmに存する。上河内村は栃木県のはぐ中央に位置しており、本県の地形区分でいうと中央部低地の北端近くとなる。北方及び東方は現鬼怒川の流路が村境となり、西部は宇都宮丘陵の北端部にあたっている。上河内村の地形を区分すると、東半の平地（鬼怒川の流路沿い）、西半の山地と大まかに二区分できる。このうち東半の平地は、鬼怒川・西鬼怒川沿いの沖積低地（絹島面）と西鬼怒川右岸の洪積台地（田原面、宝木面）よりなる。田原面は上河内村今里より南方上三川町まで続き、宇都宮市市街地の大半を載せる田原台地となる。また宝木面は上河内村今里付近に始まり、上三川町蒲生まで続く岡本台地となる。西半の山地は、宇都宮丘陵の北部となっており、宇都宮市塙田の県庁裏八幡山まで続く。この最北端には羽黒山（458.2m）が屹立している。丘陵上面には、広い平坦面を残しており、縄文時代以降の数多くの遺跡を確認することができる。西半の山地は、山地形・丘陵地形のみで成立しているわけではない。宮山田から中里に連なる部分には、山田川の浸食による沖積低地、洪積台地が点在している。但し、各々の台地は小規模なものが大半である。上河内村内の大半の遺跡は西半の山地に含まれており、大方六割が縄文時代のものとなっている。これらの遺跡の多くは、山田川流域の山麓台地縁辺或いは小谷に面した台地の端部などに立地している。反して東半の平地には、一部の小規模なものを除いて遺跡は全く確認されない。

古宿遺跡は、羽黒山東麓の平坦面上に立地する。今回の調査区のすぐ東側は明瞭な崖線となっており、直下の水田面との比高は7～8mを数える。水田面を挟んで東方約30mに西鬼怒川が南流する。調査区の西約150mで羽黒山の急斜面となっており、同様南100mで羽黒山の一尾根の末端部となる。つまり、遺跡は100m×100mの平坦面内に形成されたものとみられる（第1図）。遺跡の標高は200mから210mを測る西鬼怒川より更に東方約300mには鬼怒川本流が南流している（第2図）。

鬼怒川は、本県第一の大河である。とくに上河内村付近は流路沿いに広大な沖積低地が開けている。広大な低地は現在でこそ本県有数の米作地となっているわけであるが、このことを裏返してみれば、かつて周辺は鬼怒川の広大な氾濫原であったことは疑えない。つまり、縄文時代においては、水棲食料獲得の場として有効であっても、人間起居の場としては不適地であった。古宿遺跡は、このような広大な氾濫原を眼下に臨む台地上に形成された。西鬼怒川は、何回かの河川改修・周辺の土地改良の結果、今では、幅50m程度のも

のではあるが、かつて鬼怒川本流はここにあったとされる。古宿遺跡の出土遺物中、石錘・土器片錘の多量さは、鬼怒川を利用しての河川漁が当時の主な生業のひとつであったことを示していよう。

詳しくは後述するが、古宿遺跡で確認された遺構は、配石遺構・屋外土器埋設遺構・各種のピットである。もとより調査は遺跡の一部分に留まっている。調査区は遺跡の東端の一部に設定された。調査区は幅7から8m、長さ約100mにわたる。調査区の南端において炉跡が一基検出されている（第3図参照）。その他調査区内では、住居跡は検出されていない。炉跡は、おそらく住居内に付設されていたものとみてよからう。炉跡近辺には、住居跡群の存在が予想される。このことは、集落の一部に特殊な遺構群（墓抔群など）の占用区域の存在を示唆するものであろう。

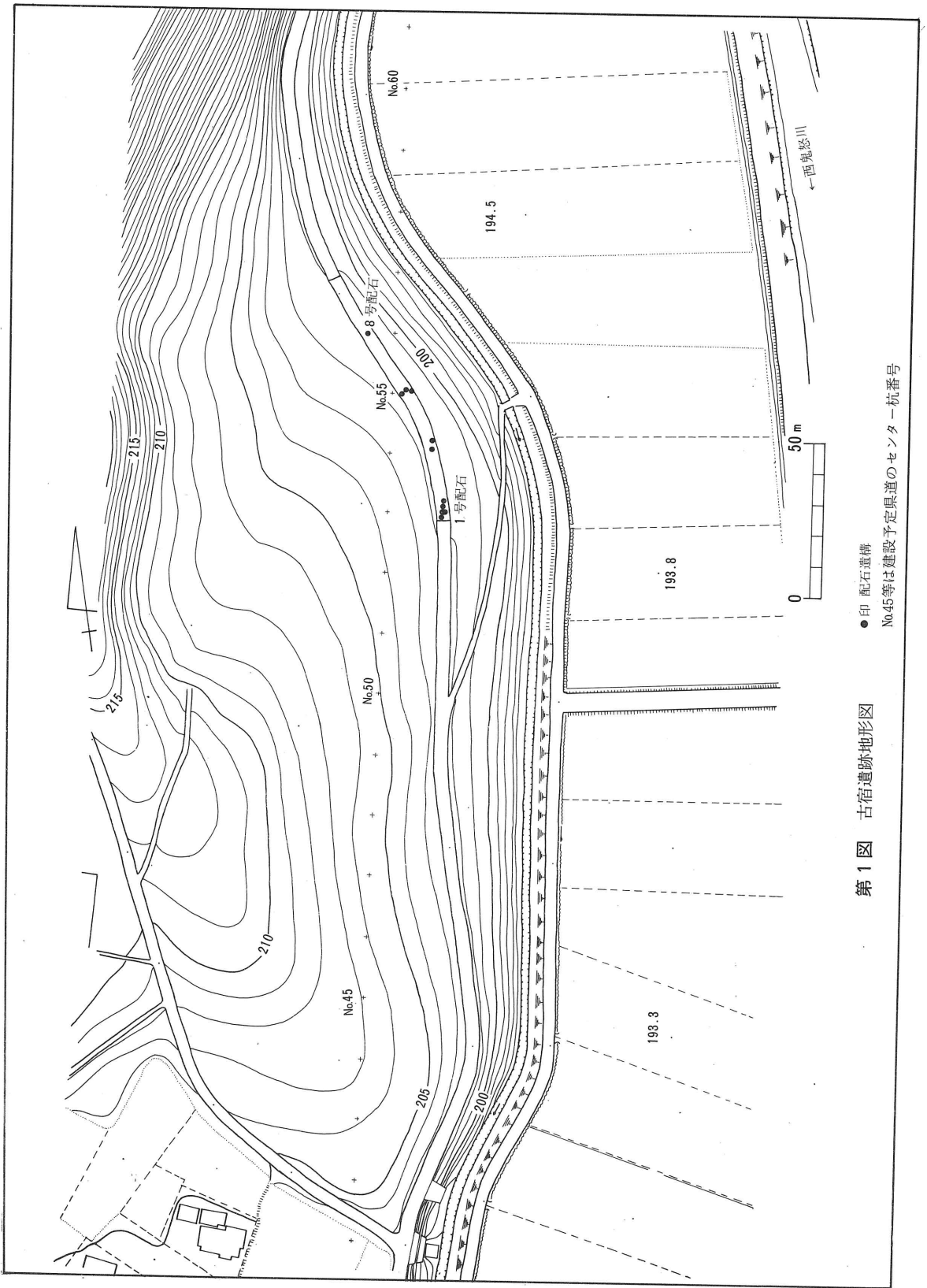
第2節 基準土層と遺物包含層

今回の調査区は、そのほとんどが村道の下面になっており、表層土層の観察は必ずしも充分ではない。ただ調査区より少々離れた位置に試掘坑を数ヶ所設けた。また調査区のはぐ中央に水道管を埋設する際のテストピットが既に設けられていた。これらの各々の壁面観察を総合してわり出した土層柱状図が凡例及び第4, 12, 18図のものである。この柱状図は、おそらく遺跡全体のかんりの部分まで敷衍できるものと考えている。

試掘坑は最高で1.6m程、七本桜軽石層まで掘下げてある。そこまでの土層について少し詳しく述べれば次のとおりである。

土層は大きく表土層、漸移層、七本桜軽石層に分けられる。これらのうち表土層は層厚約1.3mをはかり、更にいくつかに分層できる。それらを便宜的に0～Ⅳ層と命名した。0層は腐植土層であり、調査区内では道路砂利敷時に取去られている。Ⅰ層及びⅡ層は褐色から暗褐色の色調で、木の根などの浸出の多い層である。Ⅲ層は黄褐色色調の土層で、花崗岩系統の角礫を多量に含む層である。Ⅳ層は黒褐色に近い色調であり、下位には軽石粒を多量に含んでいる。遺物はⅠ層下位からⅣ層上位まで含まれていた。但し、全包含層を通じて遺物が均等に含まれているわけではない。とくに、Ⅰ層下位からⅡ層、Ⅲ層中位からⅣ層上半と二枚の集中部位を窺うことができる。この集中部位各々に含まれる遺物、とくに土器型式などは各層傾向を持つ。それについては後述する。ここでは仮りに、前者を上位包含層、後者を下位包含層、間層を中位包含層と呼称する。

これらの各層と遺構の検出層（確認層）とを照らし合わせてみると、配石及び屋外土器埋設遺構については、Ⅰ層下位からⅡ層上面にあり、ピットについてはⅠ層下位からⅡ層



第1図 古宿遺跡地形図

●印 配石遺構
 No.45等は建設予定県道のセンター杭番号

上位のものと、Ⅲ層上位にあるものの二種あることがわかる（第4，12，18図）。配石・屋外土器埋設遺構及びピットの一部は上位の遺物包含層に、ピットの一部は中位或いは下位の包含層と係わりの深いことがみてとれる。なお、炉跡はⅠ層下位にて検出されている。配石下のピット、ピットの底面そして屋外土器埋設遺構の掘方底面はⅢ層上位からⅤ層下位まであり、遺構の種類による規則性はない。

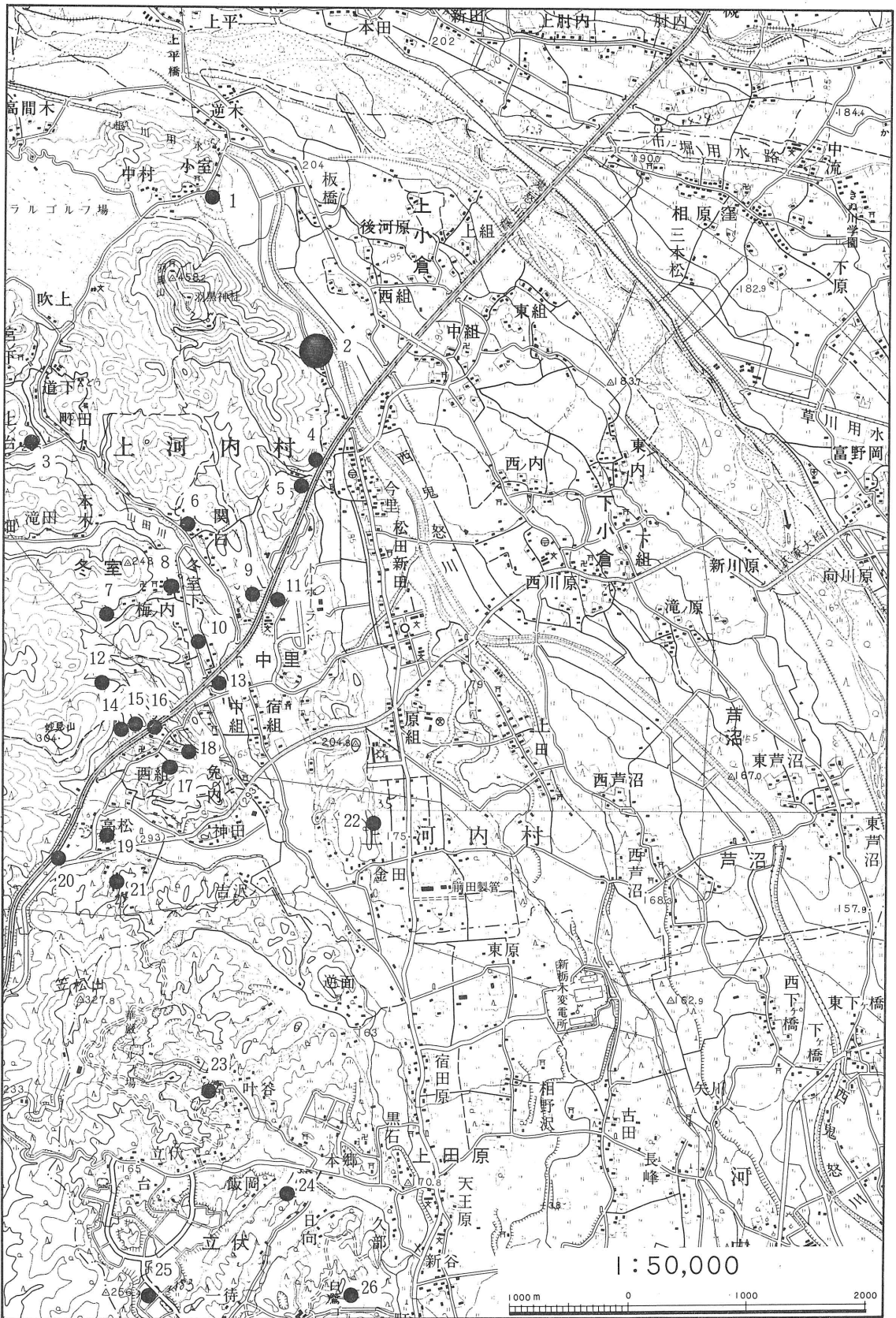
Ⅵ層以下は、七本桜軽石層・今市軽石層・火山灰層・暗色帯（B.B.）・火山灰層・段丘礫層と続くものと考えられる。

第3節 周辺の遺跡群（第2図，第1表）

古宿遺跡周辺の遺跡については、第2図のような分布を見せることが知られている。各遺跡についての概略は第1表に載せた。これらの遺跡は原則として縄文時代のものに限った。

上河内村は、東半の平地・西半の山地と地形的に二大別できることは前に記したとおりである。東半の平地といっても一様の地面ではない。現鬼怒川・西鬼怒川の両岸に広がる氾濫原，低位段丘と多少の起伏を窺うことができる。遺跡の分布状況をみると、西半の山地にくらべて東半の平地は極端に稀薄であることがわかる。現在，上河内村には総計67個所の遺跡が確認されている。そのほとんどは西半の山地に分布しているわけである。西半の山地もその山麓は，中小河川による浸食が進み，狭長な小谷が発達している。これらは全て，山田川に注ぐ小河川によってつくられた支谷になっている。山田川は，宮山田吹上或いは石那田付近に源流を持ち，金田と河内町逆面に挟まれた部分まで，北北西から南南東に流路をとる。山田川は流路の各屈曲部毎に小規模な河成段丘を形成している。遺跡の大半はそのような河成段丘上に立地している。もう一個所，上河内高松付近の段丘上平坦面には，割合大規模な遺跡が立地している（梨木平遺跡など）。

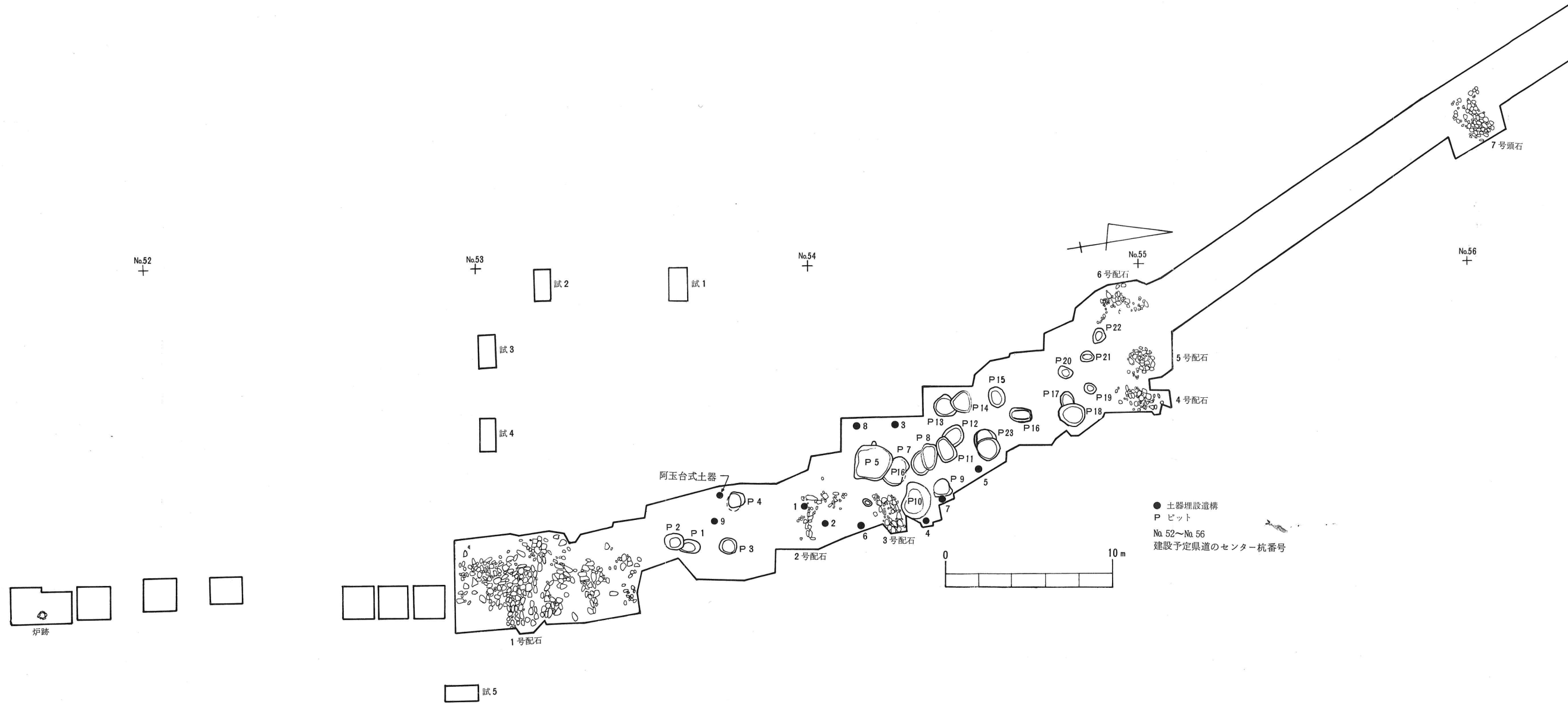
総数67個所の遺跡のうち約60%にあたる40個所が縄文時代の遺跡である。このうち既に発掘調査が実施されある程度その内容の解っているのは，梨木平遺跡，山向遺跡，古宿遺跡の三個所のみである。これらも調査は各々の遺跡の一部に実施されたに過ぎない。梨木平遺跡，古宿遺跡は，それぞれの調査個所の性格（集落内での位置，時期幅など）は異なっているものの，大規模な拠点的な遺跡のひとつとみて良からうと思う。他の遺跡については，分布調査による資料から判断せざるを得ないものの，宮山田橋場遺跡，冬室地内の冬室遺跡など同様の傾向を見せる。



第2図 古宿遺跡周辺の遺跡群

第1表 周辺の遺跡群一覧表

	遺跡名	所在地	概要	備考
1	宮前	上河内村宮山田・小室	縄文時代中期集落跡	
2	古宿	上河内村今里・古宿	縄文時代中・後期集落跡	昭和53年発掘
3	橋場	上河内村宮山田・橋場	縄文時代中期集落跡	60×150 m
4	高尾前	上河内村今里・高尾前	縄文時代中・後期、奈良・平安時代散布地	高速道にて半壊
5	山向	上河内村今里・山向	縄文時代早～後期、奈良・平安時代集落跡	昭和51年発掘
6	関白北	上河内村・関白	縄文時代中期小集落跡	40×50 m
7	西山B	上河内村冬室	縄文時代中期、奈良・平安時代集落跡	
8	水無	上河内村冬室・水無	縄文時代中期、奈良・平安時代散布跡	
9	南山	上河内村関白・南山	縄文時代中・後期、古墳時代集落跡	50×70 m
10	冬室	上河内村冬室・水無	縄文時代中期、奈良・平安時代散布地	150×350 m
11	鶴ヶ峰I	上河内村関白・鶴ヶ峰	縄文時代後期、奈良・平安時代集落跡	80×50 m
12	西山	上河内村中里・西山	縄文時代早～後期集落跡	
13	西保育所裏	上河内村中里・免の内	縄文時代中期、奈良・平安時代散布地	20×50 m
14	右岡II	上河内村中里・右岡	縄文時代後期、奈良・平安時代集落跡	
15	右岡I	〃	縄文時代後期集落跡	
16	沖の下	上河内村中里・沖の下	縄文時代中期、奈良・平安時代集落跡	高速道にて一部破壊
17	向山	上河内村中里・向山	縄文時代早～後期、奈良・平安時代集落跡	
18	畑中	上河内村中里・畑ケ中	縄文時代後期集落跡	
19	梨木平	上河内村高松・梨木世	縄文時代前・中期、奈良・平安時代集落跡	昭46・47・48 発掘
20	カワラケ篠	上河内村高松・カワラケ篠	縄文時代中期、奈良・平安時代集落跡	
21	吹上B	上河内村高松・吹上	縄文時代後期、奈良・平安時代集落跡	
22	金田	上河内村金田	縄文時代後期集落跡	30×30 m
23	叶谷A	河内町叶谷	縄文時代中期集落跡	
24	立伏A	河内町立伏	縄文時代前期散布地	
25	カケスタヤA	河内町立伏カケスタヤ	縄文時代中期散布地	
26	日向A	河内町上田原・日向	縄文時代集落跡	



第3図 古宿遺跡発掘調査検出遺構配置図

第4節 遺跡の時期区分

今回の古宿遺跡調査で出土した土器片は、阿玉台式から加曾利B式にわたるものである(各型式毎の出土比率は第4章第1節を参照)。これらは標準土層I層下位からIV層上半に包含されていた。更に、包含層を詳細にみると、I層下位からII層、III層中位からIV層上半と二つの集中部位を窺うことができる。前者を上位包含層、後者を下位包含層と呼び、その間層(III層上位)を中位包含層と呼称する。そして、各包含層に含まれる土器は次のとおりであった。

- ・上位包含層 加曾利E IV式から堀之内式段階
- ・中位包含層 加曾利E II式から加曾利E III式段階
- ・下位包含層 阿玉台式から大木8 b式段階

更に、各遺構の検出層(確認面)をみると、I層下位からII層上位とIII層上位の二面確認することができる。つまり、上述の包含層上位と中位及び下位に深い係わりがあるとみることができるのである(詳しくは各遺構の項参照)。

これらの示唆することは、本遺跡には大まかに三段階の変遷があるということである。これを仮に古宿第1段階、同第2段階、同第3段階としたい。つまり古宿第1段階は阿玉台式から大木8 b式の時期、同第2段階は加曾利E II式からE III式の時期、同第3段階は加曾利E IV式から堀之内式の時期となろう。加曾利E IV式を堀之内式とともに古宿第3段階とするのについてはかなりの異論があろう。それについては後述する。ここでは本遺跡の調査からはこういった傾向が指摘できるとのみ記しておく。

今後本書を記述するにおいては、この三段階区分を基本とする(とくに遺構の記述)。今後本遺跡をより広範囲に調査できることがあれば、この三段階区分はある程度裏付けられるものと考えられる。

第3章 調査の経過等

第1節 調査の方法

今回の調査は、羽黒山南東麓を南北に走る村道部分が対象であった。羽黒山南東麓には南北約150m、東西約120mの平坦な台地が開けている。遺跡はこの平坦面上に立地しているわけである。調査は最大幅でも7m程度の村道下のみを実施された。遺跡全体からすればかなり小範囲ではある(調査対象面積約650㎡)。遺跡全体の約25分の1となる。

また調査地は台地の縁にあたり、遺跡の中心からは離れた場所となっている。但し遺跡の載る台地の北方・西方・南方は急な山斜面によって区切られているため、東にのみ開ける地形となっている。つまり遺跡内に立てば東方のみ眺望が開けるわけである。従って、調査地は遺跡の中心より多少離れた位置にあったとしても、かなりの遺構の存在が予想できた。このため、調査面積に比べ調査期間は約一ヶ月とやゝ長期的な予定を組むことが必要となった。

調査方法はグリッド法を基本とした。グリッドは2m×2mを最少単位とした。グリッド設定の基準に、近々工事予定の県道バイパスの中心杭ラインを置いた。県道バイパスは第3図に示すように今回調査区の西方—遺跡のほぼ中心を南北に建設予定されている。県道の中心杭ラインの方向をグリッドの南北ラインの方向と一致させた。つまりいずれ調査されるであろう県道バイパス予定地内の調査区と今回調査区との関連がつきやすいように考慮したわけである。

グリッドはその最少単位を2m×2mとし、南北5個・東西5個合わせて25個(10m×10m)の大グリッドを設定した。大グリッドは台地東縁(つまり遺跡東縁)南北方向をA列とし、西側にB列・C列・D列……と命名した。同様に東西方向を南端(つまり遺跡南端)よりローマ数字のI列・II列・III列……とした。つまり遺跡の南西隅にあたる大グリッドはA—Iグリッドとなる。更に県道センターラインはC列にあたる。この大グリッドを更に5個×5個に小区分した。東西方向を東側よりa列～e列と呼称し南北列を南側からアラビア数字の1列～5列とした。つまり遺跡の南西隅にあたる小グリッドはA I—a 1グリッドとなる。前と同様に県道センターラインは、C列の中でもc列西側ラインにあたる。

今回の調査区は、第24～26図のようにA IVグリッドからEXVグリッドにわたる。実際に調査したのは第24～26図の太線の枠内である。その範囲内での確認遺構は第3図遺構配置図のとおりであった。第3図最も南側炉跡の検出されたグリッドはA IV—c 2グリッドとなる。A IV

グリッドより以南の村道部分は、道路構築時削平などの地形変更がかなりなされており、遺構の確認は出来ないと判断し、今回は調査を実施していない。

調査開始にあたっては、村道区域外（つまり調査対象地外）に表土の厚さや標準的な土層を確認するため計5個所の試掘坑を設けた。その位置は第3図の試1～試5にあたる。また調査区は村道下にあたり、砂利が一面に敷詰めてある。敷砂利除去のために調査開始前に重機を利用した。関東ローム層までの深層の調査は試1などを利用した。

第2節 調査の経過

昭和53年2月20日

調査担当者上河内村公民館に集合し、調査器材などの準備・調査範囲・期間の確認を行なう。打合せ後現地踏査、採集できた遺物の量からかなり大規模な遺跡の所在が予想された。

昭和53年2月25日

調査の補助員を依頼した宇都宮大学の考古学研究会のメンバーが到着。調査方法などの検討を行なう。

昭和53年2月26日

前日同様調査の補助員を依頼した専修大学考古学研究会のメンバーが到着。調査区に重機を入れ表土剥ぎ。

昭和53年2月27日

現場事務所へ器材運搬。調査区外に5ヶ所の試掘坑を設け堆積土層の確認を行なう。調査区内にグリッド基準杭を設定。試掘坑よりは多量の遺物が出土し、多数の遺構の存在が予想される。

3月1日（水）～3月10日（木）

各グリッドを掘下げて遺構の確認

1日 作業開始

2日 AIXグリッド、BIXグリッドより土器埋設遺構及び配石遺構検出。

3日 多数のピット群確認されるが、全て黒色土中に確認面があるので慎重さを要する。

6日 配石遺構のうち石囲炉のように細長い河原石を並べたものがあり、住居跡か否か議論となる（3号配石）。

7日 ピットの切合いが多く、更に黒色土中にあるためサブ・トレンチを入れながら確認を急ぐ。

8日 4号～6号配石続々と検出される。4号および5号配石は今までの配石にくらべ円形乃至楕円形と整備されたものである。

9日 確認された遺構に番号を付ける。配石遺構6ヶ所、土器埋設遺構5ヶ所、ピットは20数ヶ所である。

3月11日～3月20日 (17日～18日は雪のため作業中止)

各遺構の調査を実施。主として配石の調査

11日 全体測量のための杭を設置

12日～15日 各配石の調査を実施したわけであるが、配石下にピットを有するものとしてそうでないものがあることが判明。

16日 本日より土器埋設遺構、ピットの調査を開始する。

19日～20日 調査完了した遺構について実測・写真撮影を実施。

3月21日～3月31日 (22日・23日・27日～28日雪及び雨のため作業中止)

前回に引続き遺構の調査、21日よりは全測図作成開始。

21日 土器埋設遺構・ピットの調査。5号配石そばより垂飾検出、配石間と配石下ピットより称名寺Ⅱ式土器検出。

30日～31日 AⅦグリッドを中心に大形の配石遺構を確認。今までの配石よりはかなり大規模である(1号配石)。規模は南北10m、東西6m程度である。全体でひとつの配石ではなく、いくつかの小配石の集合と考えられる。

20日 専修大学学生帰途につく。

31日 宇都宮大学の大半の学生帰宇。

4月1日～4月10日 (6日は雨天中止)

全測図作成と1号配石の調査を実施。調査は4月10日に終了。

第4章 検出した遺構

第1節 配 石

配石遺構の概要

配石遺構は総計7個所検出した。これらは、調査区全域に規則的に配列されているのではなく、1号・2号と3号・4号から6号と幾つかずつまとまりのある様子が窺える。なかでも1号配石などは、数個の配石ブロックが近接して構築されているため、全体でひとつの大きなブロックのようになってしまっている。

各配石の検出層位はI層の下位よりII層上面に亘る(第4図)。これは、上位の遺物包含層(本文第2章第2節参照)の上半に位置づけられる。I層下位にて確認されたのは2号配石・3号配石である。他の配石は全てII層上面で確認された。

各配石が幾つかずつまとまりをみせることは前に記した。これは各配石がそれぞれ個別に存在するのではなく、いくつかの配石ブロックが集合してひとつのユニットを形成する存り方を示しているのであろう。つまりひとつのユニットを構成する各配石間には何等かの関連を考えなければならない。そのような観点から、今回検出したものをみると、1号配石ユニット、2号・3号配石ユニット、4号～6号配石ユニット、8号配石ユニットと少なくとも4個所の配石ユニットを想定できる。こうした存り方にも、大きく二種類窺えそうである。ひとつは、1号配石のように各配石ブロックの近接の度合の高いものである。つまり、全体でひとつの大きな配石ブロックのようにみえる。ひとつは、2号・3号配石ユニット、4号～6号配石ユニットのように各ユニットを構成する各配石ブロックの単位の明確なものである。1号配石については後述するように計5個の配石ブロックを数えることができる。従って、各配石の形態等についてみるときそれらを便宜的に1号—A配石ブロック～1号—E配石ブロックと呼称する。どのように分けたかは1号配石の項で述べる。配石の形態等についてここで述べておく。

・配石に使用した礫及び礫の配し方については次の二種類窺える。

1) 偏平な同程度の大きさの円礫を平面的に配したもの

1号—B配石, 1号—C配石, 3号～5号配石, 7号配石の計6個所

2) 角礫(板石等を含む)や不揃の大きさの河原石を一種のケルン状(乱雑な配し方)に配したもの

1号—A配石, 1号—D配石, 1号—E配石, 2号配石, 6号配石の計5個所

但し、2号・6号配石については、或いは後世の攪乱などを考慮する必要がある。

・配石下のピットの有無については次のとおりである。

- 1) ピットを有するもの
3号配石下に1基, 4号配石下に1基, 5号配石下に3基
- 2) ピットを有しないもの
2号配石, 6号配石, 7号配石

なお, ひとつの配石下にはひとつのピットとは限らないようである。また, 1号配石については, 調査期間の制約上配石下のピットの有無を確認するに至らなかった。

以上のような種類分けができるものの, 礫の配し方・使用礫の種類・配石下ピットの有無について, それぞれ相互に何等かの関連性を見出すことは今のところできない。ただ, 平面的に配するためには, 大きさの揃った円礫を, ケルン状に配する場合は角

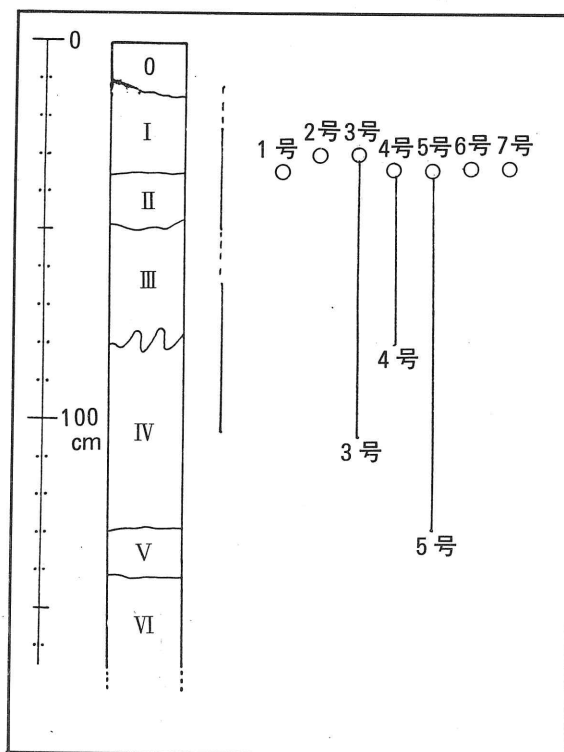
礫或いは大きさの不揃いの礫を使用するというような差異は窺えそうである。

配石の时期的な問題について示唆をみせるのが, 2号配石と1号・2号屋外土器埋設遺構との関係である。更に5号配石間及び配石下のピットより出土した土器などが参考となろう。それらについては後述するが, 配石から土器埋設遺構へという新旧が窺えそうである。

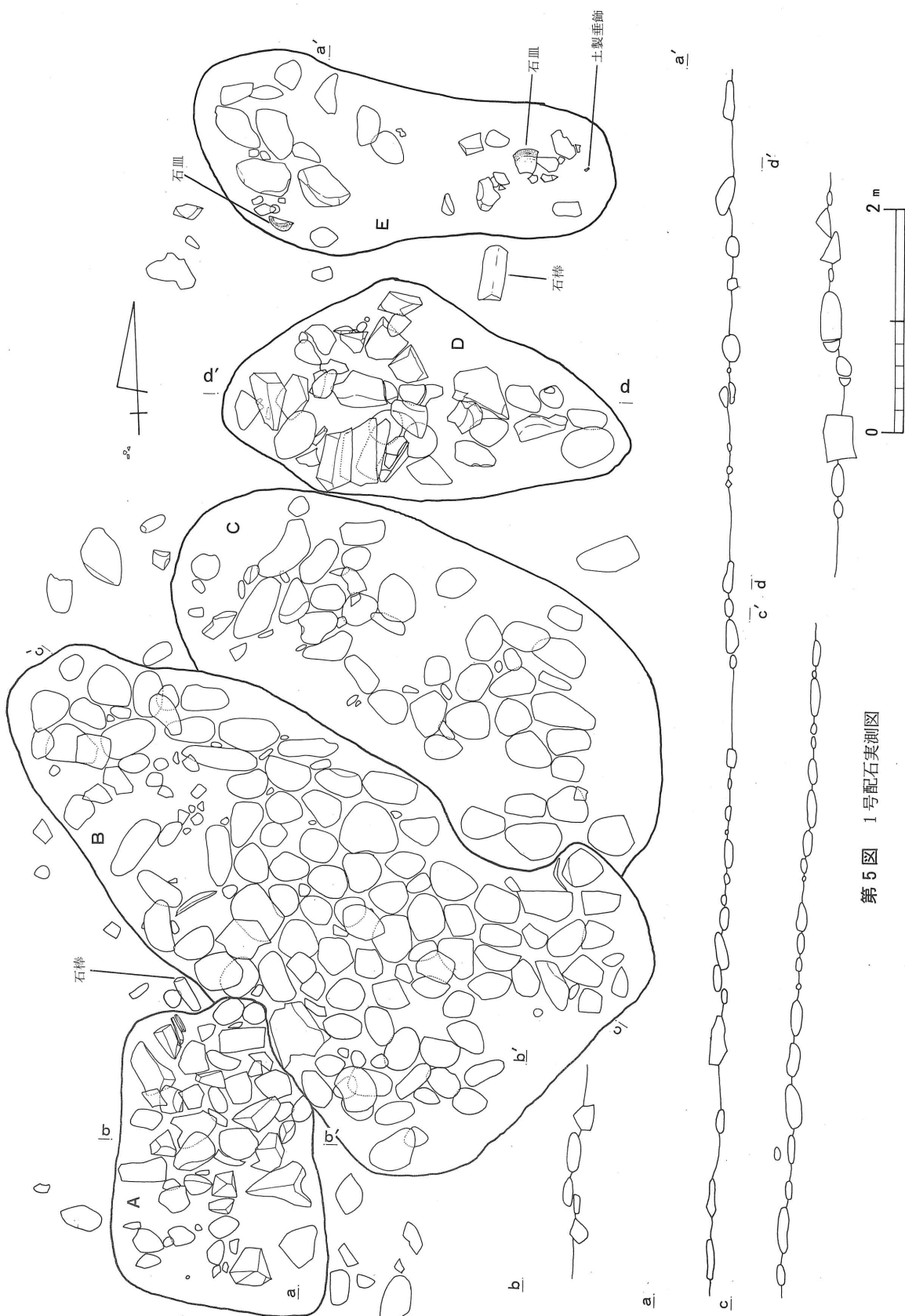
1号配石 (第5図, 図版3~6)

調査区の南部で検出された遺構である。南北約11m, 東西最大幅約5.8mの広がりを持っている。この広がりには計5個の配石ブロックの集合とみることができる。5個の配石ブロックを南側よりAブロック, Bブロック, Cブロック, Dブロック, Eブロックと呼称する(第5図)。各ブロックとも検出層位はII層上面である。これは屋外土器埋設遺構や一部のピットと一致する(第4章第2・3節を参照)。この層位は, 上位の遺物包含層に含まれる。また, いずれのブロックにも立石等の施設は確認されない。

AブロックとDブロックは, 角礫或いは板石(花崗岩, 砂岩など)をほぼ円形に積み上げたものである。Aブロックは径2m, Dブロックは径1.8m程度となっている。Dブロックは円形配石の東側に接して9個程度の礫を配した細長い施設を作っている。同様にA



第4図 配石の検出層位



第5图 1号配石实测图

ブロックではその南側に10数個の礫が乱雑に置かれている。Aブロックの北側、Dブロックのすぐ南側からは、大形の石棒破片が出土した。

BブロックとCブロックは、北西から南東へ長い配石である。Bブロックは長さ約6m、幅約2.9m、Cブロックは長さ約3.9m、幅約2mをはかる。両者とも使用された礫は最少15cmから最大30cmの偏平な円礫である。この円礫が平面的に配されていた。Bブロック、Cブロックとも細部を良くみると、小配石がいくつか集合したもののように見える。とくにCブロックには3個程度の小配石が数えられる。

Eブロックは最も北側にあった配石である。東西2個所の集中分布を窺える。但しいずれもそれ程密接な配し方はしていない。東・西2個所の集中分布各々に大形の石皿破片を含んでいた。更に東側には土製の垂飾(第55図1)が一点出土している。

礫の配し方は、A、Dブロックについては円形にケルン状に積上げられたもの、B、Cブロックは平面的に配されたものとする事ができよう。なおEブロックについては、それ程の集中を窺えないので良く分からないが、B・Cブロックと同様とみることができる。

配石下のピットの有無については、調査期間の制約により確認できなかった。

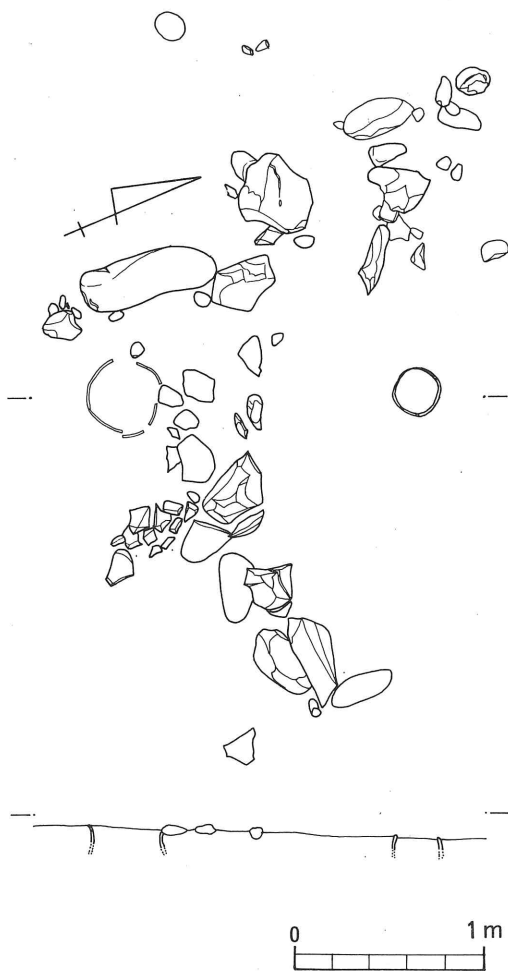
配石中よりは、総計384片の土器片と21点の石器及び20点の土製品が出土している。石器は打製石斧2点、磨製石斧2点、磨石兼敲石3点(うち凹石は1点)、石皿10点、切目石錘1点、台石1点、石棒2点である。このうち石斧、石皿、石棒はいずれも破損品であった。配石中に投棄されたものではなく、配石に使用された礫と同様に扱われたものであろう。土製品としては、土器片錘3点、土製円盤15点、垂飾1点となっている。

土器片384片の内訳は古宿第1段階110片(28.6%)、第2段階88片(22.9%)、第3段階208片(54.2%)、第3段階のうち後期のものは176片(第3段階中84.6%)となる。各段階とも大差はないが、第3段階とくに後期に含まれるものが多くなる。その中でも堀之内I式期のものが最多となっている。

これらの遺物は、配石の中より出土したということであり、配石自体に伴うものか否かは問題の大きいところであるが、その最多数の時期と検出層位から配石の時期を推量することは可能と思う。検出層位とあわせて、1号配石の時期は上位の遺物包含層の時期つまり加曾利EIV式から堀之内式に比定されよう。

2号配石（第6図，図版6）

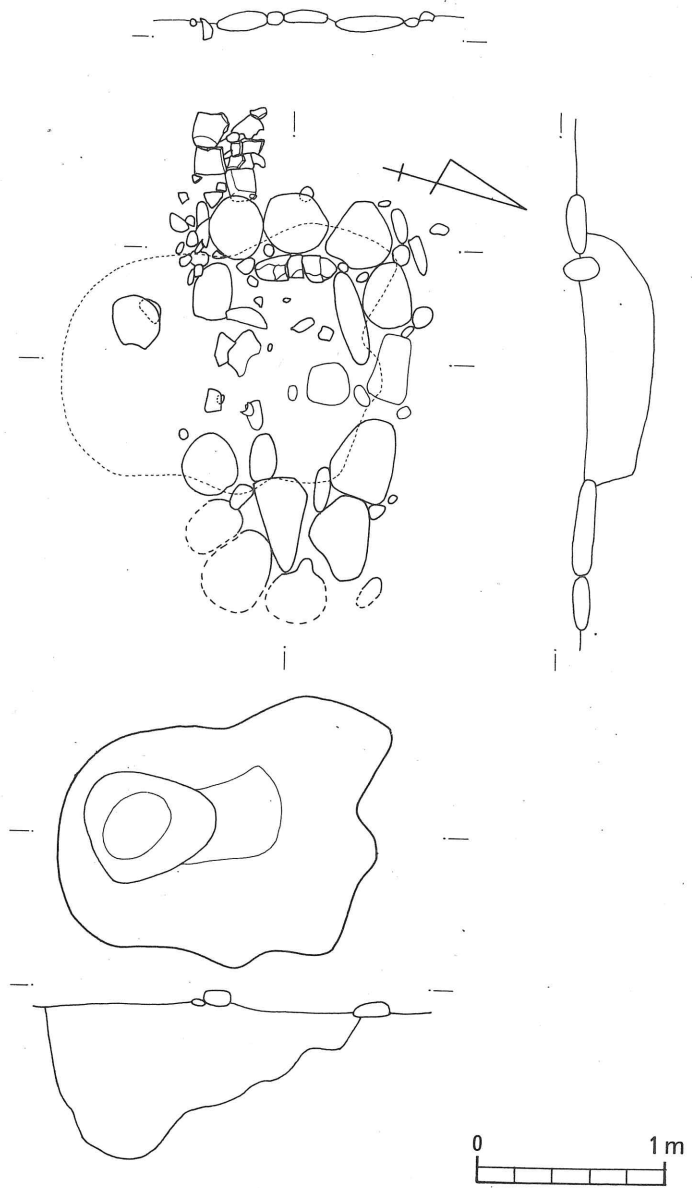
1号屋外土器埋設遺構，2号屋外土器埋設遺構に接近して検出した。最小10cm径から最大40cm径程の大きさの不揃いな礫を使用したものである。長さ70cm程の河原石が含まれていたが或いは立石として使用されていたのかもしれない。この配石は，土器埋設遺構構築時点で破損されたようである。それは，土器埋設遺構の上面よりは，配石の下面の方が層位的に深かったこと，配石は大小の礫が乱雑に置かれたようであったことから了解できる。配石の検出層位はI層である。配石下にピットはつくられていない。この配石は土器埋設遺構とはおそらく関係しない。土器埋設遺構の時期（堀之内I式新段階）よりはやゝ先行するものと考ええる。配石の中よりの出土遺物は，石皿破片1点，棒状石製品1点のみであった。



第6図 2号配石、1号・2号土器埋設遺構実測図

3号配石（第7図，図版7）

調査区のほぼ中央にて検出した。径30~40cm程度の扁平な円礫と長方形の礫を組合せて大略長方形に配置したものである。配石の長さ約2.4m，幅約1.2mをはかる。配石の検出層位はII層上面であった。配置された扁平な円礫は計14個確認したが，配石中央部は空白となっており，扁平な円礫でその周囲を囲んだような配置の仕方である。更に中央空白部の北西隅及び西には長さ40cm程の楕円礫を中央空白部を圍繞するように配置している。あたかも，中央空白部を意図的に作ったようである。配石西コーナー近くにて堀之内I式の土器が出土した他に立石等の施設はなかった。



第7図 3号配石及び配石下ピット実測図

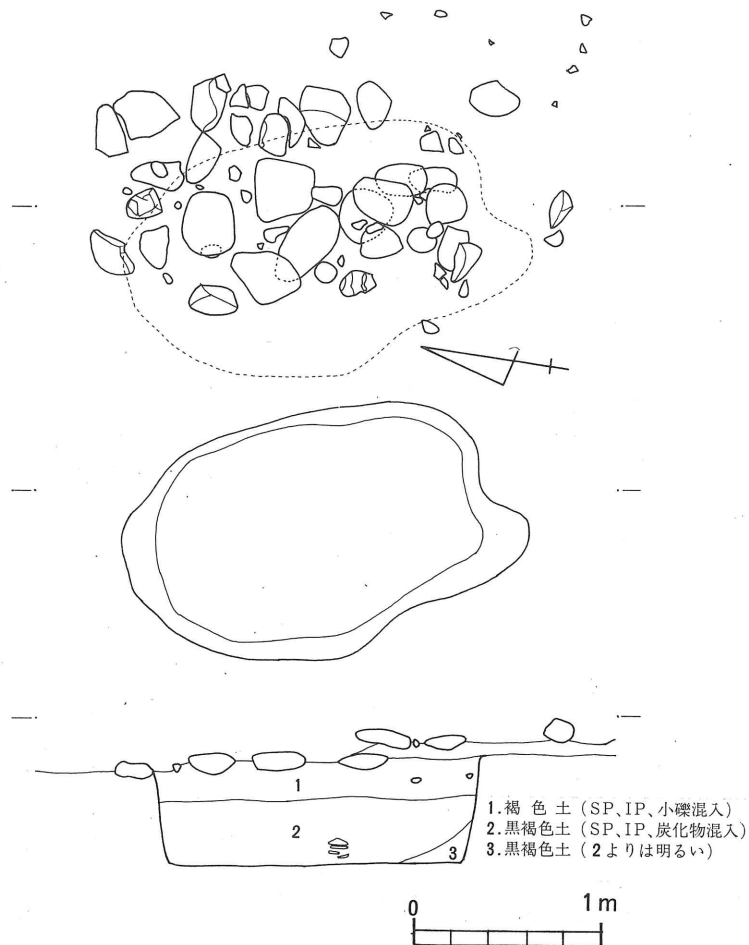
配石下には、配石の長軸方向に直交するように平面形不整な長方形のピットを検出している。ピットは配石直下に接するように掘下げられているため、配石に伴うものと見て良からう。ピットの断面形は大略逆三角形である。またその最深部もピット的一方に偏っているなど、それ程整備されたピットではない。ピット内埋積土は暗褐色の色調で、周囲のプライマリィ土層と明瞭に区別できるものではない。これは、ピット掘削の後即埋戻され

たことを示していよう。ピット最深部はIV層中位につくられている。

出土遺物は、配石間より主として多かった。礫石錘1点、土製円盤7点の他、総計82片の土器片となっている。82片の内訳は、古宿第1段階24片(29.3%)、同第2段階9片(10.9%)、同第3段階48片(58.5%)の他中期1片となる。第3段階に含まれるもののうち最も多量なのは後期堀之内I式の27片である。このことと配石検出層位を併せ考え、配石の構築時期は古宿第3段階とするのが適当となる。とくに、配石に接していた土器から、後期初頭堀之内I式の古い段階の可能性を指摘し得る。

4号配石 (第8図, 図版8, 10)

5号配石の東側約2mに検出した。最小径10cm程度から最大径40cm程度の大小の礫を大略長方形に配置したものである。配置の仕方も隙間なく敷詰めたものではなく、まばらに



第8図 4号配石及び配石下ピット実測図

見える。立石や配石内の区画などの施設はない。配石の大きさは長さ約2 m、幅約1.4 mとなっている。配石検出層位はⅡ層上面となる。

配石直下に接してひとつの不整楕円形のピットを構築している。長さ約2 m、幅約1.5 mを測る。ピットは配石直下よりやや西に偏して構築されている。ピットの壁は直立し、断面形は長方形に近い。ピット内埋積土は概ね3層に分けられるが、いずれも褐色系であり、周囲のプライマリィ土層と明瞭には区別されない。これは3号配石下ピットと同様掘削後即埋戻されたことを意味している。埋積土2層中よりは、称名寺から堀之内式までの土器片を出土する。

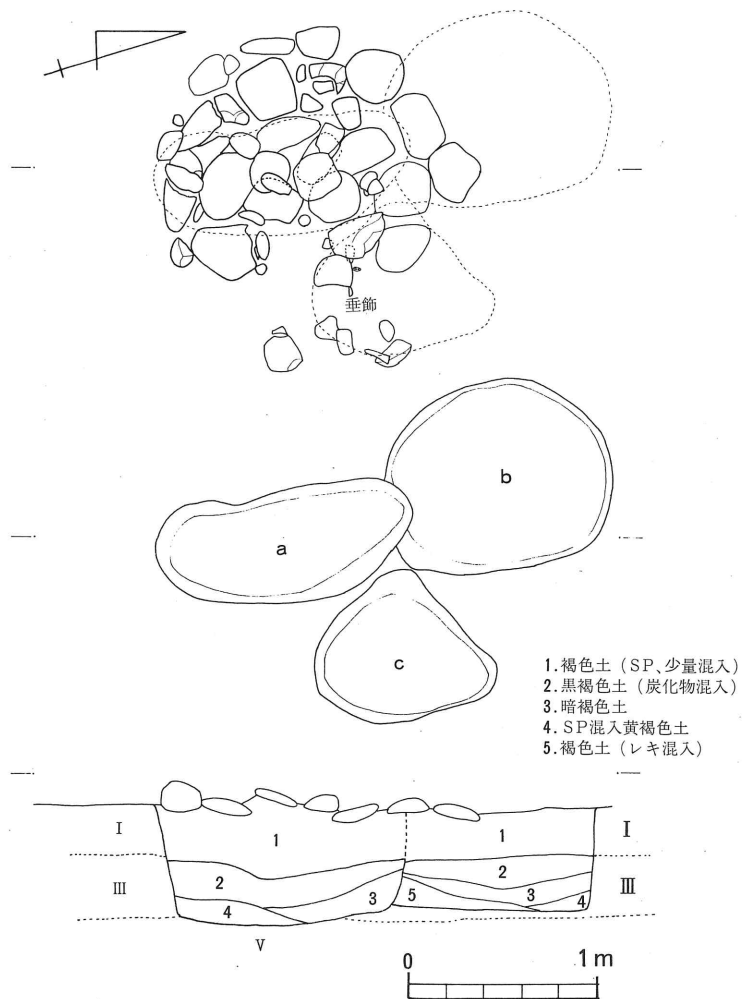
配石間及び配石下ピットよりは、総計15片の土器片が出土した。その内訳は、古宿第1段階3片、同第2段階3片、同第3段階9片となる。第3段階のうち堀之内式土器片が5片と最も多い。未だ説得力には乏しいものの、配石検出層位と併せて、4号配石の構築時期は、古宿第3段階とくに後期の可能性が高い。

5号配石（第9図、図版9、10）

4号配石の西方約2 mに検出した。大小45個の河原石をほぼ円形に配置したものである。長径約1.8 m、短径約1.5 mを測る。東側一部が破損しているものの、整然とした配置の仕方である。使用礫は大半が扁平な円礫で、径5 cmから径40 cm程度のものである。配石の検出層位はⅡ層上面であった。立石等の施設は窺えない。また円礫は平面的に配されている。

配石下には、3個のピットが構築されている。これを仮にa、b、cピットと呼称する（第9図参照）。aピットは長径1.4 m、短径0.6 mの長楕円形の形状であり、断面形は鍋底状を呈している。bピットはaピットによって切られており、長径約1.2 m、短径約1 mの大略楕円形である。断面形はaピットと同様となる。cピットは一辺約0.8 mの三角形形状であった。断面形はやはり鍋底状となっていた。a、b、c三者とも配石下面に接している。但し配石直下にはaピットのみが構築され、b、cピットはそれぞれ配石の北へ、東へ偏している。a、b、cピット三者とも底面はほぼフラットにつくられ、基準土層Ⅳ層上面に至る。

配石間及び配石下ピット（とくにaピットに大半）には次のような遺物が検出された。総計82片の土器、石皿破片1点（配石のひとつに使用）、台石1点、石製品1点（蛇紋岩製垂飾）、土器片錘1点、石鏃1点である。82片の土器の内訳は古宿第1段階16片（出土土器片総数の19.5%）、同第2段階（同様に23.2%）、同第3段階46片（同様に56.1%）、他中期1片となっている。古宿第3段階のうち、後期にあたるものが28片とその半数以上を占める。配石下aピットよりは称名寺Ⅱ式の土器片が出土している。出土土器片の量的構成、配石検出層



第9図 5号配石及び配石下ピット実測図

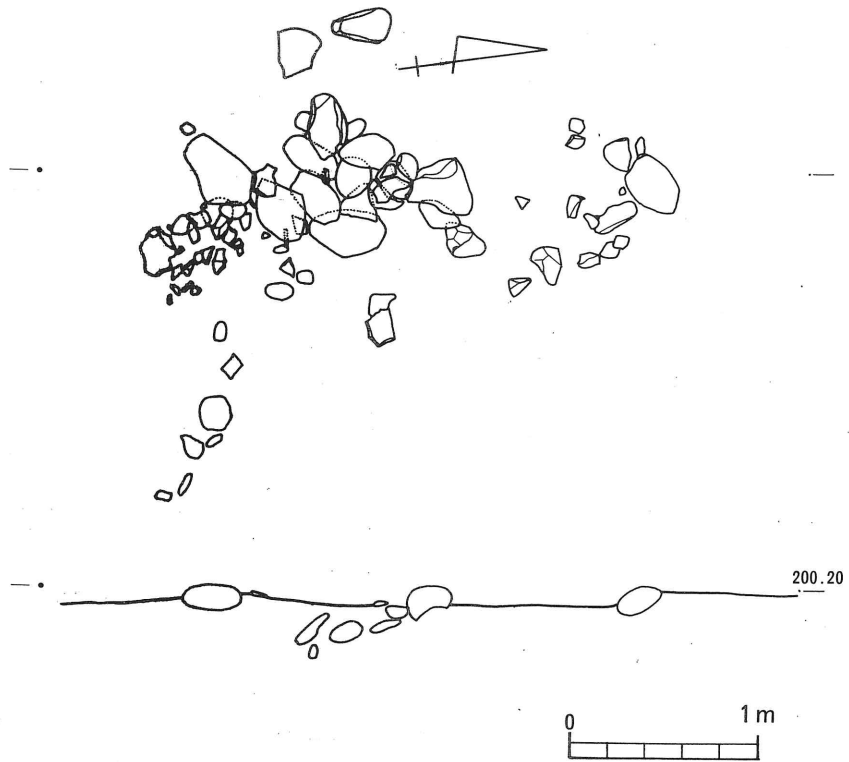
より、配石構築の時期は古宿第3段階以降とくに後期の可能性が高い。

なお、配石下の a, b, c ピット三者ともその埋積土は暗褐色系統であり、周囲のプライマリ土層とは明瞭に区別できない。このことは、ピット掘削後即埋戻されたことを示すものであろう。

6号配石 (第10図, 図版11)

5号配石の西約3.5mに検出した。最小3cm程度から最大40cm程度の大きさの不揃いの礫を一見乱雑に配したものである。配し方は2号配石に似ている。南北に細長く弧状に構築される。

配石下ピットや立石等の施設は確認されなかった。配石検出層位は基準層Ⅱ層上面にあたる。



第10図 6号配石実測図

配石間よりは次の遺物が出土している。総計64片の土器、石皿破片2点、礫石錘1点、土製円盤3点である。総数64片の土器の内訳は、古宿第1段階4片（土器片総数の6.3%）、同第2段階10片（同様に15.6%）、同第3段階49片（76.6%）、他中期1片となっている。第3段階のうち後期は37片とその半数以上を占める。

検出層位、土器片の量的構成より配石の構築時期は第3段階以降とくに後期の可能性が高い。

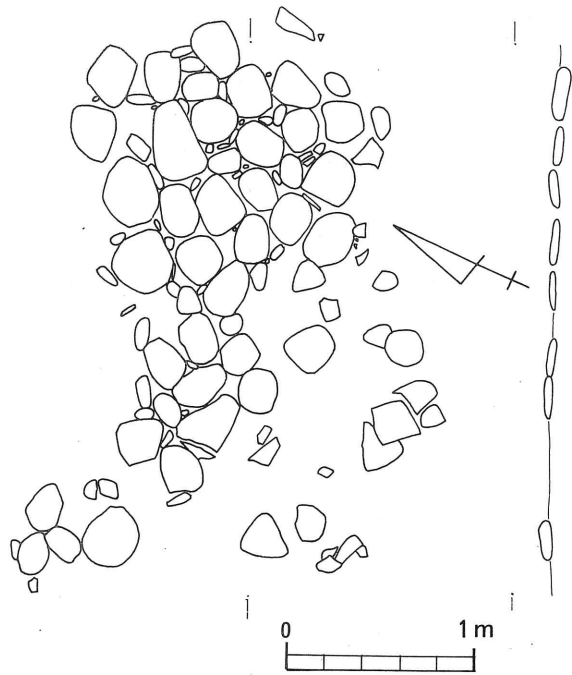
7号配石（第11図、図版11）

調査区最北に検出された遺構である。長径10cm前後の楕円礫と径20から30cmの偏平な円礫や楕円礫を使用している。これらの礫の偏平な一面を平らに配置している。配石の平面形は大略長方形に近く、長さ約2.4m、幅1.6mを測る。立石・配石下ピットなどの施設はなかった。配石検出層位は基準層Ⅱ層上面となる。

配石間からは、次の遺物が出土している。総計58片の土器、石皿破片2点、土製円盤3

点，土器58片の内訳は，古宿第1段階5片(土器片総数の8.6%)，同第2段階13片(同様に22.4%)，同第3段階42片(同様に72.4%)であった。第3段階の大半は堀之内期のものである。

検出層位，出土土器の構成から，後期構築の可能性が高い。



第11図 7号配石実測図

第2節 土器埋設遺構

土器埋設遺構の概要

土器埋設遺構は，調査区のおよそ中央ピット群の多く検出された地区に集中している。いずれも土器単体の埋設であり，埋設のための掘方は土器の外形に即した形状でつくられていた。但し，5号遺構と9号遺構については多少趣を異にしている。それについては後述する。また6号遺構から8号遺構までの三遺構については，調査区と区外との境界線上に検出されたため充分には調査されていない。これらは調査期限終了後の発見であったため，調査後踏査時に全体図内に出土位置を記入できたのみである。従って，出土状況図等の資料の提示はできない。ここでは，各遺構についての詳細な記述は避け，検出遺構の通有的特徴について記しておきたい。

各土器埋設遺構とも，検出面は古宿遺跡基準層のⅠ層下位にあたる。これは，古宿遺跡の遺物包含層上位層・中位層・下位層の三層に分かれるうち上位層中に含まれている。土器埋設のための掘方は2号遺構のみⅣ層上位まで至るが，その他は全てⅡ層中にある。

土器を逆に埋置したのは1号遺構のみであり，他は全て正位埋置となっている。また9号遺構を除き全ていずれかの部位が欠損している。1号遺構，2号遺構及び5号遺構は

胴部下半欠損，3号遺構及び7号遺構は胴部上半以上欠損，4号遺構は底部と口縁部の一部欠損，そして8号遺構は胴部上半，底部の双方欠損となっている。9号遺構については，別に土器埋置のための掘方はなく，横転した状態で検出された。場合によっては，単に廃棄されたものと見ることも可能である。9号遺構より出土した土器は，縄文のみ施された堀之内式深鉢形土器であり，ほぼ完形である。各遺構出土土器の欠損部位の状況は，1号遺構・2号遺構については土器の或る部位を丁度輪切りにしたような具合であった。割れ口については平滑に仕上げられている。他の土器は割れ口は平坦でなく，しかも平滑には仕上げられていない。

埋置された土器の時期は，8号遺構出土土器のみ称名寺式の可能性を留めているものの他は全て堀之内式の範疇に含めて良い。とく

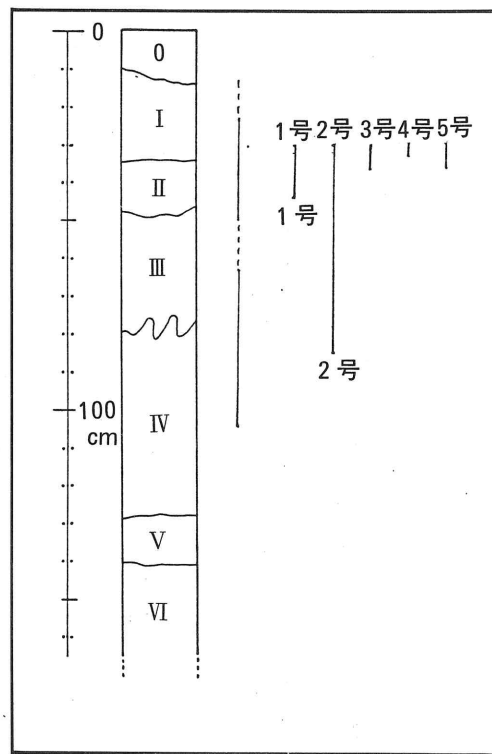
に3号遺構出土土器は堀之内Ⅱ式，他は堀之内Ⅰ式と理解している。

更に，土器埋設遺構は土器埋置をする他何等の施設もない。

1号土器埋設遺構（第13図，図版12）

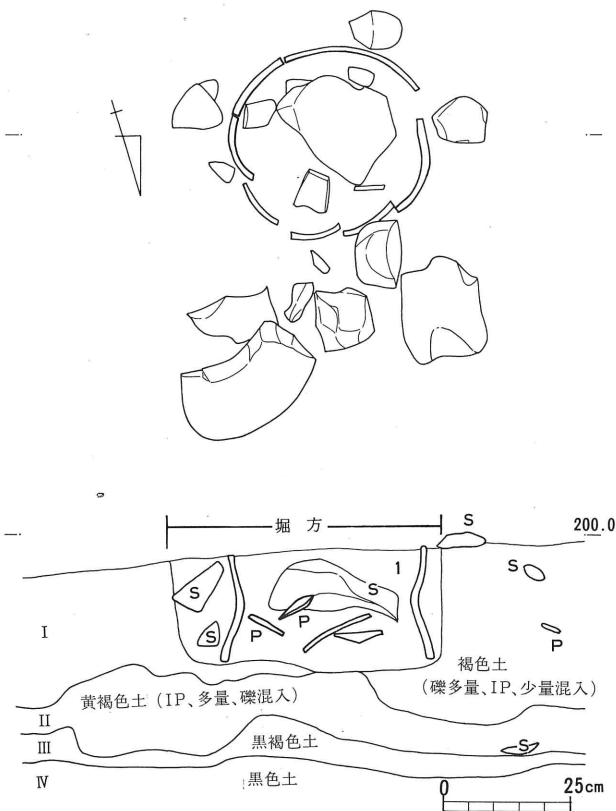
堀之内Ⅰ式の深鉢形土器を逆位に埋置している。土器は胴部上半を輪切りにしたものである。土器埋置のための掘方はあまり明瞭には窺えないが，埋置土器本体の外形とそれ程変わらない形状で掘込まれている。遺構は基準層Ⅰ層下位にて検出した。掘方の底面はⅡ層下位に至る。掘方の大きさは径53cm，深さ21cm程をはかる。

土器埋設遺構の土器内部の充填土，掘方内の充填土及び掘方底面までの自然堆積土それぞれ程明瞭な土質の差異はない。いずれも，礫やローム粒子を混入する褐色系統の色調となっている。これは，掘方掘削，土器埋置そして埋戻しが，かなりの短時間のうちに行われたことを意味しよう。つまり埋設土器の内部は当初より空洞として使用されたのではないことになる。更に土器内部中位には長さ20cmの河原石が落込んでいる。当初から空洞であったならば，河原石は掘方底部に接して出土する筈であろう。



第12図 土器埋設遺構の検出層位

当遺構からは $\approx 1.5m$ 離れた位置に2号土器埋設遺構が設けられている。その間には2号配石が横たわる。1号・2号土器埋設遺構と2号配石の先後関係を次いで考慮すべきであろう。これは、当該遺構のみの問題でなく、他の全ての配石遺構と、土器埋設遺構の先後関係にも敷衍できる可能性を有している。2号配石は、大ききの不揃いの礫を使用し、石の配し方にそれ程の規則性を見出せない。更に配石下面の方が土器埋設遺構の検出面よりやや下となっている。このことは、土器埋設遺構構築時、配石が破壊された可能性を示す。つまり、配石の方がやゝ先行する時期のものともみられるのである。

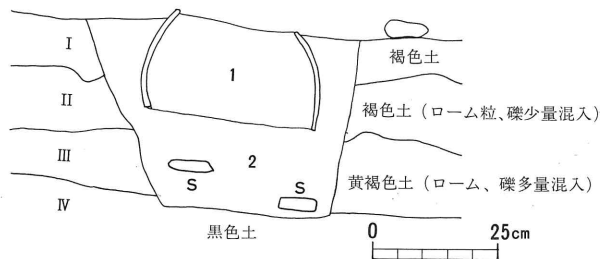
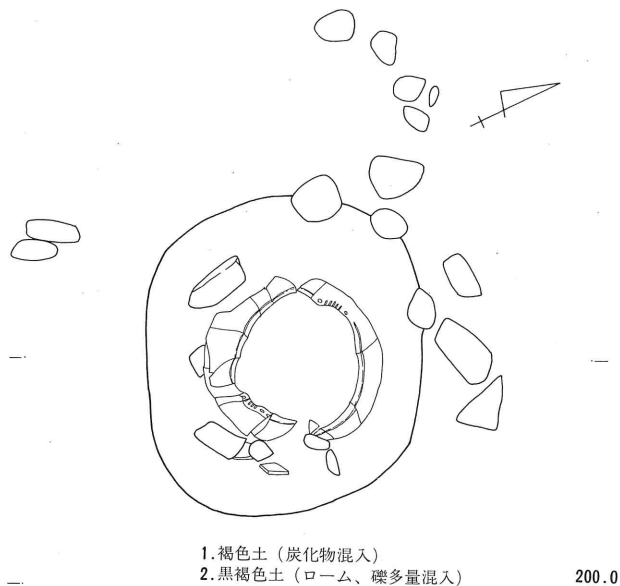


第13図 1号土器埋設遺構 実測図

2号土器埋設遺構 (第14図, 図版13)

堀之内I式の深鉢形土器を正位に埋置したものである。土器は口縁部から胴部上半にかけてのもので、割口は平滑に仕上げられていた。土器埋置のための掘方は、長径約62cm、短径約54cmの楕円形を呈する。土器本体よりひとまわり大きな掘方である。検出層位は基準層I層下位にあり、掘方の底面は同IV層上位に至る。掘方内には数個の小河原石が含まれている。周囲の自然堆積層、とくに基準層III層などに含まれる礫は角礫であり、掘方内の河原石とは区別される。遺構の周辺及び掘方の上部には計20個程の小河原石が出土している。雑然とした出土の仕方ではあるが、小河原石といっても台地下の河川より拾い上げる他はなく、これも人為的な設置とみななければならない。

掘方内の充填土は黒褐色系でロームや礫を多量に混入する。これは周囲の自然堆積層と明らかに区別できる。但し、掘方底面は基準層IV層(黒色土)まで掘下げられているわけであるから当然のことかもしれない。含まれるローム粒と礫の多さは、基準層I層からIII層まで共通することである。埋設土器内部は、褐色系の色調であり、炭化物を多量に混入していた。



第14図 2号土器埋設遺構実測図

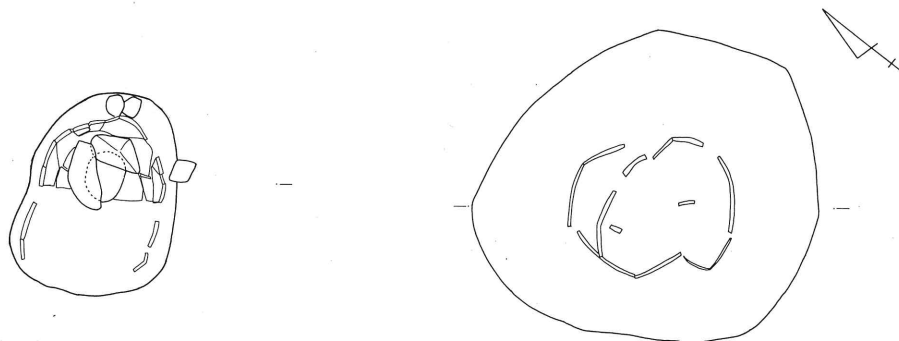
3号土器埋設遺構 (第15図, 図版14)

堀之内Ⅱ式の深鉢形土器を正位に埋置したものである。埋置土器は、胴部下半から底部にかけて残っていた。土器埋設のための掘方は、長径約41cm、短径約30cmの楕円形状であった。本遺構の検出層位は基準層Ⅰ層上位にあり、他の土器埋設遺構と同様である。掘方の底面は、Ⅱ層上位に至る。掘方内充填土、土器内部の充填土、周囲の自然堆積層いずれも暗褐色から黒褐色系の色調であり、各々明瞭に区別できるものではなかった。土器の内部には3個の小河原石が含まれていた。河原石のひとつは土器底面に接していた。

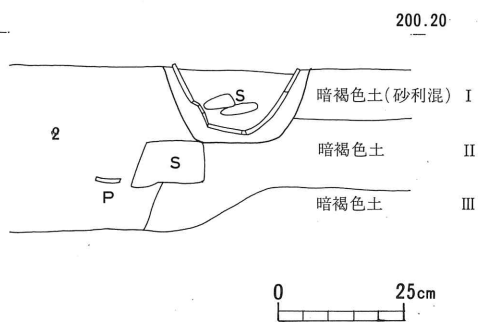
4号土器埋設遺構 (第16図, 図版15)

堀之内式の深鉢形土器を正位に埋置してあった。土器は口縁部の一部が欠損しているだけでほぼ完形であった。土器埋設のための掘方は径70cmの円形状と埋設土器本体よりかな

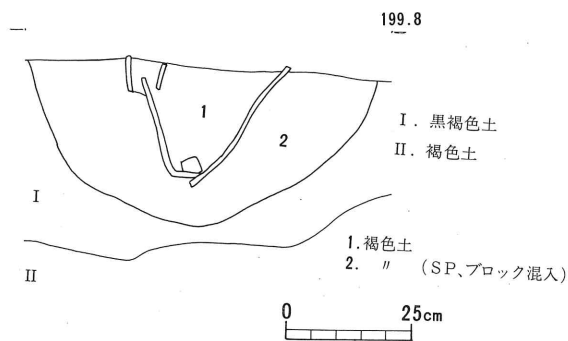
り大きなものであった。本遺構の検出層位は基準層Ⅰ層上位にあり、掘方の底面はⅠ層下位に至る。掘方内、土器内部の充填土、周囲の自然堆積層いずれも暗褐色から褐色系の色調であり、各々明瞭に区別できるものではなかった。土器の内部には、小河原石が含まれていた。



- 1. 黒褐色土（掘方）
- 2. " （土器片を多く含む）



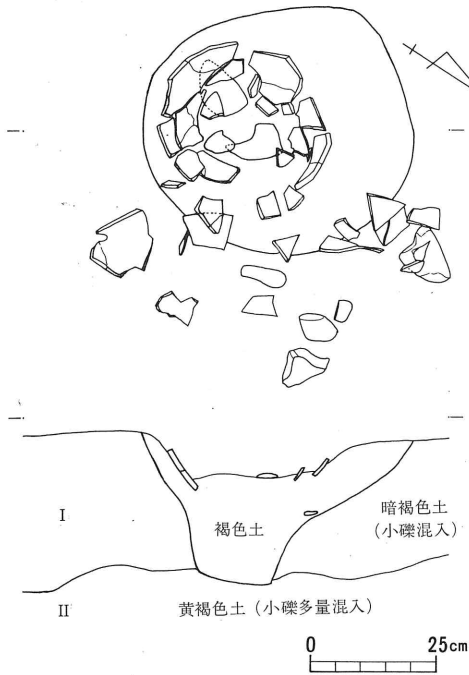
第15図 3号土器埋設遺構実測図



第16図 4号土器埋設遺構実測図

5号土器埋設遺構（第17図）

称名寺Ⅱ式或いは堀之内Ⅰ式の深鉢形土器が正位に埋置されていた。埋置された土器は胴部の一部が環状に残されていたのみであった。掘方は土器本体の周囲に径52cmの土坑として検出されている。掘方は基準層Ⅱ層上面までの深さがあるのに比べて、土器本体は掘方の上方に埋置されているのみなど、かなり貧弱である。また、周囲には土器片が数多く散乱し、接合した結果計5個体分となった。検出層位は、基準層Ⅰ層上位にあった。掘方内の充填土と周囲の自然堆積層はともに褐色から暗褐色系の色調であり、見た目では区別するのは困難なものであった。土器本体の中及び掘方内には小河原石が含まれていた。



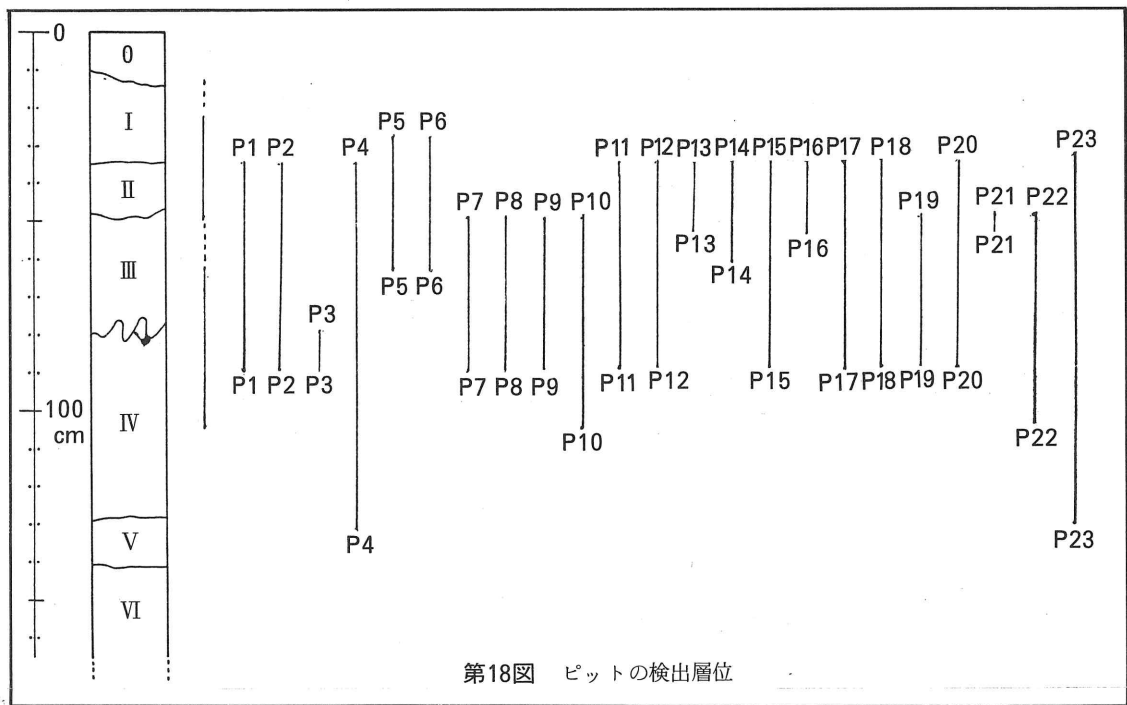
第17図 5号土器埋設遺構実測図

第3節 ピ ッ ト

検出されたピットの概要

今回の調査で検出されたピットには、大きさ・深さ・形態等に規格性や統一性がない。また、今回の調査区は幅3mから7mの道路敷下に限られていたため、ピット群の分布状況についても十分に言及できない。道路は敷砂利道であったが、旧地表面の上に構築されたものであるため、深層の調査にて旧表土上面は基準層第I層より確認できた。

ピットの検出層位は、浅いものでI層下位、深いものでIII層上位となっている。底面は深いもので七本桜軽石層まで達するが、大半は基準層IV層（暗褐色～黒褐色土）中にある。ピット内の充填土は褐色～暗褐色系であり、周囲の自然堆積層との区別は困難であった。また前述のように、基準層I層下半からIV層上半にかけては、遺物の包含層となっている。ピットはこの遺物包含層を切り込んで構築されており、充填土中には各時期交々多量の遺物が混在している。場合によっては、縄文時代中期と後期の遺物が同等に混っており、ピットの時期を決定するのは甚だ困難なものもあった。このような理由から、ピット内に含まれている最新時期の遺物をもってピットの構築時期を推量することは、今回の場合必ず



しも適用することはできない。更に、今回の調査で検出したピットの大半は人為的に埋戻されたものと判断できる。しかも、ピット掘削後それ程時間を置かなかったと考えられる。つまり、遺物の包含層まで掘込んで即埋戻されたものであるから、場合によってはピット構築に先行する時期の遺物が出土遺物の過半を占めることがあり得る。事実そのようなピットが大半であった。自然埋没のピットの場合も本遺跡の場合同様な事情がありそうである。それは次のような理由による。本遺跡とくに今回調査区のように台地端部に占地する遺跡、そして後背に急峻な山斜面を控える場所については、ピット等の自然埋没に要する時日はかなり短いものと考えられる。

今回の調査では、ピットの構築時期の推量について配石遺構と同じく、次の二点より判断した。但し、二点併せて判断するように努めた。

1. 各ピットの検出層位より判断する場合
2. 各ピット内出土遺物とくに土器型式の量的比率より判断する場合

これらについて詳述すれば次のとおりである。

1.の場合は、古宿遺跡基準層のうち遺物包含層にかかわってくる。基準層Ⅰ層中位からⅣ層中位にかけて遺物の包含がみられることは前に記した。更にⅠ層中位からⅡ層にかけては中期終末から堀之内Ⅰ式、Ⅲ層上位は加曾利Ⅱ式期から同Ⅲ式期、Ⅲ層下半からⅣ層中期に関しては阿玉台式期から加曾利Ⅰ式期とそれぞれ分けることができた。それぞれ上部・中部・下部包含層とする。ピットの検出層位は、Ⅰ層下位からⅡ層上面、Ⅲ層上

位, IV層上位の三種に分けられる。これらはそれぞれ上部・中部・下部遺物包含層に対応する。

2の場合も、遺物包含層に対応して考えることができる。遺物包含層上部・中部・下部それぞれの土器型式の幅と量的な構成より、古宿第1段階から同第3段階まで段階区分できることは前に記した。出土遺物の量的な構成から、各ピットの構築時期（古宿遺跡のどの段階にあたるか）を判断しようとするのである。具体的には各ピットの記述を参照されたい。

各ピットについては次のとおりである。

各ピット

1号ピット（第19図，図版19）

調査区の南端近くにて検出した。2号ピットによって北半を切られている。径約1.4 mの円形に近い。底面はほぼフラット，断面形は逆円錐台形となっている。IV層上位（黒褐色土層）より掘込まれ，IV層中位に底面を持つ。充填土は周囲の土質とそれ程見分けがつかない。単一層のように窺うことができる。充填土の上方には角礫が多量に含まれていた。

出土遺物は、総数115片の土器片と打製石斧1点であった。出土土器片の内訳は次のとおりである。古宿第1段階に含まれるもの44片（土器片総量に対して38.3%），同第2段階21片（同様に18.2%），同第3段階44片（同様に38.3%）となる。その他型式不明のもの6片（同様に5.2%）である。型式不明のものは全て中期に含まれる。

検出層位と出土土器の比率を併せ考えピットの構築時期は中期と考える。

2号ピット（第19図，図版19）

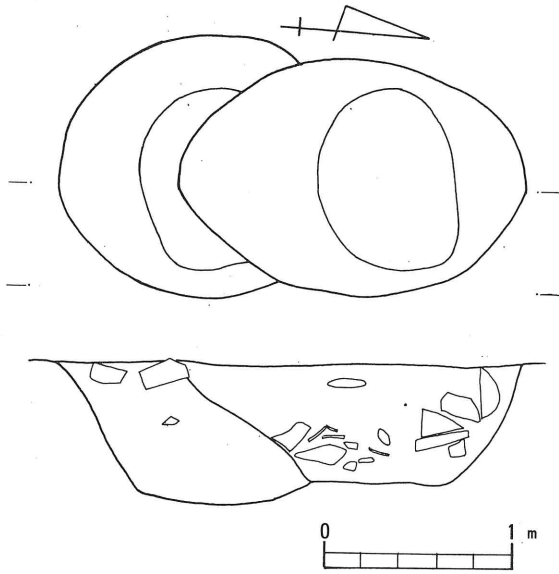
1号ピットを切って構築されている。長径約1.8 m，短径約1.3 mの楕円形のピットである。断面形は逆台形状，底面はほぼフラットである。検出層位はIV層上面にあり，底面もIV層中に構築されている。充填土は黒褐色土単一層であり，多量の角礫を含んでいる。

遺物は皆無であったが，1号ピットを切っていることから，2号ピットの構築時期は中期以降と考える。但し1号ピットとは大きな時間差はないと思われる。

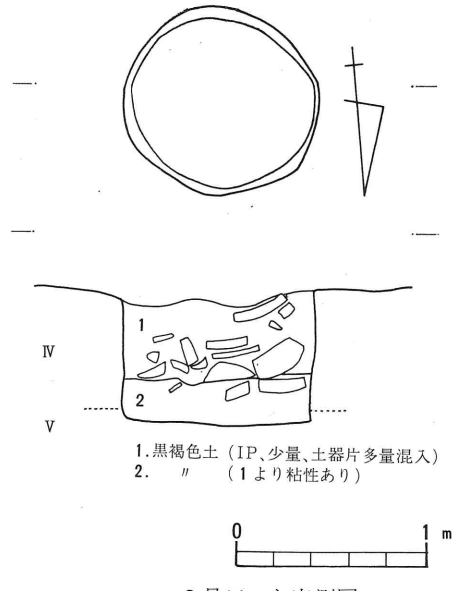
3号ピット（第19図，図版19）

1号，2号ピットの北方約1.5 mに構築されていた。径約1 mのほぼ円形の形状である。開口面（IV層上位にある。）より底面まで直に掘り込まれていた。底面はほぼフラットでIV層下位に構築されている。充填土は上下2層に分層できた。上下層ともに黒褐色の色調である。上層中には角礫・土器片などを含んでいるが，下層には含んでいない。

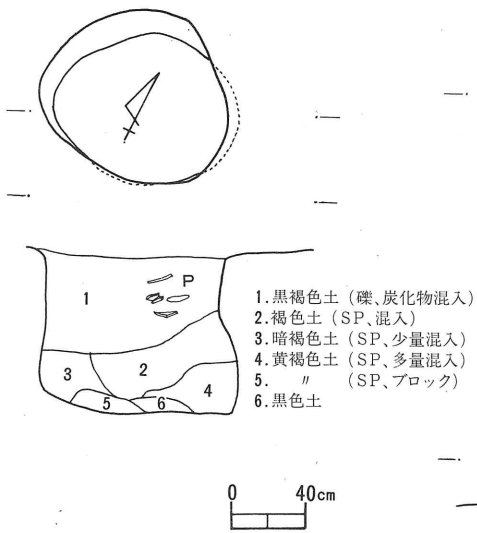
出土遺物は、総計44片の土器片と打製石斧・台石・土製円盤各1点ずつである。出土土器の内訳は、古宿第1段階22片（土器片総量の50%），同第2段階9片（同様に20.5%），



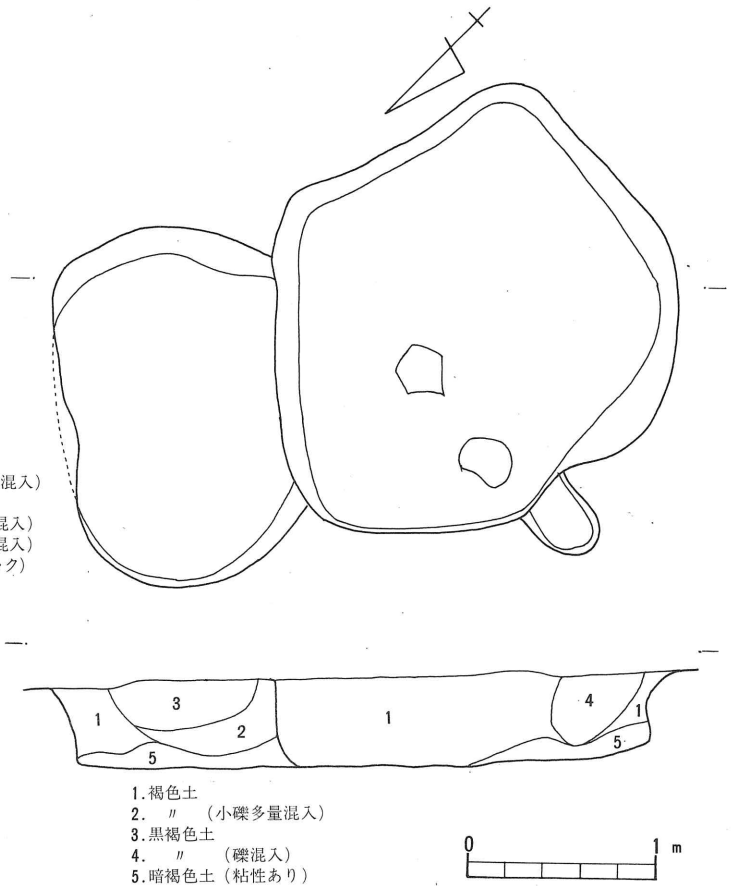
1号、2号ピット実測図



3号ピット実測図

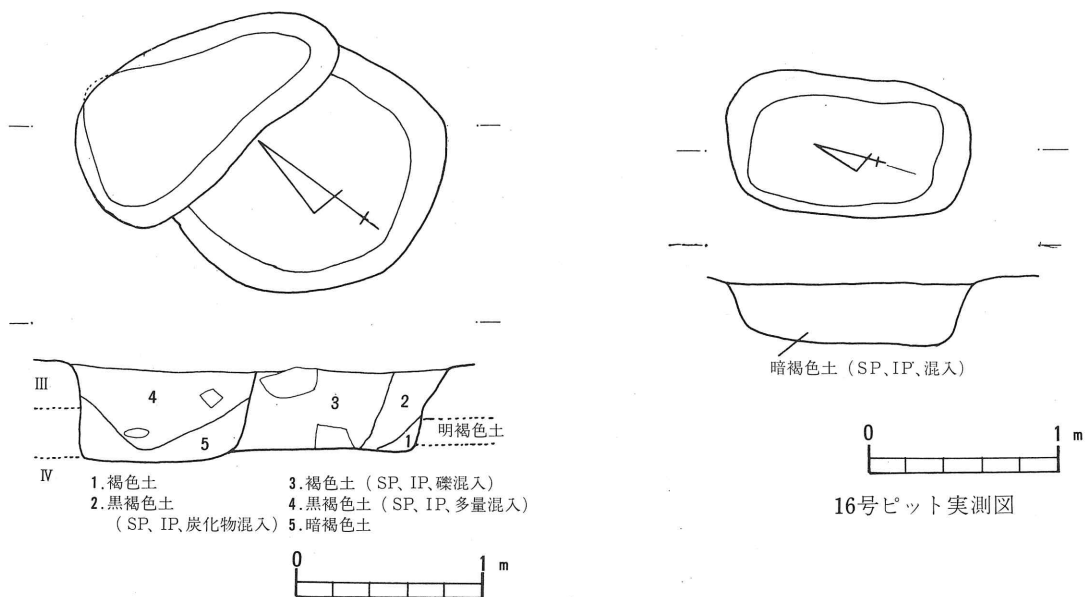


4号ピット実測図

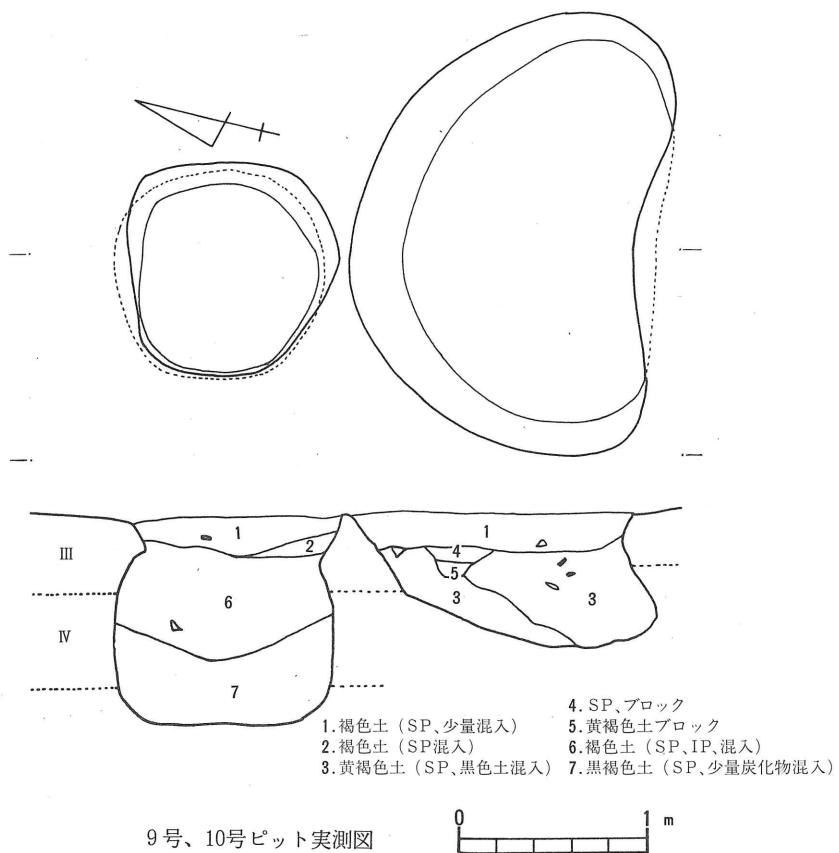


5号、6号ピット実測図

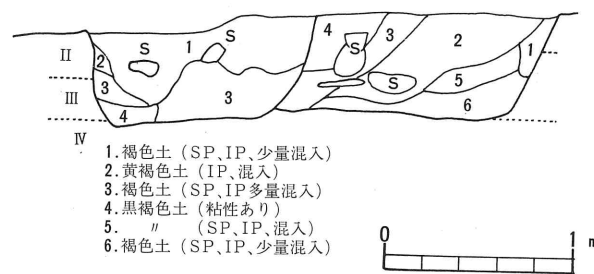
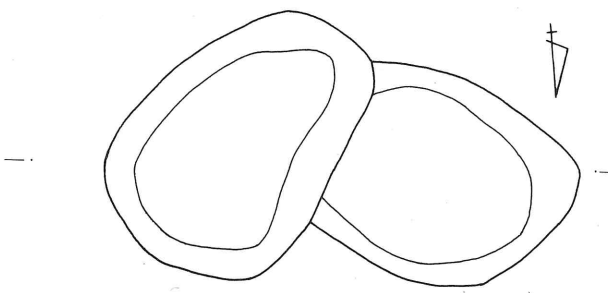
第19図 各ピット実測図(1)



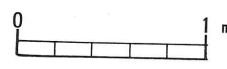
7、8号ピット実測図



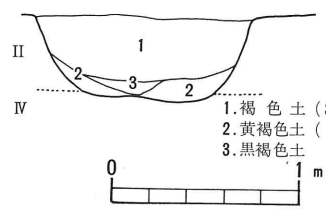
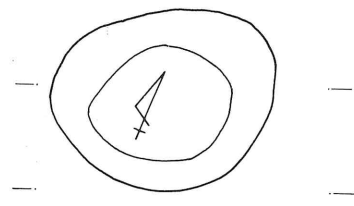
第20図 各ピット実測図(2)



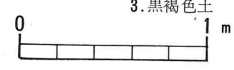
- 1. 褐色土 (SP, IP, 少量混入)
- 2. 黄褐色土 (IP, 混入)
- 3. 褐色土 (SP, IP 多量混入)
- 4. 黒褐色土 (粘性あり)
- 5. " (SP, IP, 混入)
- 6. 褐色土 (SP, IP, 少量混入)



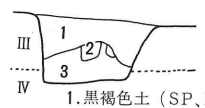
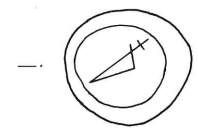
11号、12号ピット実測図



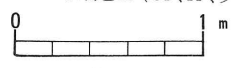
- 1. 褐色土 (SP, IP, 混入)
- 2. 黄褐色土 (")
- 3. 黒褐色土



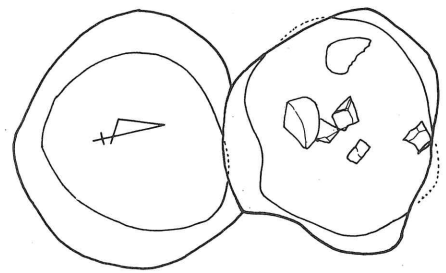
15号ピット実測図



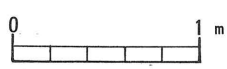
- 1. 黒褐色土 (SP, IP, 混入)
- 2. 黄褐色土 (SP, IP ブロック)
- 3. 褐色土 (SP, IP, 多量混入)



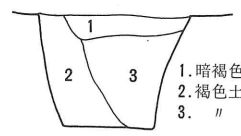
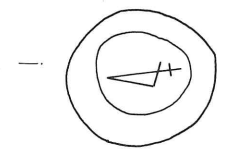
19号ピット実測図



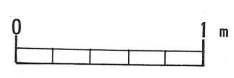
- 1. 褐色土 (14号ピット炭化物多量混入)
- 2. 暗褐色土
- 3. 黄褐色土 (礫混入)
- 4. 褐色土 (礫多量混入)
- 5. 焼土ブロック



13号、14号ピット

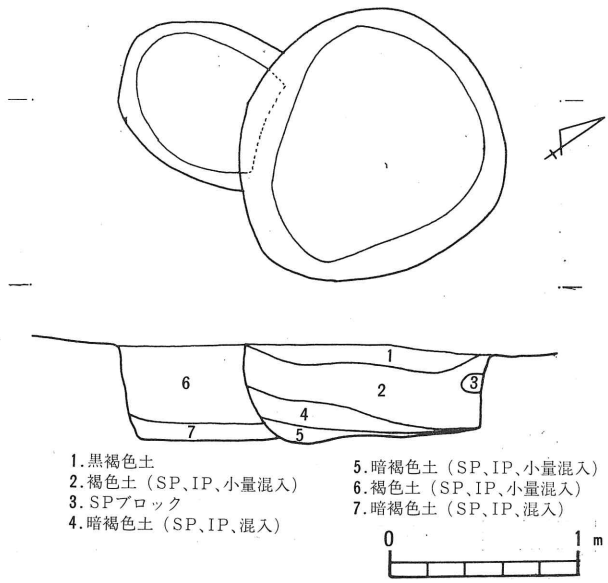


- 1. 暗褐色土
- 2. 褐色土 (SP, IP, 少量混入)
- 3. " (" 多量混入)

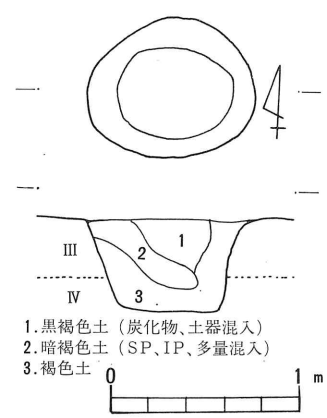


20号ピット実測図

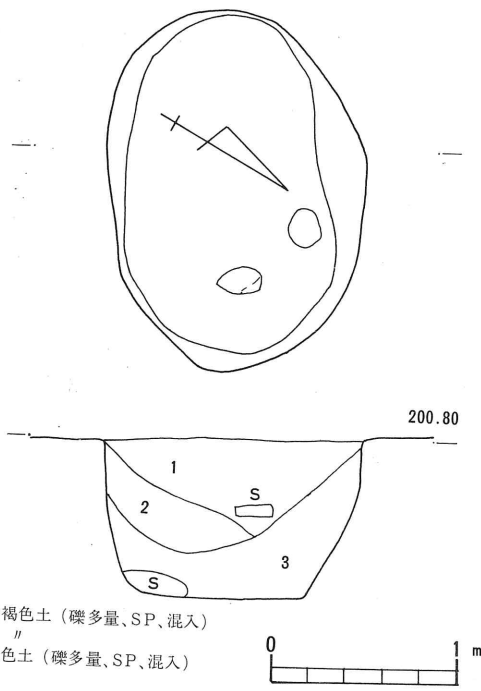
第21図 各ピット実測図 (3)



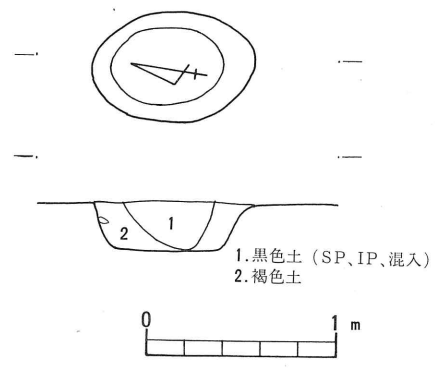
17号、18号ピット実測図



22号ピット実測図



23号ピット実測図



21号ピット実測図

第22図 各ピット実測図(4)

同第3段階13片（同様に29.5%）となる。標準土層Ⅲ層中位からⅣ層上半にかけては古宿遺跡第1段階の土器群（阿玉台式から加曽利EⅠ式）の包含層となっている。3号ピットの検出層位はⅣ層上位にあり、含まれる土器も古宿第1段階のものが半数を占める。このことから3号ピットは中期の構築とくに古宿第1段階に含まれよう。

4号ピット（第19図，図版19）

3号ピットの西方約3mに検出した。平面形は径約90cmの不整円形を示す。断面形はやや袋状となっている。底面はフラットに作られ、Ⅵ層（七本桜軽石層）に至る。深さは約80cmをはかる。充填土は6層に分層した。このうち2層・4層は壁の剥落土とみられる。遺物は主として1層中に含まれていた。なお、Ⅱ層上半にて検出された。

出土遺物は総数61片の土器片であった。その内訳は、古宿第1段階13片（土器片総量の21.3%）、同第2段階2片（3.3%）、同第3段階46片（同様に75.4%）となっている。古宿第3段階のうちでも後期に含まれるのは40片と過半数を占める。

検出層位と土器の量的なものから4号ピットの構築時期は古宿第3段階とくに後期である可能性が強い。

5号，6号ピット（第19図，図版17）

調査区のはゞ中央にて検出した。5号，6号ともに不整な形状であり，浅く掘込まれたものである。充填土の状況から6号から5号への新旧関係が認められる。深さは5号・6号とも50cm前後である。底面は両者ともフラットに仕上げられている。検出層位は両者ともⅠ層下半にあり，底面はⅢ層中位に至っている。

出土遺物は，それぞれ次のとおりである。

5号ピット，総計58片の土器片と凹石1点である。土器片の内訳は，古宿第1段階10片（総数の17.2%），同第2段階5片（同8.6%），同第3段階43片（同74.2%）である。6号ピット，総数111片の土器片と打製石斧1点，土製円盤1点である。土器片の内訳は，古宿第1段階24片（総数の21.6%），同第2段階5片（同様に4.5%），同第3段階81片（同様に73%），その他1片である。

この出土土器の比率と検出層位を併せ考え5号，6号ピットの構築時期は古宿第3段階とくに後期の可能性が強い。

7号，8号ピット（第20図，図版17）

7号はほゞ円形，8号は不整な楕円形の形状である。充填土の状況から7号から8号への新旧関係が認められる。ピットの深さは双方とも約48cmと浅い。底面はほゞフラットに作り上げられている。検出層位は双方ともⅢ層上位にあり，底面はⅣ層上位まで掘り下げられている。

各ピットの出土遺物は次のとおりである。

7号ピット、総数206片の土器片と凹石、削器、棒状石製品各1点である。土器片の内訳は古宿第1段階51片（総数の24.8%）、同第2段階43片（20.9%）、同第3段階109片（52.9%）となっている。第3段階のうち後期に属するものは79片（72.5%）と多い。

8号ピット、総数75片の土器片と台石1点、土製円盤2点である。土器片の内訳は古宿第1段階14片（18.7%）、同第2段階1片（1.3%）、同第3段階60片（80%）となる。第3段階でもとくに後期に属するものが多い。

土器の構成と検出層位を併せ考え、7号・8号ピットは古宿第3段階の所産とみることができる。

9号ピット（第20図，図版17）

10号ピットの北方に接して構築されたものである。径約1.1mのほぼ円形の形状で、断面形は袋状となっている。壁の上半で一度くびれを見せる。底面はほぼフラットに仕上げられている。検出層位はⅢ層上位にあり、底面は今市軽石層まで達している。深さは約110cmをはかる。

充填土とくに6～7層にかけて遺物を含んでいた。出土遺物は38片の土器片と石製品1点である。土器片の内訳は古宿第1段階3片、同第2段階3片、同第3段階32片となっている。第3段階でもとくに後期に属する土器片が大半である。

検出層位と土器片の構成を併せ考え本ピットの構築時期は古宿第3段階となろう。

10号ピット（第20図，図版17）

9号ピットの南に接して構築されたものである。長径約2.4m、短径約1.5mの不整な楕円形となっている。南側の壁は少々くぼみを見せ、いくらかオーバーハングしている。底面はフラットではあるが、南へ行く程深くなっている。最深部は検出面より深さ約70cmをはかる。検出面はⅢ層上位にあり、最深部はⅣ層中位に至る。

充填土中3層に多量の遺物を含んでいた。出土遺物は計104片の土器片と土製円盤1点である。土器片の内訳は、古宿第1段階38片（総数の36.5%）、同第2段階13片（同様に12.5%）、同第3段階41片（39.4%）、その他中期土器片12片となっている。第3段階でも後期に属するものは13片と少量である。

検出層位及び土器の構成を併せ考え、本ピットは中期の所産とみられる。

11号ピット（第21図，図版17）

12号ピットと重複している。充填土の状況から12号ピットより新しいと判断できる。平面形は長約1.5m、幅約1.1mの不整な長方形である。検出面よりの深さは約50cm、底面はほぼフラットな状態である。ピットの断面形は所謂鍋形となる。検出面はⅠ層下位にあった。

これは上部遺物包含層中となる。充填土は凡そ4層に分離されるが、第4層以外は何れも褐色から黄褐色の色調で明確な峻別はできなかった。ピット断面図左壁に沿った2, 3, 4層については自然剥落層の可能性を残しているものの、量的には右側の1, 3層の堆積が目立つ。1層, 3層はともに褐色系の色調で明瞭な差異は窺えない。ただ1層中には小礫が含まれること, 3層は1層に比べ七本桜軽石, 今市軽石の含有量が多いことなどより分層したわけである。これは一括埋土の可能性を示唆する。

遺物は1層と3層より主として出土した。総計30片の土器片と磨石兼敲石1点であった。出土土器は次のような構成となっている。古宿第1段階10片(土器片総量の33%), 同第2段階6片(同様に20%), 同第3段階14片(同様に47%)となる。第3段階に含まれるものが最多となる。これと検出層位を併せ考え、ピットの構築時期は第3段階となろう。

12号ピット (第21図, 図版17)

11号ピットによって一部切られている。東西方向に長い概ね長方形の形状であったと推定される。残存長約1.2m, 幅約1.1m, 深さ約56cmを測る。底面はほぼフラット, 断面形は11号ピットと同様である。検出層位は、基準層I層下位(上部遺物包含層中)にある。充填土は凡そ6層に分離した。4層・5層を除き他は褐色から黄褐色の範囲のもので、各々色調等に明確な差異はない。充填土中位には大形の河原石を含んでいる。

遺物は全包含層を通じて出土している。総計76片の土器と土製円盤8点である。土器片の構成は古宿第1段階25片(土器片総量の33%), 同第2段階21片(同様に28%), 同第3段階30片(同様に39%), 第3段階のうち後期のものは26片と多い。各段階それ程の差異はないが、第3段階に比較的集中する。このことと、検出層位を併せ考えて、本ピットの構築時期は11号ピットと近い時期と考えられる。

13号ピット (第21図, 図版17, 18)

調査区の中央からやや北寄りに14号ピットと重複していた。14号ピットによって一部切られている。径約1.3mのほぼ円形で、深さは約22cmをはかる。底面はほぼフラットにつくられている。遺構検出面はI層下位(上部遺物包含層に含まれる)にあり、底面はIII層上位に至る。充填土は1層, 2層に分けたが、それ程明確に峻別されたわけではない。

充填土中からは総計36片の土器と土器片錘, 土製円盤各々1点が含まれていた。36片の土器の内訳は次のとおりである。古宿第1段階5片(土器片総数の13.8%), 同第2段階なし, 同第3段階31片(同様に86.2%)となっている。とくに第3段階のものについて堀之内I式のものは21片と半数以上を占めている。このことと検出層位を併せ考え、13号ピットは古宿第3段階の構築といえそうである。これは上部遺物包含層に対応する。

14号ピット (第21図, 図版17, 18)

13号ピットを切り, その北側に所在していた。平面形は不整な円形で径は1.1 m~1.3 m, 深さは28cmを測る。壁の一部がオーバーハングしていた。底面はほぼフラットな状態であった。検出層位は基準層Ⅰ層下位(上部遺物包含層)であり, 13号ピットと同じとなる。底面はⅢ層中程に至る。充填土は1から4層に分けられた。このうち第1層には炭化物を多量に混入する。2層及び3層上面には焼土塊を散見することができる。底面近くには人頭大の礫が出土した。各層とも色調にそれ程の差はない。充填土は, 一見自然埋没を想起させるが, 各時期の遺物が各層からまんべんなく出土するなど, 人為的な一括埋土の可能性の方が強い。

充填土中よりは, 総数102片の土器片と, 磨石兼敲石(凹石)6点, 石錘2点(うち1点は切目石錘), 土製円盤4点と割合多く出土している。102片の土器片の内訳は古宿第1段階9片(土器片総数の8.8%), 同第2段階10片(同様に9.8%), 同第3段階83片(同様に81.4%)となっている。第3段階のうち後期に含まれるもの52片と半数以上を占める。第3段階の土器片が圧倒的に多い。これは上部遺物包含層中検出ということを含めて, 14号ピットの構築時期が, 中期末以降なかでも後期初頭に位置づけられることを示唆しよう。切目石錘なども本県では縄文時代後期に至り多出するものとされている。

15号ピット (第21図, 図版18)

13号・14号ピットの北方約1 mに検出した。小形のピットである。長径約1.2 m, 短径約0.9 mの楕円形の形状である。深さは約44cmを測り, 鍋形状の断面形をもつ。検出層位は基準層Ⅱ層上面にあり, 底面はⅣ層上位に至る。充填土は1層から3層に分離され, 自然埋没の様相を示す。小形で浅く底面もフラットにつくらないなど他の大半のピットと区別される面をもつ。16号ピットなども同様であった。

充填土中よりは, 総数33片の土器片と分銅形打製石斧1点, 磨石兼敲石1点, 石皿破片1点, 土製円盤1点の出土がある。土器片33片の内訳は古宿第1段階2片(土器片総数の6.1%), 同第2段階3点(同様に9.1%), 同第3段階28片(84.8%)となっている。第3段階の圧倒的な多さが目立つ。検出層位も併せ考え, 15号ピットの時期は上部遺物包含層の時期に考えたい。更に後期の可能性も指摘できる。

16号ピット (第21図, 図版17, 18)

15号ピットの東方約1 mに検出した。15号ピットと同様小形のものである。平面形は長さ約1.3 m, 幅約0.7 mの長方形となる。深さは約30cmを測る。底面はほぼフラットにつくっている。断面形は凡そ逆台形の形状である。検出層位は基準層Ⅱ層上面にあった。底面はⅢ層上位に至る。充填土は暗褐色土層一層となる。

充填土中よりは, 12片の土器片と棒状の石製品1点, 石鏃1点が出土した。12片の内訳

は古宿第1段階3片，同第2段階1片，同第3段階8片となる。

17号ピット（第22図）

4号・5号配石の南約4mの地点にて検出した。18号ピットによってピットの東端を切られている。平面形はほぼ楕円形で長径約1.3m，短径約0.9mであったとみられる。底面はほぼフラットに仕上げられており，断面形は逆台形であった。検出層位はⅡ層上面にあり，底面はⅡ層上位に至る。充填土は6層，7層の二層に分層できたが，双方色調などには大差はなく，7層に七本桜軽石層，今市軽石層の混入がより多いことのみであった。人為的な埋戻しを想起させるものである。

充填土中よりは，土器片51片，打製石斧1点，磨石兼敲石（凹石）2点，切目石錘2点，石鏃2点と割合多量のもので出土した。土器片51片の内訳は古宿第1段階9片（土器片総数の17.6%），同第2段階8片（同様に15.7%），同第3段階34片（同様に66.7%）となっている。第3段階のうち後期のものは約8割を占めている。検出層位と併せ考え，本ピットの構築時期は古宿第3段階のうち，とくに後期の可能性が高い。

18号ピット（第22図）

17号ピットを切り，その北方に検出した。平面形は径1.4m程度の円形であった。底面はほぼフラットに仕上げられており，断面形は鍋形に近い。検出層位はⅡ層上面にあり，底面はⅣ層上位に至る。充填土は1層から5層に分層されるが，各層ともほぼフラットに堆積しており，レンズ状の堆積を示してはいない。更に1層以外，3層（七本桜軽石ブロック）を除き，各層暗褐色系で明確に峻別できなかった。

遺物は2層・4層に多く含まれていた。総数43片の土器片，打製石斧1点，磨製石斧1点，削器1点の出土があった。土器片43片の内訳は，古宿第1段階8片（土器片総数の18.6%），同第2段階8片（同様に18.6%），同第3段階27片（同様に62.8%）となっている。第3段階のうち後期初頭に含まれるのは23片と約8割を占める。検出層位も併せ考え，本ピットも古宿第3段階以降，後期初頭に構築されたものとみることができる。

19号ピット（第21図）

17号・18号ピットの北方約2mに検出された小形のピットである。平面形は径0.5mのほぼ円形，断面形は逆台形状である。検出層位はⅢ層上位にあり，底面はⅣ層上位中に至る。充填土は1層・2層・3層に区分されるが，2層は七本桜軽石層，今市軽石層のブロックとなっている。

充填土中よりは，総数53片の土器片を出土した。その内訳は，古宿第1段階8片（土器片総数の15.1%），同第2段階8片（同様に15.1%），同第3段階37片（同様に69.8%）となる。

20号ピット (第21図)

17号・18号ピットの西方約2 mに検出された小ピットである。平面形は径0.7 mのほぼ円形、断面形は逆台形となる。検出層位はⅡ層上面にあり、底面はⅣ層上位に至る。充填土は1～3層に分層された。

充填土中よりは、土器片17片が出土した。その内訳は古宿第1段階5片、同第2段階2片、同第3段階12片と第3段階の数量が多い。中期末から後期初頭の構築であろう。

21号ピット (第22図)

20号ピットの北方約2 mに検出した。小形のピットである。平面形は長径0.85 m、短径約0.6 mの楕円形に近く、断面形は浅い逆台形である。検出層位はⅢ層上位にあり、底面はⅢ層上位に至る。充填土は、1層・2層に分層される。

充填土中よりは総数26片の土器片が出土している。その内訳は古宿第1段階2片、同第2段階4片、同第3段階20片となっている。第3段階が最多量である訳であるが、検出層位を考慮に入れ、中期の構築ピットとしておく。

22号ピット (第22図)

21号ピットの北西方約2 mに検出した。小形のピットである。平面形は長径約0.9 m、短径約0.7 mの楕円形に近く、断面形は大略逆台形となっている。深さは約 cm底面はⅣ層中位に至る。検出面はⅢ層上位にあった。覆土は1～3層に分層される。そのうち第1層には炭化物を混入する。

出土遺物は土製円盤1点のみである。

検出層位から判断して、中期の所産とみられる。

23号ピット (第22図, 図版17)

16号ピットの南方約3 mに検出した。平面形はほぼ楕円形、長径約2 m、短径約1.4 m、深さ約0.85 mをはかる。断面形は壁中位にやゝ膨らみをみせる逆台形である。検出層位はⅡ層上面になり、底面はⅤ層上面に至る。覆土は1～3層に分層され、一見レンズ状の堆積状況を示すが、全て色調褐色の範囲内に含まれる。

底面には礫が出土した。覆土中からは土器片は出土しなかった。磨石兼敲石(凹石) 1点、切目石錘1点、土製円盤4点、石鏃1点出土している。

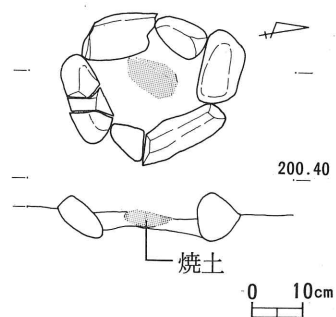
検出層位から判断して、中期末から後期初頭の所産と考える。

第4節 炉 跡 (第23図, 図版2)

調査区の南端より検出した。細長い河原石を6個配列した石囲い炉である。石囲い内には少量の焼土を確認されたが、土器埋設等の施設はない。炉跡は2×2mのグリッド内で検出されたもので、どのような住居跡に設置されていたかは不明である。但し、北方の1号配石までの約15mの間に数箇所グリッドを調査している。その間は無遺物、無遺構であった。炉跡以南に住居跡群の存在を推測できる。

炉跡はI層下面(遺物上位包含層)にて検出された。近辺からは総数32片の土器片が出土している。その内訳は古宿第1段階1片(3.1%)、第2段階2片(6.2%)、第3段階29片(90.7%)である。第3段階のうち後期初頭に含まれるのは82.8%と多数を占める。

検出層と土器の比率から後期初頭の構築と考えられる。



第23図 炉址実測図

第5章 検出した遺物

第1節 縄文土器

1. 出土状態及び分布状態

前記したように、本遺跡今回の調査では縄文時代中期から後期にかけて上・中・下三枚の遺物包含層を確認している。それぞれに即して古宿第3段階（加曾利EⅣ式から堀之内Ⅰ式段階）、古宿第2段階（加曾利EⅡ式から加曾利EⅢ式段階）、古宿第1段階（阿玉台式から加曾利EⅠ式段階）としたわけである。但しこれらは、実際には阿玉台式から堀之内Ⅰ式まで上下層間断なく連続して出土している。ただ、層を別にして各段階毎に出土していること、検出した遺構もそれぞれの層に確認されることなどから判断した段階区分である（各遺構についての記述を参照）。これはひいては、古宿遺跡全体の時期区分にもかかわってくるものと思われる。

今回検出した土器片の総数は4,821点であった。次表に掲げた4,145点はこのうち深鉢形土器破片の総数である。残り676点は浅鉢、注口土器など特殊な器形の土器片であった。土器分類には深鉢形破片4,145点を対象とした。浅鉢・注口土器などは別項目とした。4,145点のうち第1段階に含まれるのは、824点で総数の19.9%を占めている。同様に第2段階は462点の11.1%、第3段階は2,624点で63.3%を占める（第2表）。第3段階に含まれるものが過半数となっている。このことは検出遺構の大半が加曾利EⅣ式から堀之内Ⅰ式に含まれることに符合する。それは、各遺構の検出層位からみても証明できよう。

次に各段階毎の土器片の分布状態について記しておく。併せて各遺構の分布とそれぞれとの関連についてもみておく。また今回の調査では、調査対象区全面に2×2mの小グリッドを設けた。出土遺物の分布状態をみると、それぞれの小グリッドを最小単位とした。

第1段階の分布状況（第24図）

調査区南部のグリッドと中央部に密な分布を示す。調査区中央及び調査区以南に分布の中心があるようである。配石遺構や土器埋設遺構の分布と符合する部分は少ない。ピットについては、検出層位と出土遺物からみて第1段階と考えた遺構とこの分布は深い係わりがある。

第2段階の分布状況（第25図）

全体的に稀薄な分布が窺えるのみである。1ヶ所のグリッドのみ15～19片の出土をみただけであった。分布は調査区の中央に偏る。この段階に係わる遺構は今回では確認されない。つまり、第2段階では調査地区周辺には包含層だけ残されたわけである。

第3段階の分布状況（第26図）

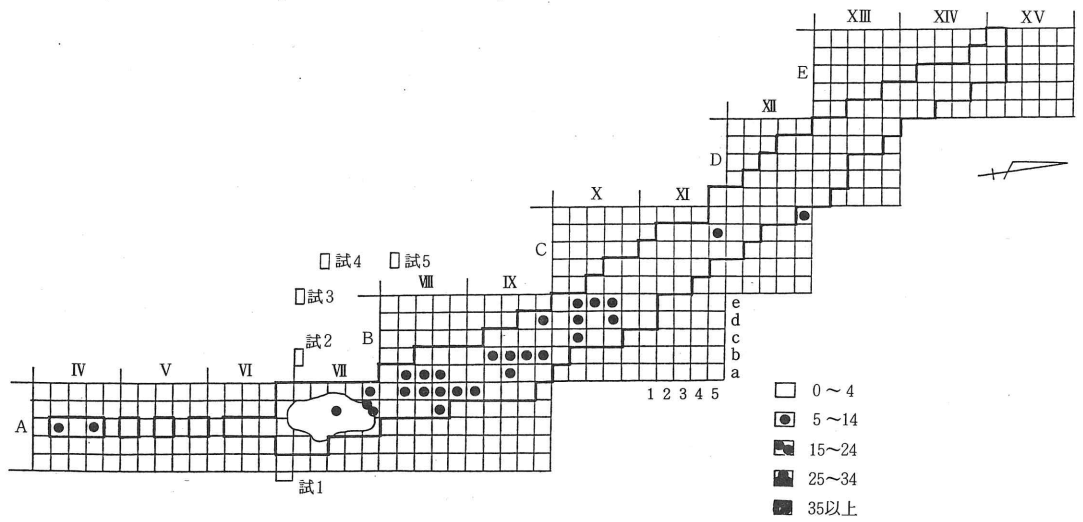
30片以上の出土グリッドが2ヶ所、25～29片が4ヶ所、20～24片が15ヶ所あった。最も

第2表 出土土器片点数及び分類表

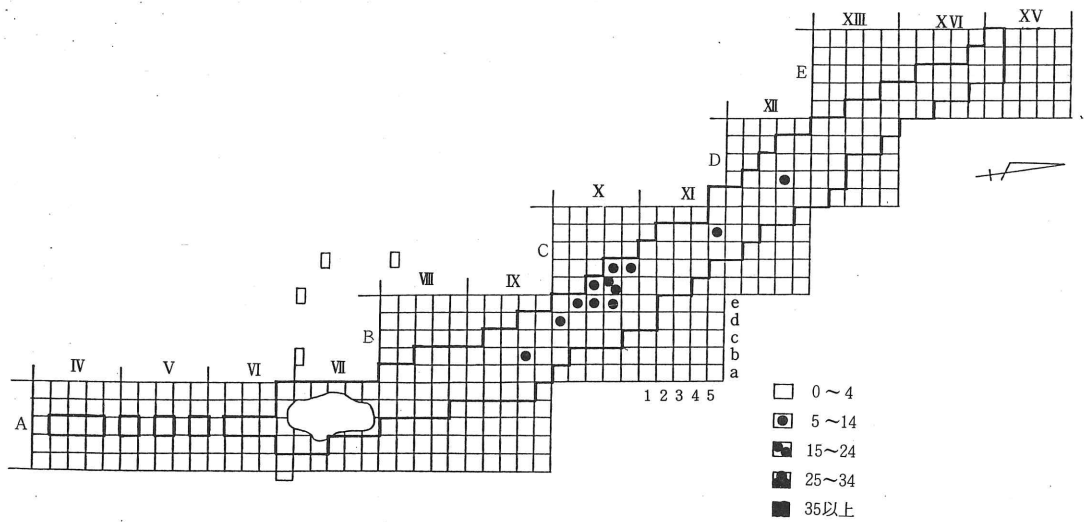
分類	出土地区	遺構	包含層	試掘	計	時 期
中 期	第1群	205	148	2	355	中期前半の阿玉台式段階
	第2群	107	84		191	中期中葉の大木8a式段階
	第3群	175	101	2	278	中期後半の大木8b式 加曾利E I式段階
	第4群	286	175	1	462	中期後半の加曾利E II～III式段階
	第5群	344	354	40	738	中期末葉の加曾利E IV式段階
	第6群	39	34		73	中期の土器
後 期	第1群	224	82	11	317	後期初頭の称名寺式段階
	第2群	685	836	48	1,569	後期前半の堀之内I式段階
	第3群	4	12		16	後期前半の堀之内II式段階
	第4群		2		2	後期中葉の加曾利B式段階
	第5群	57	86	1	144	後期の土器
合 計		2,126	1,914	105	4,145	

出土量の多い段階である。分布範囲も調査区の大半に係わっている。配石遺構や土器埋設遺構より出土したのも大半これに含まれる。第3段階に含まれる遺構は配石・土器埋設遺構、ピットの大半、炉と全ての種類にわたっている。要するに、本調査区を中心時期は当該段階となるわけである。

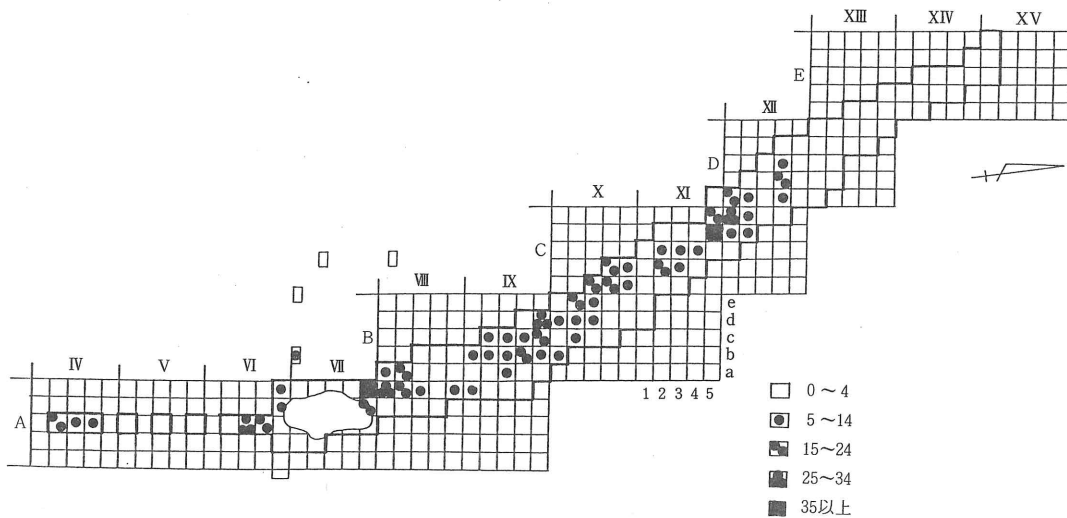
第3段階に含められる遺構も詳細にみれば時期的な変遷はあったものと思われる。前述したように(第2章第4節参照)、各遺構の時期判断は非常に困難な状況にある。とくにピットについてはそれが甚しい。それにもかかわらず各遺構に時期的な変遷があるとしたのは、1号・2号土器埋設遺構と2号配石の関係、5号配石下土壇より出土した土器などによる。それによれば、配石から土器埋設遺構へという変遷をまず窺うことができる。土器埋設遺構はおそらく堀之内I式期の中頃から、最新期は堀之内II式まで作られる。対して配石は称名寺II式期を中心とする時期の遺構と考えたい。称名寺I式期は土器そのものの出土量が微量であり、それに伴う遺構は明確ではない。加曾利E IV式期の遺構に関しては、配石や土器埋設遺構としては検出されていない。おそらく各種ピットのいずれかがこれにあたるだろう。ピットそのものは古宿第1段階から構築されるが、今回検出した大半のピット



第24図 各グリッド毎の土器出土点数（第1段階）



第25図 各グリッド毎の土器出土点数（第2段階）



第26図 各グリッド毎の土器出土点数（第3段階）

は、古宿第3段階に含まれるものと思われる。つまり、ピットの大半は加曾利E IV式期からおそらく堀之内I式期まで継続的に作られていたと考えられる。ピット、配石、土器埋設遺構の関係を簡単に記せば次のとおりになる。

ピットは加曾利E IV式期から堀之内I式期、配石は称名寺II式から堀之内I式期、土器埋設遺構は堀之内I式期から堀之内II式期までとなる。

つまり、堀之内I式期にはピット、配石、土器埋設遺構の三者が同時存在していた可能性が高いわけである。詳しくは後述したい。

本遺跡より出土した土器片の総数は4,145点を数える。これらは全て縄文土器である。本節2.以降では、これらの土器について、まず深鉢形・浅鉢形など器形毎に取挙げて分類を行う。次いで、底部破片・底部圧痕・土器の接合痕や補修孔について特記する。このうち深鉢形土器については数量が多いため、中期・後期に分け更にそれぞれについて細分を行っている。細分にあたっては上述の段階区分にはとられなかった。

2. 縄文時代中期の深鉢形土器

(第27図, 第31図～第36図)

中期に属する土器は計 2,097 片数えられる。これらは 6 群に分類できる。

第 1 群土器 (第27図, 第31図～第32図, 図版21, 24, 25)

中期前半の阿玉台式段階の土器である。計 355 片を数えることができ、これは土器片総数の 8.6% を占める。次の I～VII 類に分類できる。

I 類 (第32図 8, 図版25)

やゝ外反気味の口縁部をもち、外側に三条の横位の原体圧痕 (LR) を施す土器である。大木 7 b 式に比定される。

II 類 (第31図 1～10, 図版24)

一条の角押文によってモチーフを描くもので、阿玉台式の古い様相を持つものである。大きく 3 種類に分けられる。

1 のように稚拙な角押文によってモチーフを描くもの (阿玉台 1 a 式)。2 から 6 のように器面に楕円区画文を設定しその内側に一条の角押文を施すもの。この中には 2 のように地文縄文をもつもの、3・5 のように区画内充填を意識しての角押文の窺えるものも含まれる (阿玉台 1 b 式)。更に 7・8 や第27図 2 も II 類に含まれよう。

第27図 2 は唯一復元実測のできたものである。やゝ内湾気味に開く口縁部をもち、文様としては口縁外側の「V」字状の隆帯貼付 (4 単位) のみである。地文は無い。口唇部断面形などからして、阿玉台 I～II 式の中でもやゝ古手の特徴を有している。

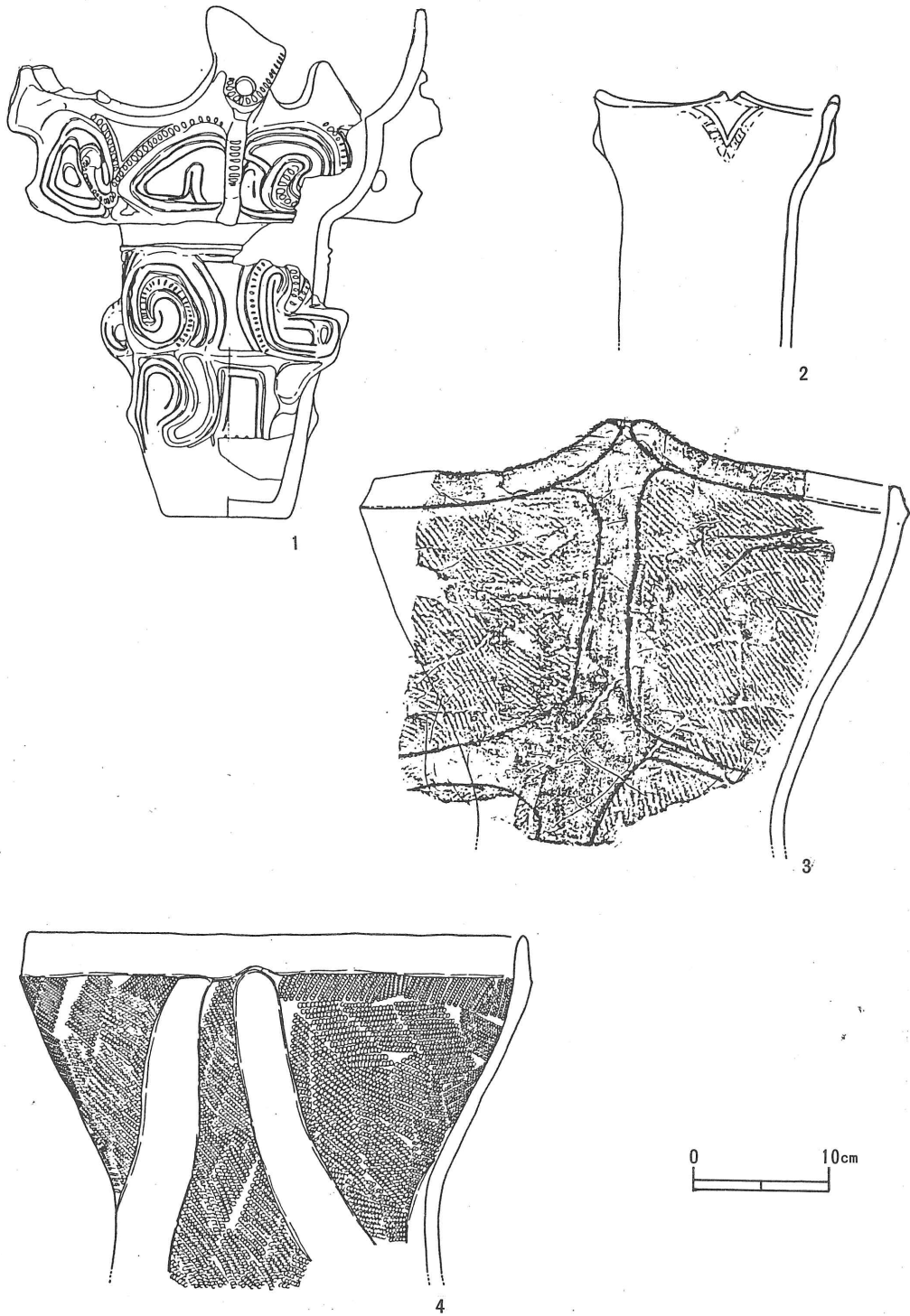
III 類 (第27図 1, 第31図 11～19, 図版21, 24)

阿玉台 II 式に比定されるものである。

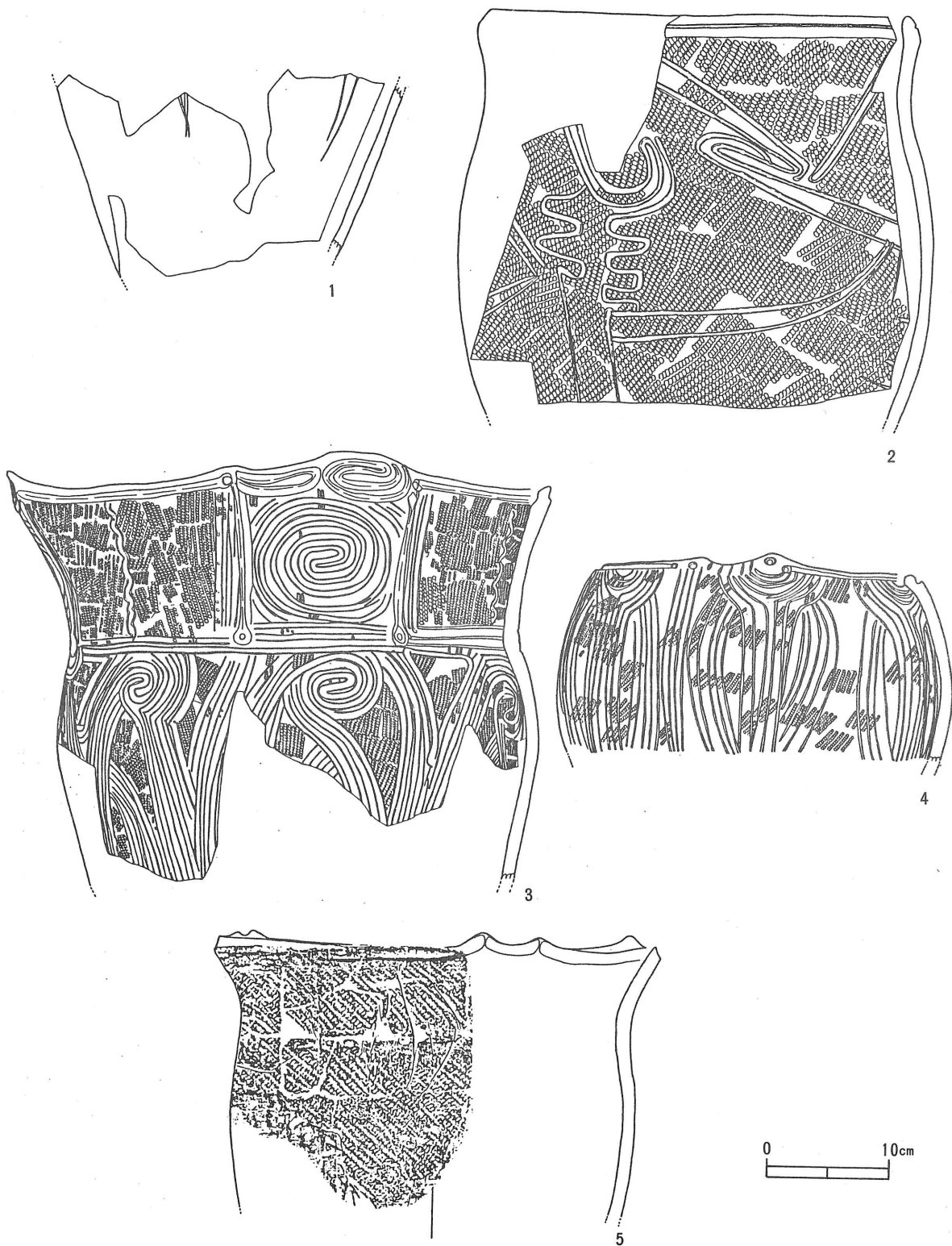
器表面に隆帯を貼付し、それに沿って複列の角押文が特徴的である。第27図 1 の完形土器もこの類に含まれる。隆帯上にはへら先などによる刻みが施される。それに沿う角押文は二条から三条を数える。また、角押文に代って沈線を施したものもある (第27図 1, 第31図 11・12)。

第27図 1 の完形土器は以下のように観察される。

口縁上には大小あわせてひとつの大きな把手を四単位配置する。文様帯は頸部無文帯を境に上下に分かれている。上位文様帯は丁度口縁部にあたる。大把手の直下に板状の突起を有する。各突起の間には断面半円形の隆帯による区画が作られ、隆帯に沿って三条の沈線が施される。隆帯及び板状の突起の上にはへら先による刻目を観察できる。下位文様帯は胴部にあたる。更に中程で上下二つに分かれる。上下の境には円環が貼付される。隆帯と沈線の文様展開は口縁部とほぼ同様となっている。

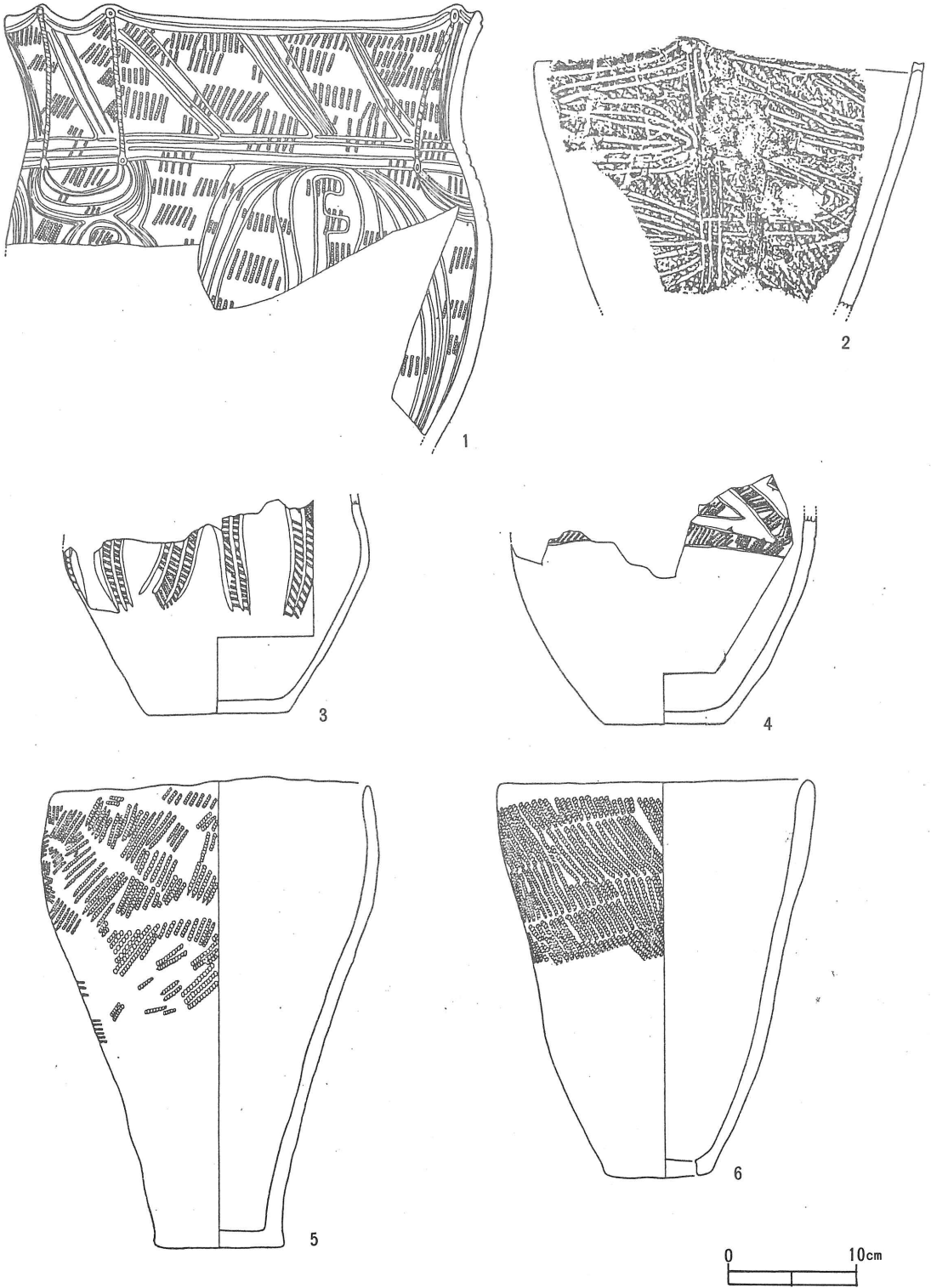


第27図 出土土器実測図 (1. 単独出土 2. 包含層
3. 2号ピット 4. 3号ピット)

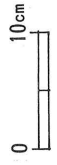
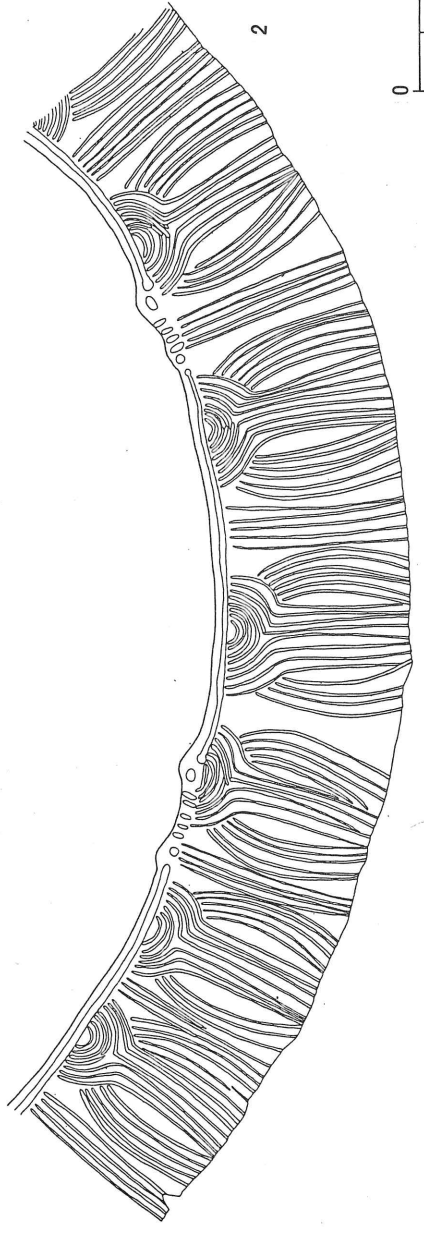
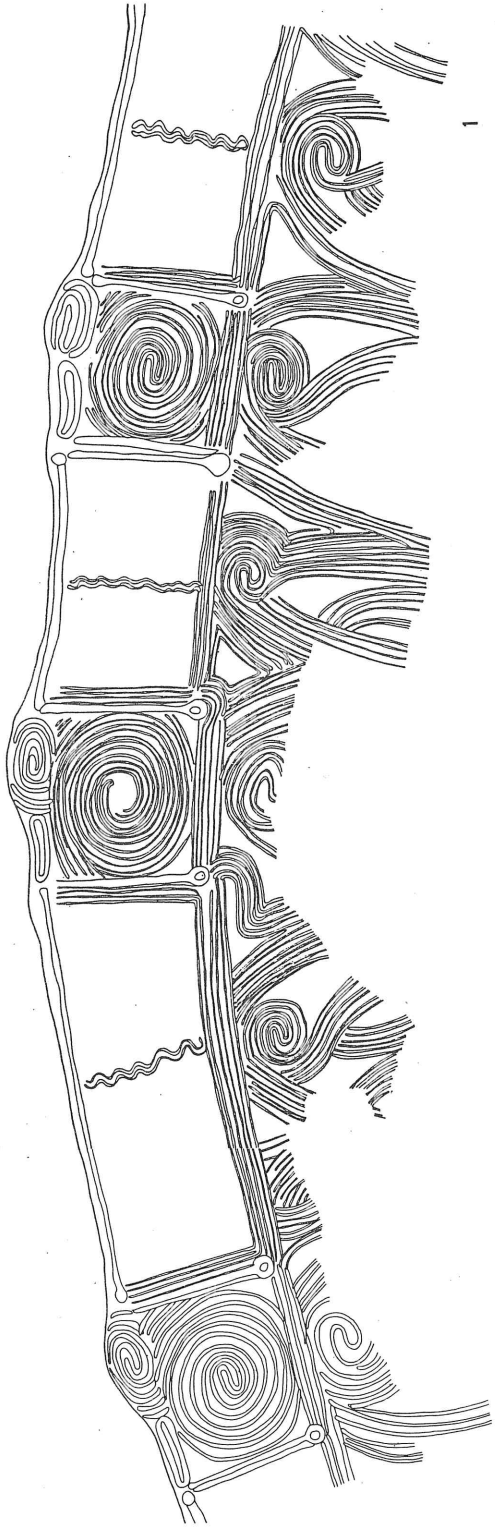


第28图 出土土器实测图

(1. 5号土器埋設遺構 2. 6号土器埋設遺構)
 (3. 1号土器埋設遺構 4. 2号土器埋設遺構)
 (5. 5号土器埋設遺構)



第29圖 出土土器実測図 (1・2. 5号土器埋設遺構周辺 3. 4号土器埋設遺構)
 (4. 3号土器埋設遺構 5. 4号土器埋設遺構
 6. 9号土器埋設遺構)



第30图 出土土器文様展開図 (1. 1号土器埋設遺構 2. 2号土器埋設遺構)

IV類（第31図20～28，第32図7，図版24，25）

平口縁或いはゆるやかな波状口縁の土器である。口唇部は短く外反し，内湾気味に開く口縁部をもつ。口唇部直下乃至は口縁部中程に刻目を横位に廻らしている。II類・III類に比べ飾られない土器である。刻目を詳細に見ると，いくつかの種類を窺うことができる。幅9mmから18mmの爪形を施すもの（第31図20～22，24～27），円形刺突のもの（第31図23），半截竹管状の工具で押しきするもの（第31図23，第32図7）である。これらの土器は阿玉台I式からII式に伴うものである。

V類（第31図29～32，図版24）

阿玉台II式からIII式に属する土器である。

隆帯に沿ってしっかりした二列の角押文の施されたものである。30は地文に縄文をもつ。いずれも小破片であり，III類・VI類のいずれに属するか判断の困難なものをこの類とした。

VI類（第31図33～37，第32図1・2，図版24，25）

阿玉台III式に属する土器である。

隆帯に沿って爪形文或いは幅広の角押文を施す土器である。隆帯でつくられる区画文は楕円文が基調となる。37は口縁部把手の一部であろう。楕円区画内には沈線によるジグザグ文などが施されるものがある。（第31図35，第32図1）。爪形或いは角押文を注目すると幅広で彫の深いもの（33・34・第32図2）と幅狭で彫の浅いもの（第31図35・36・第32図1）の二種ある。

VII類（第32図3～6，図版25）

阿玉台IV式に属する土器である。

3は隆帯を眼鏡状に貼付したもので，隆帯上には刻目が施される。4から6は短く外反する口縁部を持ち，いずれも地文に縄文を有する。4は隆帯上にまで縄文を施したものであり，隆帯の下には沈線による波線文を廻らしている。また5・6の隆帯は断面三角形の形状となっている。

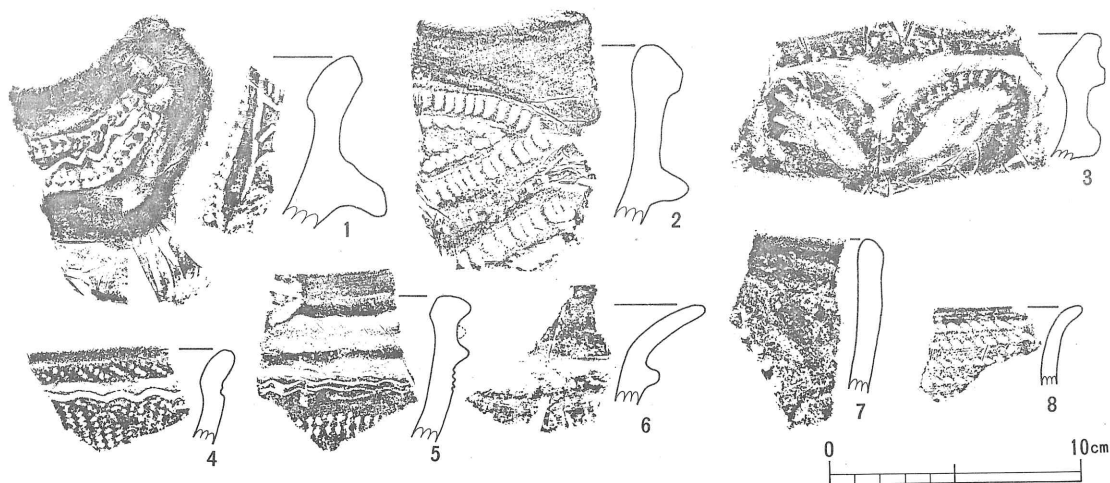
第2群土器（第33図1～9・12・13，図版25）

中期中葉の大木8a式段階に属する土器である。計191片出土した。これは土器片総数の4.6%にあたる。

1は短く外反する口唇部を持ち，口唇上に平坦面を作り上げている。口唇平坦面上には浅い凹線を施す。更に口縁部内側に低い稜を窺える。表面には縄文が施されている。2・3は口唇外側に突帯を廻らし，口唇上に広い平坦面を作り上げたものである。口唇平坦面上には，2では二本沈線文・3では凹線による渦文様の文様が窺える。なお2の口唇突帯は波形状に取付けられる。2・3ともに地文に縄文を用いる。2は口唇上にまで縄文が施されている。4は口縁部に帯状の文様帯を廻らしたものである。文様帯下端は隆帯で区切



第31图 出土土器拓影图(1)



第32図 出土土器拓影图(2)

られ、「S」字状の貼付などが行われる。5～7は口縁上に立体的な把手などを作り上げるものである。6は二本単位の貼紐で口縁部に区画文を作る。7は口縁部外側に隆帯を廻らして、隆帯間に沈線による楕円などの区画文を作る。8・9・12・13は隆帯によって口頸部に大きな区画を作り、区画内を太い沈線で充填するものである。大木8 a 式の後半に位置づけられる所謂浄法寺タイプに属するものであろう。

第3群土器（第33図10～11・14～22，第34図1～2・4～5，図版25，26）

中期後半の大木8 b 式及び加曾利E I 式段階に属する土器である。計271片を数え、それは土器片総数の6.7%を占める。いずれも口縁部の区画文と渦文を特徴とする。大きくI～Ⅲ類に分けられる。

I類（第33図10～11・18，第34図4，図版25，26）

一本乃至二本の貼紐によって口縁部の区画文を描き、区画内に太い沈線を充填するもの。沈線を充填する前に地文の縄文を施している。区画は大振りであり、おそらく口頸部表面全面にわたっているものと考えられる。

Ⅱ類（第33図14～15・17，図版25）

貼紐一本で口縁部文様が施される。Ⅲ類のように貼紐の背や両側を器面へ撫でつけられることはなく、割合剥がれ易くなっている。渦巻文や剣先文らしいものを窺うことができるが、これも貼紐一本で作られる。口頸部の文様はⅢ類のように楕円などの区画構成はとらないようである。地文に縄文が用いられる。第3群土器の中でも古手の様相を持つ。

Ⅲ類（第33図16・19～22，第34図1～2・5，図版25，26）

二本単位の隆帯により口頸部に楕円形の区画文が配置される。更に区画間内に渦巻文が



第33图 出土土器拓影图(3)

多用される。口唇上には一本の沈線が廻らされる。隆帯の二本単位は見かけ上であり、実際には太い隆帯の中央に沈線を施し両側を器面に撫でつけるようにして作ったものである。渦文なども、太い隆帯内に沈線を施すなどして作り上げたものである。

第4群土器（第34図3・6～21，図版26）

中期後半の加曾利EⅡ式からEⅢ式段階に含まれる土器群である。計462片検出され、土器片総数の11.1%を占めている。

口縁部に楕円区画などの区画文を持つもの（3・6～15），区画が器面全体に及ぶもの（18・19），口縁部の隆起帯のみ確認できるもの（16・17・20・21）の三種に分けられる。このうち口縁部に区画文を持つものにもいくつかの種類がある。3及び6～9は断面半円形の隆帯を使用し窓枠状の楕円区画を作るものである。7には渦巻文を残している。9には縦位の磨消帯を窺うことができる。対して10～15は口縁部にやゝ広い無文帯を配し、低い隆帯で大振りな区画を行うものである。18・19は口縁部に2～3cmの幅広の無文帯を持ち、おそらく器面全体に大振りな渦巻などの区画を有するものであろう。隆起帯のみ確認できるものも口縁部無文帯を配する。隆起帯は断面三角形の形状となる。更に隆起帯二本のもの（16・17），一本のもの（20・21）に分けられる。

3，6～9は加曾利EⅡ式段階，10以降は同EⅢ式段階とみられる。

第5群土器（第27図3・4，第35図，図版21，27）

中期末葉の加曾利EⅣ式段階に属する土器群である。計738片検出し、総数の17.8%を占める。沈線文によってモチーフを描く土器と隆起線によるもの大きく二分類できる。量的には隆起線によるものの方が多く占める。

I類（第27図3・4，第35図1～3・5～6・8・14～21）

隆起線によって文様を描く一群である。a～e種に分けられる。

a種（第27図4，第35図1～3・5）

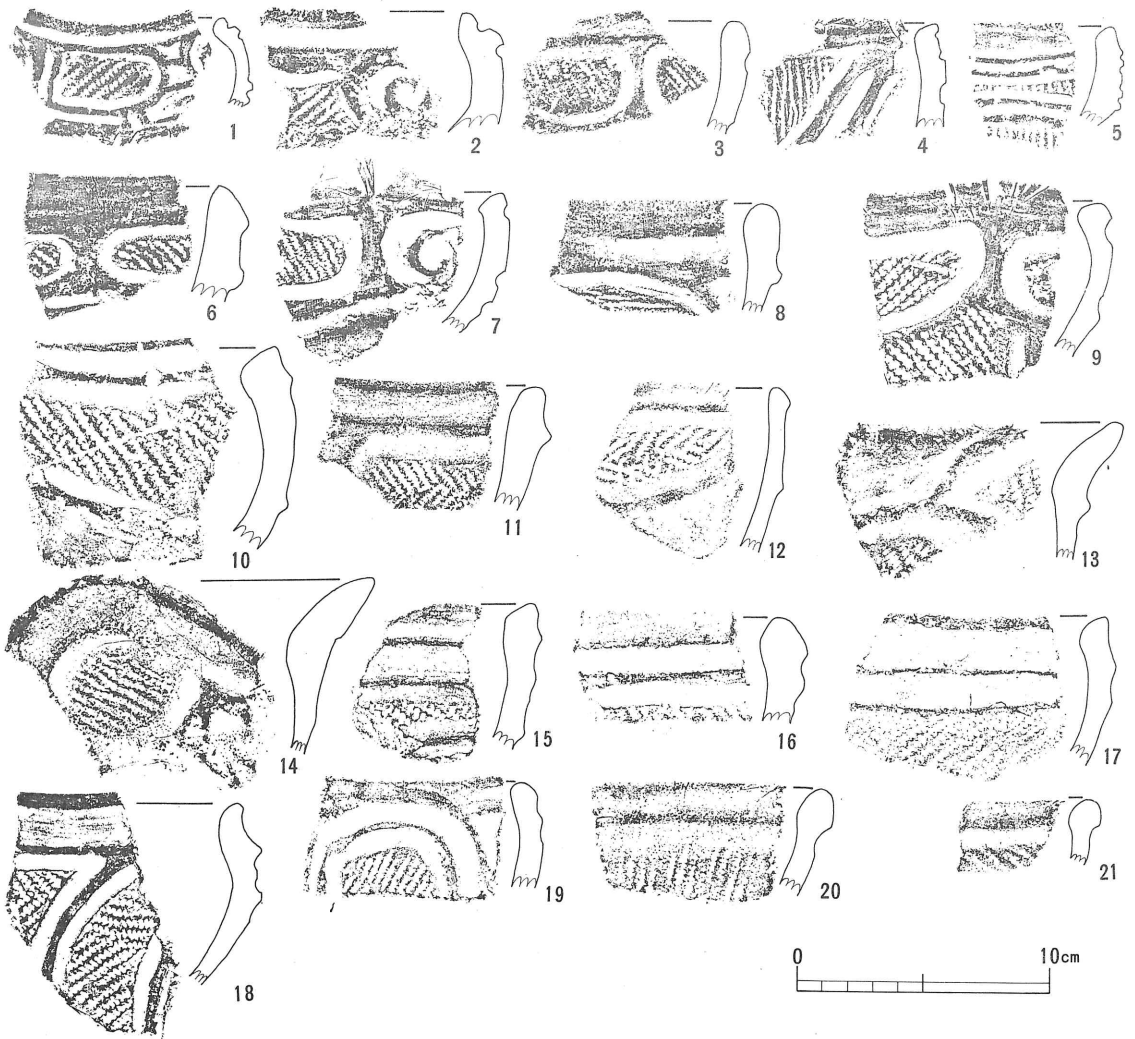
口縁は平口縁である。口唇部に幅広い無文部を廻らし、地文縄文に無文帯が逆U字・V字状に貫入するものである。口縁無文部と縄文部との境は断面三角形の隆起線を施す。

b種（第27図3，第35図6・8・17）

a種と同様無文部と縄文部との境に隆起線を用いるが、器全面にa種よりも無文部が広がる。つまり6及び8のように縄文部を円形乃至は楕円形（第27図3は方形）に区画するものである。文様は頸部を境にして上下二段構成となる。口縁部外側には幅広の無文部を廻らす。また口唇上に突起を有し、小波状口縁となる。

c種（第35図14～16・18）

口縁部外側に幅広い無文部を有する。口唇上には突起を持つか或いは波状口縁の形態を



第34図 出土土器拓影図(4)

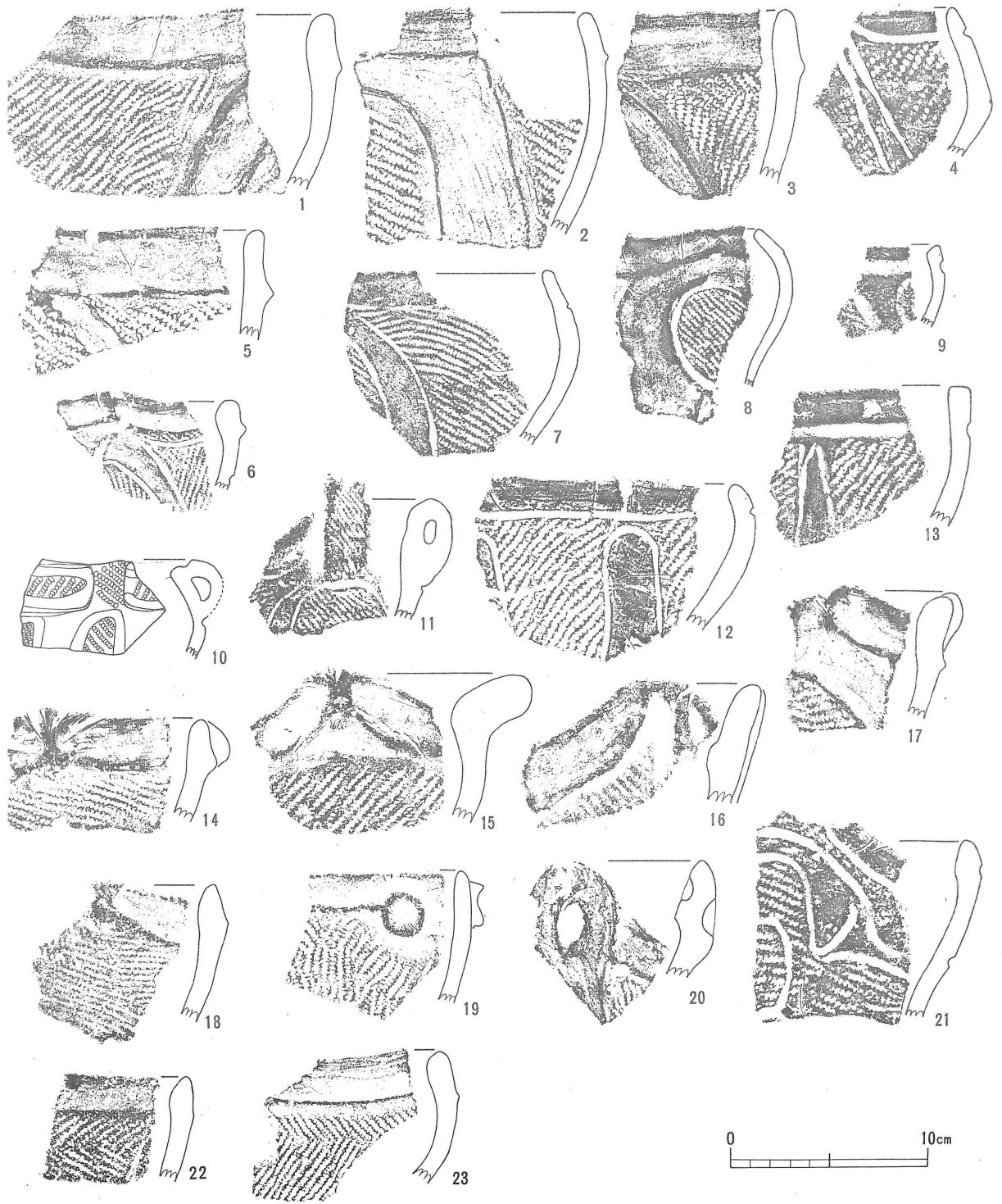
とる。口縁部以下は地文の縄文のみ施文される。口縁部外側の無文部と以下の縄文との境は断面三角形の隆起線で区切られる。

d種 (第35図19・20)

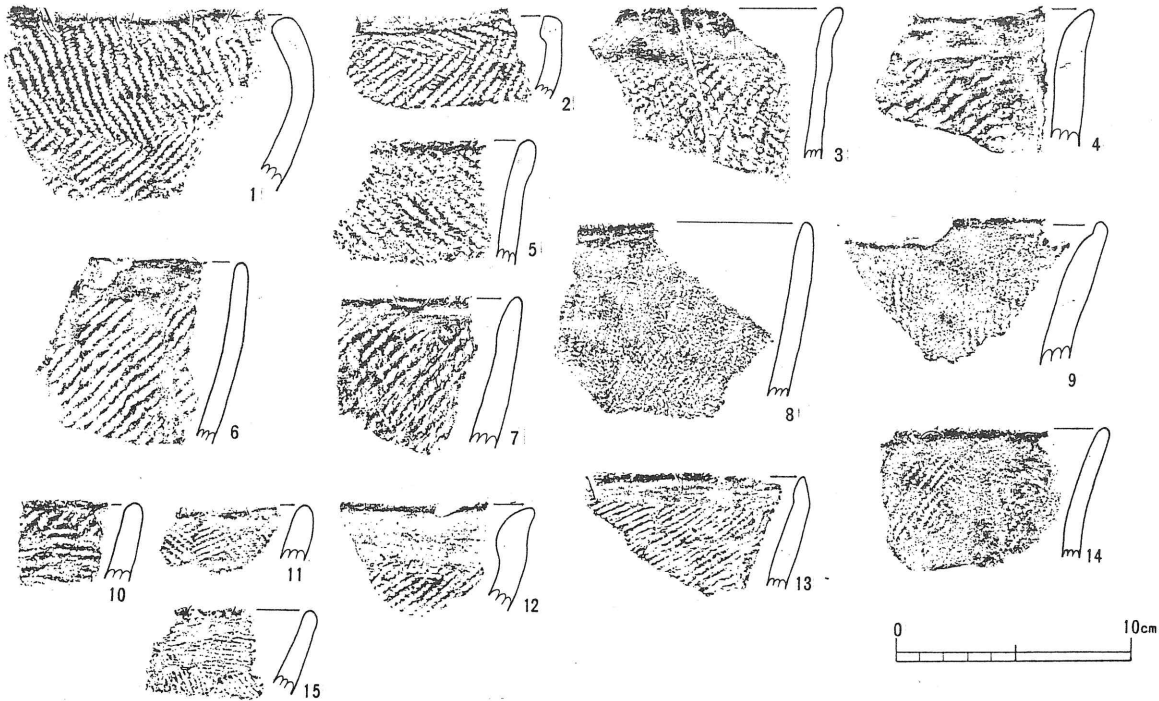
19は平口縁, 20は波状口縁であり, 作り方はc種と同じである。ただ口縁部外側に円形或いは楕円形の貼付文があるので別種とした。

e種 (第35図22・23)

平口縁である他, c・d種と作り方は同じである。ただ, 地文縄文が羽状構成となっている。



第35图 出土土器拓影图(5)



第36図 出土土器拓影图(6)

Ⅱ類 (第35図 4・7・9・10~21)

沈線によってモチーフを描く土器群である。次の a~d 種に細分できる。

a種 (第35図 4・7・11)

I類 a種と同じ文様構成をとる。無文部と縄文部との境に沈線を用いることのみ異なる。11のように環状の把手を持ち波状口縁のものもある。

b種 (第35図 9・10)

I類 b種とほぼ同じ文様構成をとる。無文部と縄文部との境は沈線による。I類 b種のうち 6 や 8 は沈線も併用している。また 10 のように環状の把手を持つものもある。

c種 (第35図 12・13)

I類には無いタイプである。口縁部に幅広の無文部をつくり、以下との境に沈線を用いる。口縁部から胴部にかけては沈線によって大きな波形に区画するものである。波形内には縄文を施文する。12・13とも平口縁である。

d種 (第35図21)

沈線によって入組文的な文様構成をとるものである。或いは後期に含められるかもしれないが、ゆるやかなキャリパー状の器形をとるので中期のものとした。

第6群土器 (第36図, 図版28)

地文縄文のみで中期に含まれるものを一括した。おそらく第4群以降に伴うものとみられる。

1及び2のように口縁部から縄文が施文されキャリパー状の器形のものがある。縄文は羽状構成をとる。3～9・12のように口縁部に無文帯を設けるもの、口縁部は外反する。13, 14のように外反する口縁部を持つもの、口縁無文帯を窺えないもの。10～11・15のように外反する口縁部を持ち羽状構成などの特殊な縄文を有するものがある。

3. 縄文時代後期の深鉢形土器

後期に属する土器片の数量は2,048片である。これらは称名寺式から加曾利B式にわたり、5群に分類できる。

第1群土器 (第28図1, 第37図, 図版22・29)

後期初頭の称名寺式段階に属する土器群である。計317片検出され、総数の7.6%を占める。I～IV類に細分できる。

I類 (第37図1～11, 図版29)

沈線と縄文によりモチーフを描く一群である。a～cの三種に細分できる。

a種 (1～4)

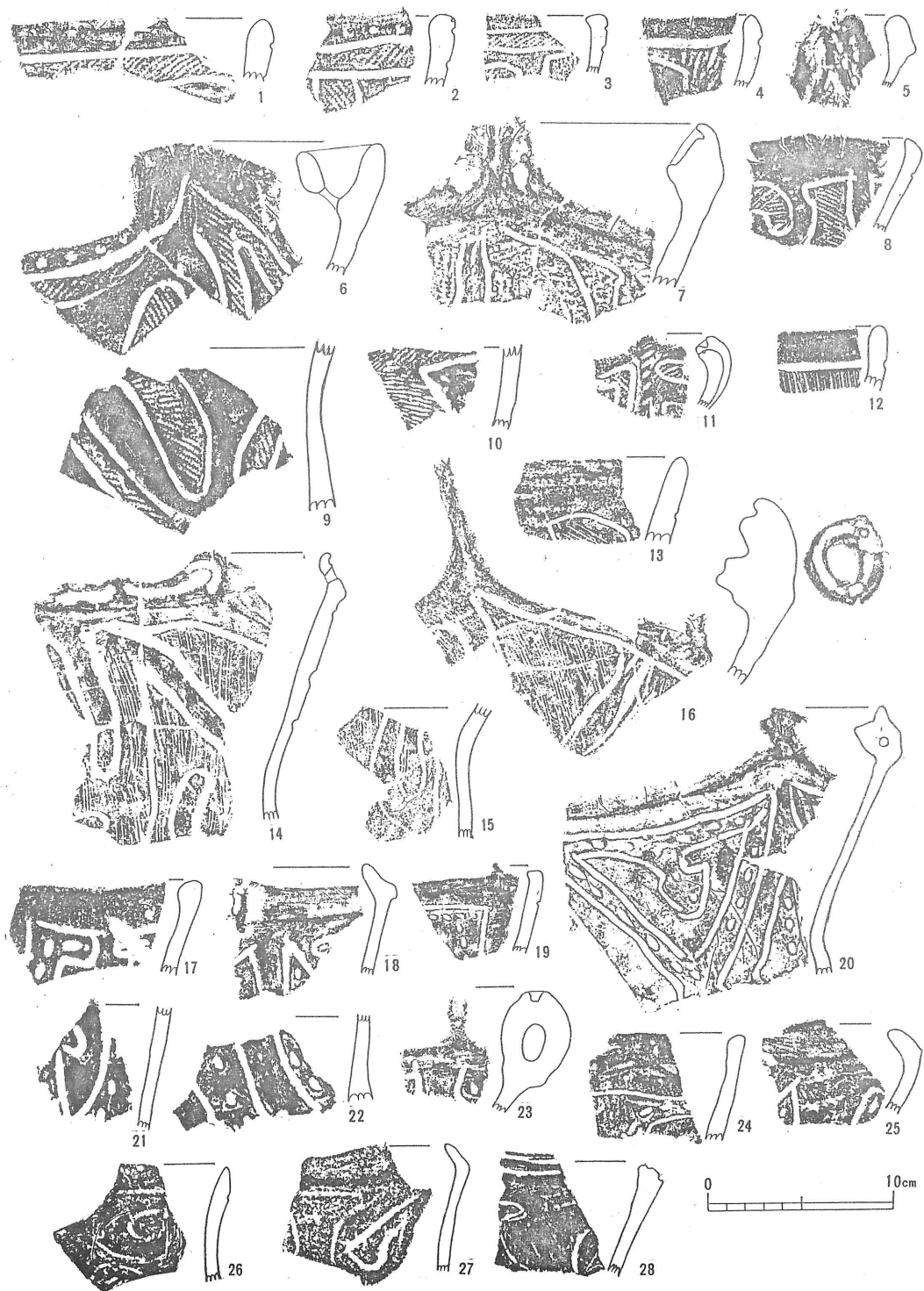
平口縁の土器である。口唇部外側に無文帯を設け、口唇直下に一条の沈線を廻らす。更に沈線下に一条の縄文帯をつくる。この縄文帯より垂下する文様を持つものである。おそらく称名寺式特有の「J」字文やスペード文などが明確につくられるものであろう。称名寺式としてはやゝ古手のタイプである。

b種 (8)

a種の文様の陰陽を反転させたものと思われる。平口縁であるが、口唇外側の屈曲が明瞭に窺える。口唇部外側の沈線や縄文帯が窺えない。文様は横方向に展開し、「Y」字状「X」字状、渦巻文やスペード文で器面を飾っているものとする。a種よりはやゝ新しいタイプになるだろう。

c種 (5～7, 9～11)

大振りな把手を持つ一群である。把手の中には筒状に作られたものもある(6)。7の把手の内側には刺突と粘土紐貼付によって円環が作られる。無文部と縄文部を入組文的に配



第37图 出土器拓影图(7)

置し、中心的なモチーフの判別は困難なものである。6の口縁部外側には円形刺突を一列配する。11は刻目を持つ隆帯を縦位に貼付け器面を縦に割付けたものである。a種・b種などよりは更に新しい様相を持つと思われる。6のみ、口縁外側に縄文帯を作り、それより垂下するモチーフが窺えるなどや、古手の特徴を有する。6と9は同一個体である。

Ⅱ類（第37図12～16，図版29）

沈線と条線によりモチーフを描く一群である。12～16は同一個体である。口縁上に大きな把手を有する。把手の内側には円形刺突を持つ円形の沈線文を配する。口唇は内屈する。口唇外側には両端に円形刺突を持つ沈線文を一条廻らす。文様構成的にはⅠ類c種に類似するものの、沈線による区画は平行沈線的にはならない。また中心的なモチーフの判別は困難である。称名寺式でも新しいタイプに属するものとみられる。

Ⅲ類（第37図17～25，図版29）

沈線と沈線間の刺突でモチーフを描く一群である。口縁内屈するもの（18，20，25）と平口縁のもの（17，19，24，25）がある。18や20は波状口縁となるらしい。18には口縁外側に「ノ」字状「C」字状の貼付が窺える。20には環状の把手が取付けられている。描かれるモチーフは、20のように三角や菱形の各々独立した区画を器全面に飾るものと17～19・20～23のように横方向に連結し展開するものの二種ある。両者ともスペード文や「J」字文などを痕跡的に残す。24・25の沈線は細くなり、モチーフもくずれてくる。かなり新しい段階のものと考えられる。

Ⅳ類（第37図26～27，図版29）

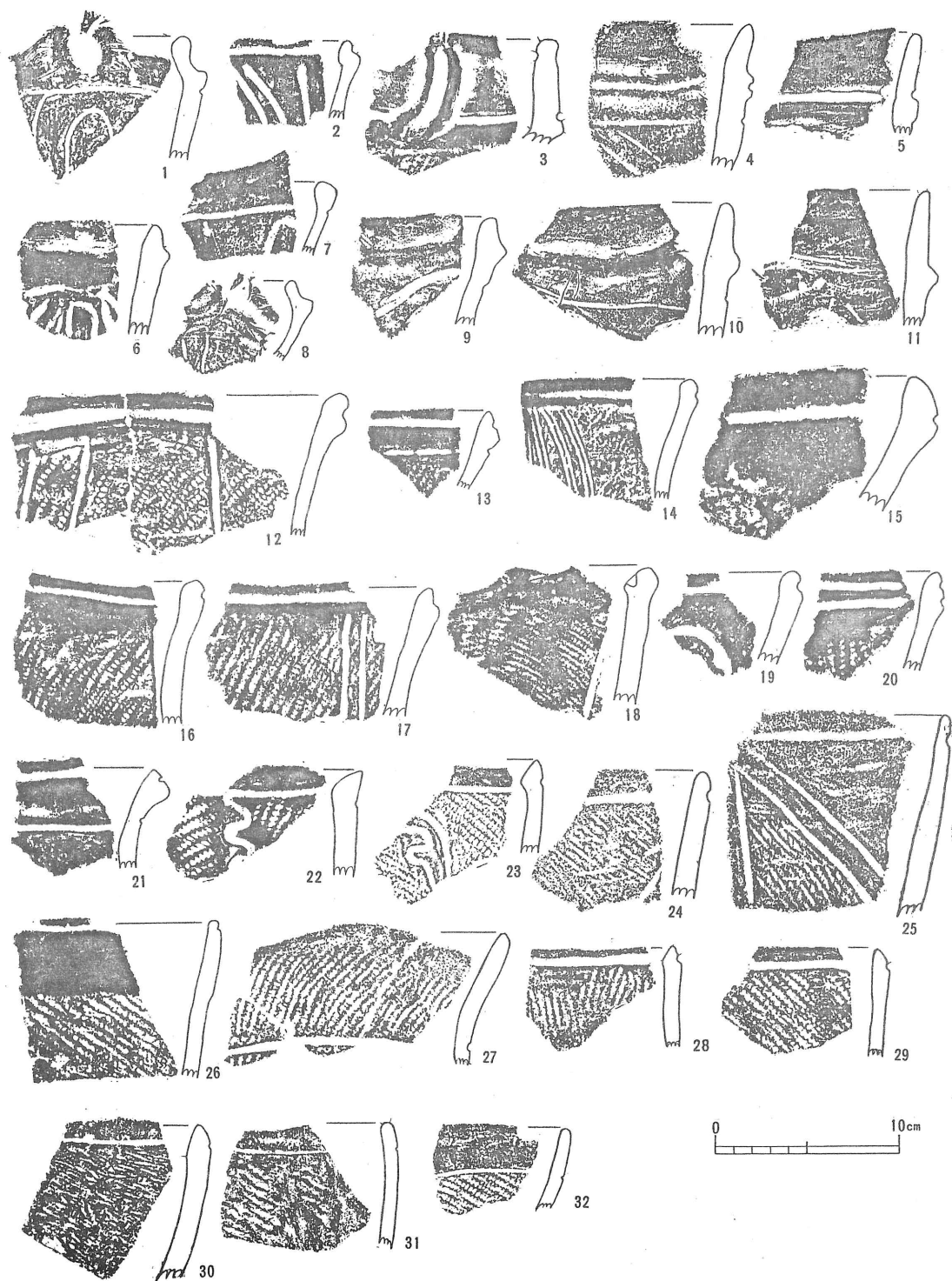
沈線だけでモチーフを描く一群である。次期の堀之内式への過渡的な様相を持つものと思われる。沈線は細くなり、小さい渦巻や痕跡的なスペード文などが描出される。第28図1もこの類に含められる。称名寺式としては最新期に位置づけられる。

第2群土器（第28図～30図，第38図～40図，図版22～23，図版30～32，図版34～37）

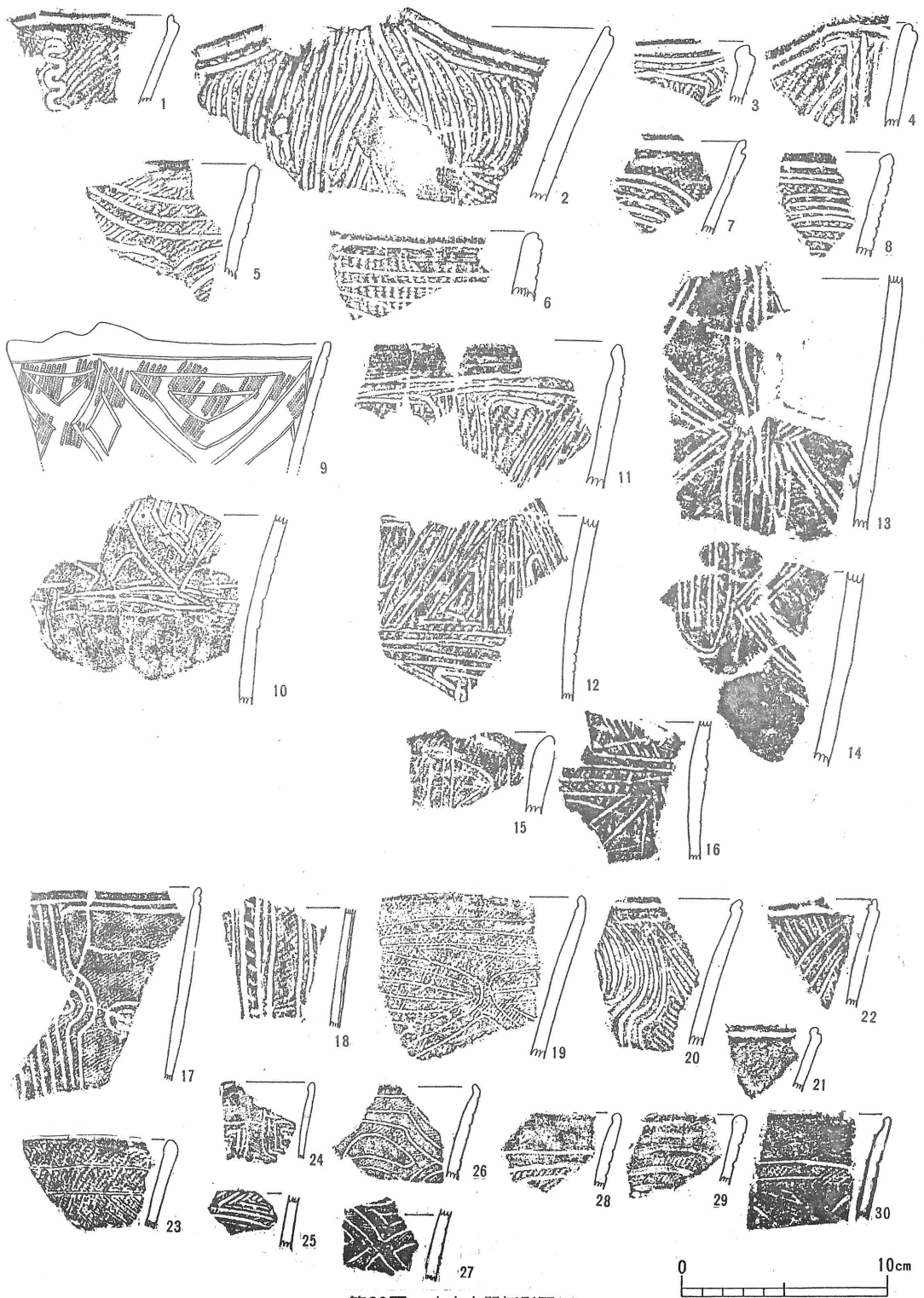
堀之内Ⅰ式段階に属する土器群である。計1,569点と最も多く検出された。それは総数の37.9%を占める。但し器形を窺い知ることができるものは土器埋設遺構出土の数点以外にはない。大半は破片資料であった。従って第2群土器の分類にあたっては文様の要素の差異を基調とした。例えば沈線のみで文様を描出するもの、それが沈線と縄文によるもの、更にそれらに刺突や貼付をプラスされるもの等々である。また、地文縄文のみ施されるものや第1群，第2群どちらに含めて良いか分別の困難なものについては後期の土器群として一括した（第5群土器）。こうして、第2群土器はⅠ～Ⅴ類に分類できた。

Ⅰ類（第38図1～7・9～11，第40図5，図版30，32）

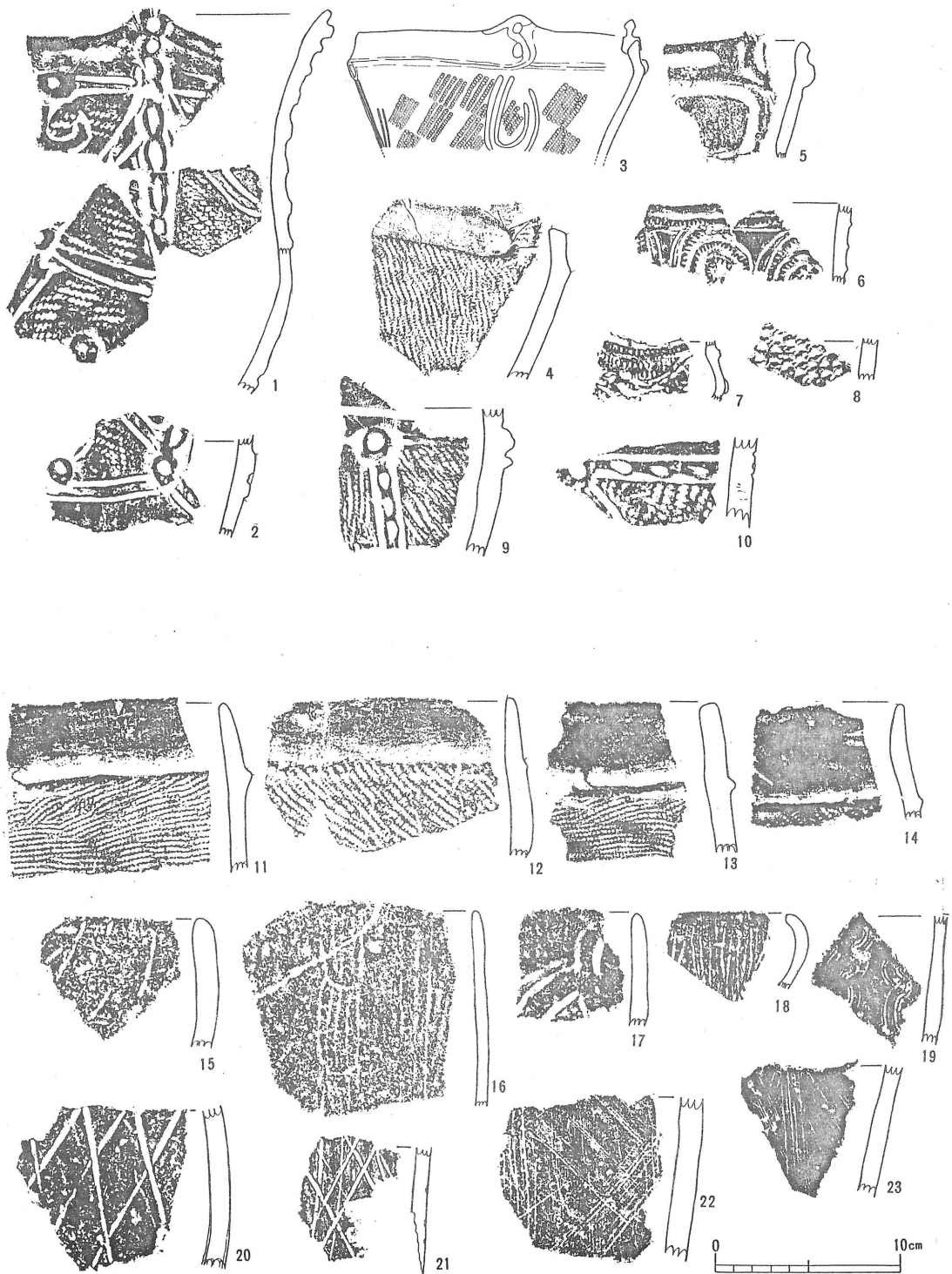
沈線のみで文様が描出され、地文を持たない土器群である。口唇部が内屈気味のもの



第38图 出土土器拓影图(8)



第39图 出土土器拓影图(9)



第40图 出土土器拓影图(10)

第38図1・2、第40図5)と口縁部の外反気味のもの(第38図3~7、9~11)の二種窺える。第38図2を除きいずれも口縁に幅広い無文部を持つ。両者とも頸部でくびれを見せる甕形の器形であると考え。外反する口縁下には隆帯を廻らし、口縁部と胴部文様帯の境を成す。幅広い口縁部は1のように突起を持つものもあるが、3のような「ノ」字の貼付、第38図5のような沈線文などで飾られる。胴部以下の文様は1のような平行沈線による曲線文など、それ程複雑には施されることはないようである。但し、2や6などは沈線の本数が増えているので、場合によるとより新しいタイプに含まれる。とくに2は、外反する口縁上部にまで沈線文が施されることから堀之内I式でも新しい段階と考えた方がよいだろう。I類に含まれる土器群は沈線文のみでモチーフが描出されることから、称名寺式の流れを多く汲むものと考え。しかし、関東南西部などに多くみられる後期初頭の沈線文を多用する土器群との関連も考えなければならない。1についてのみ、口縁部から頸部まで大きく外反する器形とみられ、称名寺式の器形とかなり近似したものと思われる。他については、口縁部から頸部の外反はより短くなり無文部をつくること、頸部に隆帯を廻らすことなど器形的には既に称名寺式からは逸脱している。また第43図1~19までの中にはI類に含めるべきものも含まれよう。

II類(第28図2・3・4、第29図1・2・3、第38図12~32、第39図1~16、第40図3、第42図25・27~30、第44図1~7・9~26(23~25除く)、図版22・23・28・30・31・32・35・36)

地文縄文上に主に沈線によってモチーフを描く一群である。次のaからd種に細分が可能である。第2群土器の中でも最多量を占める土器群である。

a種(第28図2、第38図12~13・15~29、第39図1、第40図3、第43図9)

平口縁のものが大半を占める。

器形的には、頸部でくびれる甕形に近いもの(第38図2、第38図12~13・15~21、27~29)と底部から直線的に或いは外反気味に開く深鉢形(第28図22~25、第39図1、第40図3)の二種類ある。前者は頸部に横方向の沈線を廻らし上下文様帯を区切るようにする(第28図2は例外)。口唇外面には1条の沈線を例外なく廻らせる。外反する口縁部には太い沈線で縦位の文様を描出する。おそらく各单位文は独立的に配置されるものと予想される。一方、直線的乃至は外反気味に開く器形のもの、口唇部や下に沈線を廻らし、口唇外面に無文部を作出する。文様帯は甕形のように上下に分けられることはない。口唇部沈線下より太い沈線による文様をつける。文様は各单位毎に独立し、沈線などによる各单位間の連絡文などはほとんど窺えない。文様モチーフは甕形・深鉢形とも同様である。「J」字文・蕨状文・平行沈線文など使用される。これらは、b種以降のように大きな楕円文や集合沈線

文などに囲まれたりすることはない。更に、第38図23～25などは沈線文内を磨消している。

a種に属するものの中で器形の窺い知れるものは第28図2と第40図3である。これらは次のように観察される。各法量については第3表参照。

第28図2，平口縁である。口縁部は短く外反する。胴部最大径は中程にあり，口径よりも大きい。口唇はやゝ内屈し，外側に1条の沈線を廻らす。文様の展開は口縁部から胴部中央にわたる。地文縄文上に二本単位の沈線でモチーフを描く。モチーフとしては，逆J字文と蛇行文の上下組合せを描く。更に，各モチーフを二本沈線入組文的なものでつないでいる。頸部に上下文様帯を区切る沈線など施文しない。a種甕形としては少々異質なものと考える。

第40図3，口唇上に円形刺突を持つ突起をつけ，内傾する口縁部をもつなどⅡ類の土器群としては様相を異にする。Ⅱ類a種の土器群としたのは，地文縄文上に沈線によってモチーフを独立的に描いていることからである。口縁内傾すること，そして幅広い無文帯を有することなど，本県域ではそれ程多出する器形とは言えない。おそらく異系譜のものとして把える必要があろうかと思われる。胴部に描出された逆J字文の内側は無文（磨消）となっている。

a種の土器群は，当遺跡より検出された堀之内Ⅰ式のなかでは古い段階のものとは判断できる。

b種（第28図3・4，第29図1・3，第43図21～25・27～30，第44図1～7・10～11・14～26）

Ⅱ類の中で最多量検出された一群である。また土器埋設遺構として盛んに使用された土器でもある。頸部でくびれをみせる甕形（第28図3，第29図1）が大半を占める。第28図4のみb種には例外的な器形であり，内湾気味の口縁を持ち底部まで直線的にスボまる器形のものである。口唇上に刺突を使用した各種の突起が取付けられたり，口縁部の要所に縦方向の刻目付隆帯の目立つ土器群である。

文様帯の構成を概観すると次のようになろう。口唇部文様帯，各種の突起とそれをつなぐ一条の沈線。頸部に一条乃至二条の沈線を用い口縁部文様帯と胴部文様帯を上下に区切るもの（第28図3，第29図1，第44図17～21）と上下文様帯を区分しないで口縁部と胴部をひとつの文様で飾るもの（第28図4，第43図21～30，第44図1～7・10～16）の二種類ある。更に上下文様帯を区切るものは，口縁部を無文とするもの（第44図18～22）と口縁部に各種の単位文を施すもの（第28図3，第29図1など）がある。

次に器面に描出されるモチーフについて見てみる。おそらく全てのモチーフは3単位乃至6単位施されるものとみられる。第44図1や第44図14などには蕨状文の名残をみることができ

る。但し蕨状文は単体でつけられることはなく、楕円文などによって囲まれる。これらは沈線によって表現されるが、a種などに比べると三本単位以上と数多くなる。蕨状文はその後第28図3の胴部文様や同図4のような文様に変化する。それを囲む楕円文の沈線本数は四～五本と更に多くなる。同時に渦巻文なども多用される。更に変化すれば、第39図2や第44図13のようになると考えられる。第29図3は特殊な例ではあるが、第29図1などと同様と思われる。

b種に属するもののうち完形に近いのは第28図3・4と第29図1・3の四個体である。これらは以下のように観察される。

第28図3，ゆるやかな波状口縁をもち頸部でくびれる甕形の器形を示す。波状口縁の波頂部には大小一組の突起を全周に三単位取付ける。突起の下には太い沈線によって渦文と楕円文が描かれ、各突起を結ぶ一条の沈線とともに口唇部文様帯をつくる。口頸部には口唇突起下に縦位の隆帯二本貼付と四本の縦位沈線文によって方形の区画を三単位つくる。区画内は沈線による大形の渦巻文を充填している。隆帯の上端と下端には円形の刺突を施している。各区画文の間には二本単位の縦位の波線文が窺える。頸部に廻らした横位の沈線文を境として、口頸部文様帯と胴部文様帯を区分していることは先に記した。胴部文様は蕨状文から派生したと思われる渦巻文とそれを囲う楕円文とを一組として六単位繰返される。いずれも四本から五本の沈線を用い、a種にくらべ沈線の多条化は顕著となっている。文様の展開(第30図)は三単位を基本としている(胴部文様六単位もその倍数である)。このうち二組は半截竹管による鋭い沈線文によって文様を描いているものの、一組のみ幅4mm程度の一本沈線で描かれる。口唇部文様はいずれも一本沈線による。

第28図4，内湾気味に開く口縁部を持ち、胴部は底部に向かって直線的にすぼまる器形であろう。文様帯はおそらく口唇部と口縁部から胴部上半の二区分で構成されるものと考ええる。口唇部文様帯は円孔と刻みを持つ大小一組の突起一対と突起間に施された一条の沈線によってつくられる。口縁部以下は、四本から六本の沈線によってモチーフが描かれる。モチーフは渦巻が基調となったと思われる曲線的なものとそれを囲う楕円文である。器面を六単位割付け各単位独立的に描かれてはいるが、各単位の間隔が広すぎる場合はその間に縦位の沈線を充填している。第28図3の胴部文様と類似するが、より簡略化されたものと見ることができよう。

第29図1，頸部でくびれる甕形の器形であること、文様帯の構成の仕方も第28図3と同様である。つまり口唇部文様帯の突起と沈線，頸部に廻る沈線を境にして口頸部文様帯と胴部文様帯を区分すること等々である。更に各文様帯に描かれるモチーフは三単位を基本とする点も同様といえる。但し、描かれるモチーフは第28図3に比べるとまだ古い様相を

窺うことができるし、沈線の本数も四本と多条化の傾向はそれ程進んでいない。半截竹管などによる文様も窺えない。口頸部に描かれるのは斜方の沈線文のみである。隆帯で区画された中も同様の沈線文が施される。胴部に描かれるのは、蕨状文とそれを囲う楕円文の繰返しである。ただ口唇部突起下にあたる部分には、蕨状文の上に弧線文がつけられるなどまだ主要なモチーフの主体性を強く残していると考ええる。第28図3や4などよりはまだ古い要素を持っている。

第29図3、胴部下半のみ残存している土器である。全体の器形はおそらく第28図3や第29図1のように頸部でくびれる甕形とみられる。三本単位の楕円文の下半が窺えるが、全体の文様は不明である。但し、他の土器は地文縄文を器面全体に施しその上に沈線文を使用しモチーフを描くのに対し、沈線部分のみ縄文を転がすなど特徴的である。

c種（第29図2、第39図2～8、第44図12～13・26）

口縁部から底部にかけて直線的にすぼまる器形の深鉢形が大半となる一群である。口唇部上の突起はb種のようにバラエティーに富むものではなく、波状口縁の波頂部に円形刺突を付すといったような単純なものに変化する。文様帯の構成や器形全体を窺えるようなものは今回は検出されてはいない。ここでは、沈線の施文の仕方がa種・b種のそれと同様相を異にするということで挙げた種類である。

口唇外側の沈線はまだ顕著に窺える。沈線の要所（口唇突起下或いは波頂部）に円形の刺突を施す場合がある（第44図12～13・26）。地文縄文上に太い沈線を密接施文し、単位文など明確に残さない。但し、第44図13のみ例外で、b種第28図4で描かれたモチーフをより変化させたものである。これも、文様を描くための沈線は十本以上を数える。b種などに比べ飛躍的に多い数となっている。第29図2は比較的太い沈線を器面隙間なく施文し、もはや中心的なモチーフなど意識しないかのようにになっている。こうした密接施文の沈線が器面全体を覆い変化の余地を無くした時点で編み出されたのが次の段階（d種など）に見られる区画的な施文の仕方と考える。第29図2などにそのような萌芽を見て取ることができよう。つまり口唇突起下より縦位の沈線を施し、器面割付けの上ノ三角形などの大まかな区画をつくり上げようとしていることである。第39図4などにも同様なことが言える。

口唇突起下に縦位の沈線を施し、それによって割付けられた空間に斜方向の沈線を埋めていく。このような段階では、a種・b種などに比べ沈線の太さがかなり細くなることがわかる。c種の中でもいくらかの変遷は窺えると考ええる。つまり、第44図12～13・26などはやや古い一群とみてよかろう。第29図2をはじめとして第39図4などはやゝ新しい様相を持つと思う。

d種（第39図9～16）

検出量はⅡ類では最少となっている。9と10、11と12、13と14は各々同一個体の破片である。全て直線的に開く器形である。口唇外側の沈線は消失し、口縁外側には比較的広い無文部を残す。口縁無文部より下に細い鋭い沈線でモチーフを描出する。11の口唇内側には沈線があり、堀之内Ⅱ式への過渡的な一群といえそうである。10のように胴部下半に沈線を施し、文様帯を区切ることなどもそうである。

描かれるモチーフは、9や10のように三角区画文が顕著である。11は沈線本数は多いが、やはり三角形が基本の区画文の一種であろう。13や14はa種・b種の単位文の意味が失われ、大振りな「8」字文に変化したものである。しかも「8」字文の間には斜方の沈線で三角形の区画文的な施文がなされる。更に、沈線本数も多い。15・16に至っては、細く鋭い沈線で三角形区画を意識したモチーフが描かれるものの、もはやその名残りを止めるに過ぎない。

この一群は、堀之内Ⅰ式としては最新の段階に位置づけられると考える。

Ⅲ類（第40図1～2・9～10、図版32）

地文縄文上に沈線でモチーフを描く他に円形浮文や連続刺突など器面全体に用いられる土器である。1と2は同一個体である。

ゆるやかな波状口縁を持ち、頸部でくびれる器形である。口縁部は大きく外反し、外側上半を無文とする。更に口唇は斜めにそがれたように作上げられる。従って外側に稜を有する。波頂部より隆帯或いは平行沈線を垂下させ、隆帯上や平行沈線間に連続刺突を施す。これらは器面を縦に区切るのに使用したものである。縦位の隆帯などによって割付けられた器面には、頸部から胴部中央や下まで平行沈線によってモチーフが描かれる。一部に「J」字文を窺うことができる。沈線文の交点には必ず円形浮文が貼付される。また平行沈線の中は磨消し手法が取入れられたり、連続刺突が施されたり（10）する。胴部下半は無文のまま残される。

器形的にも文様のにも、Ⅰ類・Ⅱ類とは様相を異にする。出土量も少なく、異系譜のものともてよかろう。Ⅱ類a種などに伴う段階のものとも考える。つまり当遺跡で検出された堀之内Ⅰ式土器の中では古い段階に位置づけられよう。

Ⅳ類（第40図4、第43図17・20・24、図版32・35）

隆帯と地文縄文で飾られる一群である。

口縁部はやゝ内屈し、外側無文となる。ゆるやかな波状口縁の土器である。第43図20・24の口唇外側には一条の沈線を施す。器形的には第28図3に近い。口縁と胴部は微隆起帯

で境されている。口縁外側の無文部の要所（波頂部下）に隆帯が貼付される。第40図4は「ノ」の字隆帯、第43図17は三角形隆帯、第43図20・24は直線の隆帯である。このうち17・24の隆帯端には円形浮文が施されている。24は隆帯上の刻みが特徴的である。

上述の他、第43図1～15の中にも同様のものがあるかと思われる。これらは堀之内Ⅰ式でも古い段階のものともみてよからう。

V類（第40図6～8，図版32）

爪形の押圧や隆帯上の微細な刻みなどを特徴とする一群である。おそらく新潟県に標式遺跡を持つ三十稲場式に伴う一群であろう。三十稲場式の出土例は本県では今のところ三例知られている。共伴関係は明確ではないが、称名寺Ⅱ式から堀之内Ⅰ式の古い段階に伴うとみられる。6～7と8はおそらく器形の違いからくる文様の差であろう。

第3群土器（第29図4，第39図17～30，第43図26，第44図8，図版32・35）

堀之内Ⅱ式段階に属する土器群である。計16片検出され、総量の0.4%を占める。図示した資料が全てである。この段階には、今回調査区は遺跡の中心からは外れた位置にある。

底部から口縁部まで直線的に開く深鉢形の器形が大半となっている。口唇内側に一条の沈線を施すことがいずれにも共通する。第2群土器の名残りを止め地文縄文上の沈線によってモチーフを描く一群（第39図17～18・20～25，第43図26，第44図8）と磨消縄文或いは沈線間の充填縄文にてモチーフを描く一群（第29図4，第39図19・26～30）と大まかに二種類に分けられる。

前者に含まれるもののうち、第39図17～18・20～22はやゝ太い沈線を用いている。20～22などのモチーフは第2群Ⅱ類の新しい段階の土器群（例えばc種）にその起源が求められそうである。これらの口唇外側に一条の沈線が廻ることも特徴的である。対して第39図23～25は、用いられる沈線も細鋭化されている。更に24のモチーフなどは堀之内Ⅱ式の段階で登場するものであろう。25は胴部中央部の破片であるが、胴部中央で横線乃至は隆帯を一条廻らし文様帯を区切る手法がなされている。堀之内Ⅱ式段階の大きな特徴のひとつである。

一方、磨消乃至充填縄文の多用される一群の中には、第39図19のように第2群Ⅱ類d種の一部のモチーフをそのまま踏襲して磨消手法を用いるものもあるが、第39図26，27のように、曲線的なモチーフとなるものや、28～30のように口縁外側に縄文帯を廻らすものなどいくつかに分けることが可能である。第29図4は第39図9などに磨消縄文を採用したも

更に、第3群土器に施される縄文は、いずれを見ても第2群土器などに比べ細かいものである。

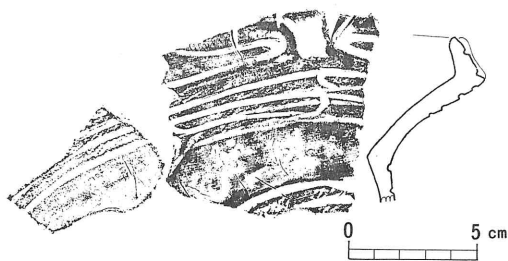
となっているのも特徴的である。

第4群土器（第44図，図版37）

縄文時代後期中葉の加曾利B式段階に属する土器である。今回の調査では図示した一個体分のみ検出した。調査区内では伴う時期の遺構検出はできなかった。

口縁部で内屈し，頸部の屈曲の強い深鉢形の器形である。胴部から底部にかけては，球胴に近い形態の土器であったろう。

内屈する口縁部外側には突起と沈線文，口縁部すぐ下には横位の沈線文とそれを区切る弧線文が施される。以下頸部は幅広の無文となっており，胴部上半に帯縄文を窺うことができる。



第41図 出土土器拓影図(11)

第5群土器（第28図5，第29図5・6，第40図11～23，第44図27・28・31～33・35，図版22・23・33・37）

縄文時代後期初頭に含まれる土器群ではあるが，第1群・第2群のいずれに含められるか不明のもの，或いは地文縄文のみ施されたものを第5群土器とした。計144点検出され，総量の3.5%を占める。

地文縄文のみのもものと沈線や条線を器面に施すものの二種類に分けられる。それぞれとⅠ類，Ⅱ類とする。

Ⅰ類（第28図5，第29図5・6，第40図11～14，図版22・23・33）

大きく三種類に分けることが可能である。ひとつは頸部でくびれる甕形の器形のもの（第28図5，第43図27・28）。ひとつは内湾気味に開口縁部と直線的にすばまる胴部を持つもの（第29図5・6）。ひとつは全体的に下膨れ気味の器形のもの（第40図11～14，第44図31～33・35）。それぞれa種・b種・c種とする。

a種（第28図5，第44・27・28）

器形的には，第2群土器Ⅱ類a種及びb種大半の土器と共通する。とくに第28図5は口唇上に突起を有するなどb種と類似する。施文位置をみても第28図5のように全面縄文を施すものと第44図27・28のように外反する口縁部を無文とし，頸部以下に縄文を施すものの二種窺える。更に後者は頸部に刺突ある隆帯を貼付けている。刺突も鎖状のもの（第44図28）と円形のもの（第44図27）がある。

b種（第29図5・6）

口縁部は内湾気味に開き，胴部から底部へは直線的にすばまる深鉢形の器形である。図示した以外は検出されていない。器形的には第28図4などと同種となろうか。第29図5と6は詳細にみると多少異なった器形である。つまり，胴部から底部にかけて5はすばまり方が急であるのに対し，6はやゝ膨らみをみせる。5の底部はやゝ外側に張り出す。

器表面口縁部から胴部上半まで縄文が施される。但し口唇部外側は無文とされている。5はL Rの原体の横転し，6はR L原体の横転しである。

c種（第40図11～14，第44図31～33・35）

口縁部に広い無文部をつくり，直立乃至は内湾気味に開く。全体の器形を窺うことはできないが，浅い甕形のものとして推定される。口縁部と胴部は隆起帯で境される。隆起帯上に刺突を施す場合とそうでないものの二種に分けられる。刺突にも幾種類がある。鎖状のもの（第44図31），円形刺突（第44図32），刻み（第44図35），二列の刺突（第44図33）など窺うことができる。

Ⅱ類（第40図15～23，図版33）

沈線や条線などによって器面に文様の施されたものである。格子目のもの(20・21・22・23)、舌状のモチーフのもの(16)、縦方向の波線(19)、条線(15・17・18)など窺える。これらは後期初頭に位置づけられよう。

4. 堀之内式Ⅰ式土器の口縁部文様

(第42図～第44図, 図版34～37)

堀之内式土器の口縁部には、橋状の把手や楕円形の貼付などにより各種の意匠が描かれる。古宿遺跡出土土器の中では、後期第2群Ⅱ類b種(第5章第1節3参照)にとくにそれは顕著であった。第42図から第44図に掲載した土器群は、後期第2群Ⅰ類からⅡ類に含まれるものと考えられる。ここでは、古宿遺跡出土の堀之内Ⅰ式段階に属する今回検出土器群の口縁部文様のバリエーションを紹介したい。但し、器形による傾向や時期的な変移についてはとくに触れてはいない。それは、全体器形の窺える土器が少量であること、口縁部文様だけでは時期的な判別が困難であることによる。掲載した土器群の口縁部文様はA種からⅠ種の計9のタイプに分けられる。

A種(第42図1～2・4)

橋状の把手的なものである。1は逆S字に隆帯を貼付し、隆帯の背に沈線を施したものである。沈線の起点と終点に一孔を穿つ。2・4は、楕円乃至円形の隆帯貼付と「J」字状の隆帯貼付の組合せである。やはり隆帯の背に沈線を施し、要所に刺突が窺える。

B種(第42図3・5～10)

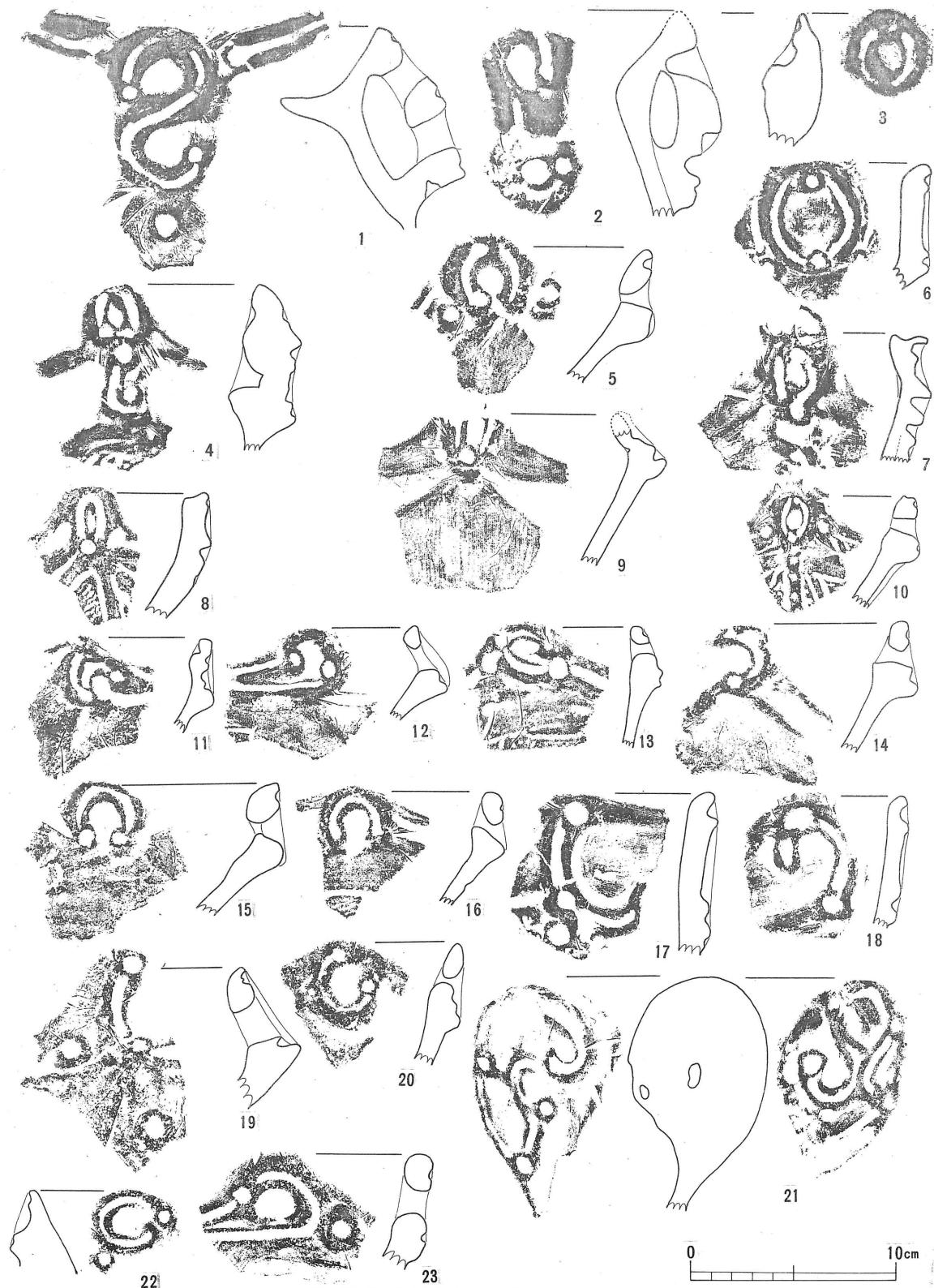
円形乃至楕円形の隆帯を貼付したものである。隆帯の背に沈線を施し、楕円の上下に刺突が窺える。但し、3は把手の内側にみられ、8は楕円の下にのみ刺突が施される。7や10は楕円貼付の下に背に刺突のある隆帯を垂下させている。

C種(第42⁴²図11～16・19～20・22)

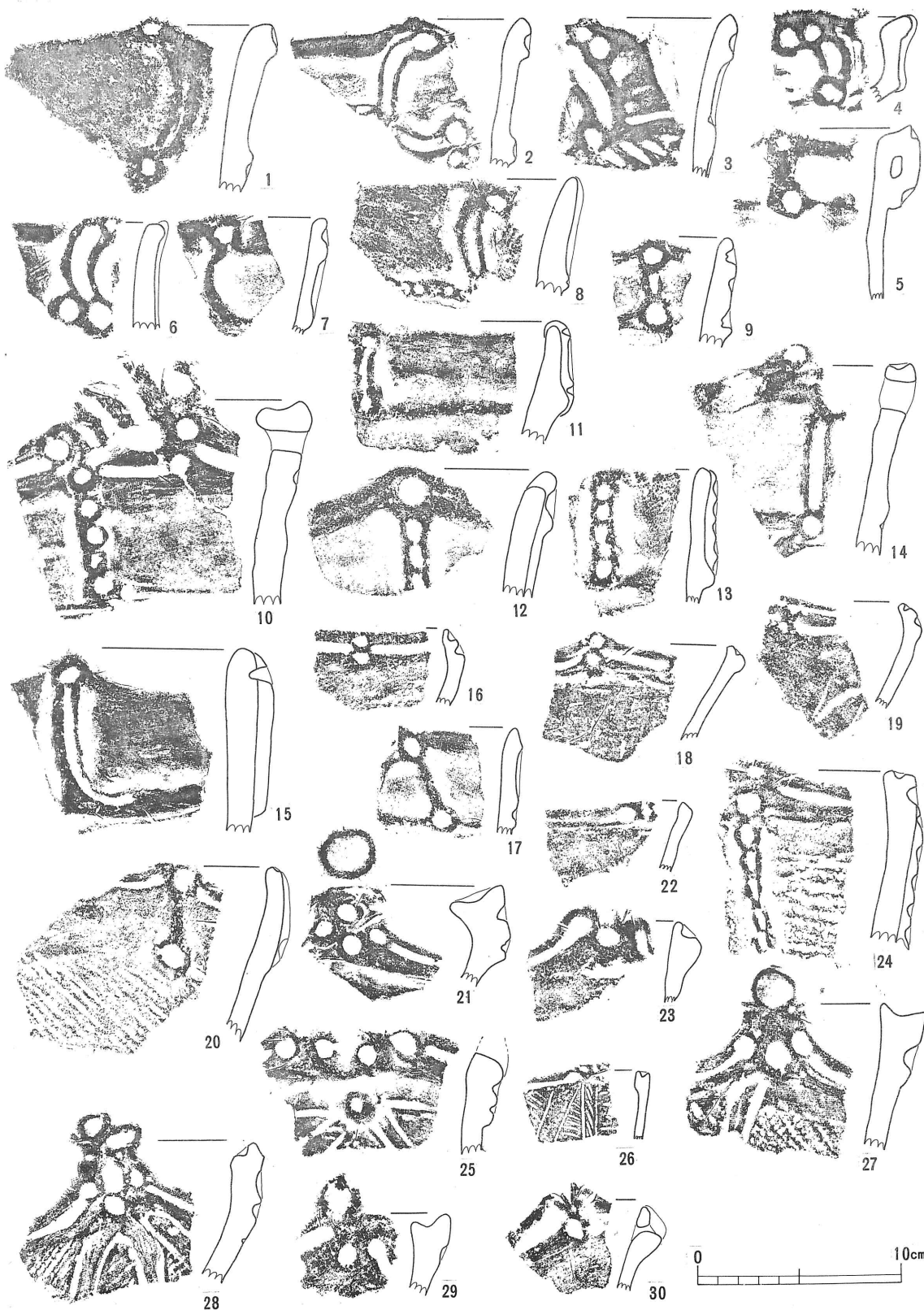
B種のように円や楕円の形状ではなく、隆帯をいわば「Ω」状に貼付するものである。従って隆帯の環の一部が空くものである。大半は隆帯の背に沈線を施す。12のみ隆帯のままとなっている。隆帯の起点と終点に円形刺突を施す。「Ω」状の上下は固定されな⁴²いで、斜方向や横方向に取付けられたりする。22は把手の内側に取付けられている。11～12は斜方向に取付けられ、「Ω」状の空いた位置から沈線を接続させる。22を除き、深鉢形土器の内屈した口唇上につけられるのが普通となっている。取付けられた位置は口唇部の突起となる。

D種(第44⁴²図17～18・21・23)

隆帯が「J」字状に貼付されるものである。隆帯の背には沈線を掘り、起点及び中間点



第42図 堀之内I式土器の口縁部拓影図(1)



第43図 堀之内I式土器の口縁部拓影図(2)



第44図 堀之内I式土器の口縁部拓影図(3)

に円形の刺突を施す。「J」字は常に上下固定されるとは限らない。23は口唇屈曲部上に施される。21は大形把手の表裏に施される。17や18は外反する口縁部に施される。17・18は頸部のくびれる甕形の器形の破片であろう。

E種（第43図1～4・6～8）

隆帯が「ノ」字状に貼付されるものである。7以外は隆帯の背に沈線を施す。隆帯の起点と終点にはいずれも円形の刺突を取付けている。円形の刺突は隆帯の上か下に更にひとつ窺うことができる。隆帯は外反する口縁部外側に取付けられる。掲載した土器は、平口縁に近く、頸部でくびれる甕形の器形であったと考えられる。

F種（第43図5・9～15・17・20・24）

隆帯が外反する口縁部外側に貼付され、しかも直線状に垂下するタイプである。隆帯の背に沈線を刻むもの（9・11・14・15）、隆帯のままのもの（5・17・20）、更に連続刺突を施すもの（10・12・13・24）の三種ある。隆帯の上下端には円形の刺突を窺える。10の隆帯の上方には装飾的な突起がある。17は直線状の隆帯を三角形に貼付している。後期第2群土器Ⅱ類b種の段階に大半含まれると考える。

G種（第43図16・18・19・21～23・25～30、第44図1～17・21・26）

口唇上の突起をいくつかの刺突で飾るものである。第43図16や第44図17のように平口縁のものもある。隆帯の貼付はもはや窺えない。但し、F種の隆帯を取去り文様帯を狭くすれば、第43図16や18のように円形刺突二個の文様になるものと思う。第44図1はF種との組合せであろう。二・三の例外はあるが、後期第2群土器Ⅱ類b種からc種の段階に含まれるものとする。但し、第43図26や第44図8は器面に描かれたモチーフからみて堀之内Ⅱ式の段階と考えてよからう。

H種（第44図16・18～20・21）

口縁部下端つまり頸部に刺突を施したものである。頸部で大きくくびれる甕形の器形の土器である。18・20・21のように刺突一個の場合と19のように刺突を上下に二個取付けるものがある。後期第2群Ⅱ類b種の段階に属するものとする。

I種（第44図23～25・27～38）

口唇外側や頸部に横方向の連続刺突乃至刻みを施すものを一括した。刺突や刻みが隆帯上になされるもの（27・28・30～37）とそうでないもの（23～25・29・38）に分けられる。前者では、円形刺突・鎖状の刺突・刻みなど窺える。30・34は幅狭の口縁無文帯とそれ以下の境に貼付された隆帯上に刺突が施されている。33・37は上下二段に円形刺突が窺える。36は口唇部外側の隆帯上に刻みが施される。後者は全て口唇部外側に円形刺突が施されるが、25・29・38は沈線間に刺突されたものである。

以上口縁部文様についてA種からI種までタイプ分けしたわけである。これはあくまで文様のバリエーションを呈示しただけであり、時期的な流れとは必ずしも一致しない。ここで強いて時期的な変移を考えれば、B種からG種へと六段階の変遷が窺えそうである。つまり楕円形乃至円形の隆帯貼付から一部省略という形で「Ω」状の隆帯貼付へ移るものと思われる。更に同様に「J」字状貼付から「ノ」の字を経て直線状の貼付へ、そして最終的には隆帯を取去り刺突のみのものへという変遷である。A種やH種・I種は時間的な変移に乗るといふより、器形的な差異によると考えられる。とくにH種の場合、刺突の取付けられた位置がA種からG種と異っているわけであるが、これはB種からG種のいずれかと同一個体の中で組合せられる場合も想定できる。

次に、先に細分した土器群とこれらの関連について考える。これは必ずしも確定できないが、ひとつの推測として呈示したい。

A種 後期第2群I類或いはII類の段階。大振りな甕形の器形の口縁部であろう。

B種からE種 後期第2群I類の段階に大半含まれる。但し第42図3や同図22は後期第1群に含まれよう。

F種・G種 後期第2群II類*b*種或いは*c*種の段階。

H種 後期第2群II類*a*種から*b*種の段階。

I種 後期第5群に含められる。

5. 浅鉢形土器

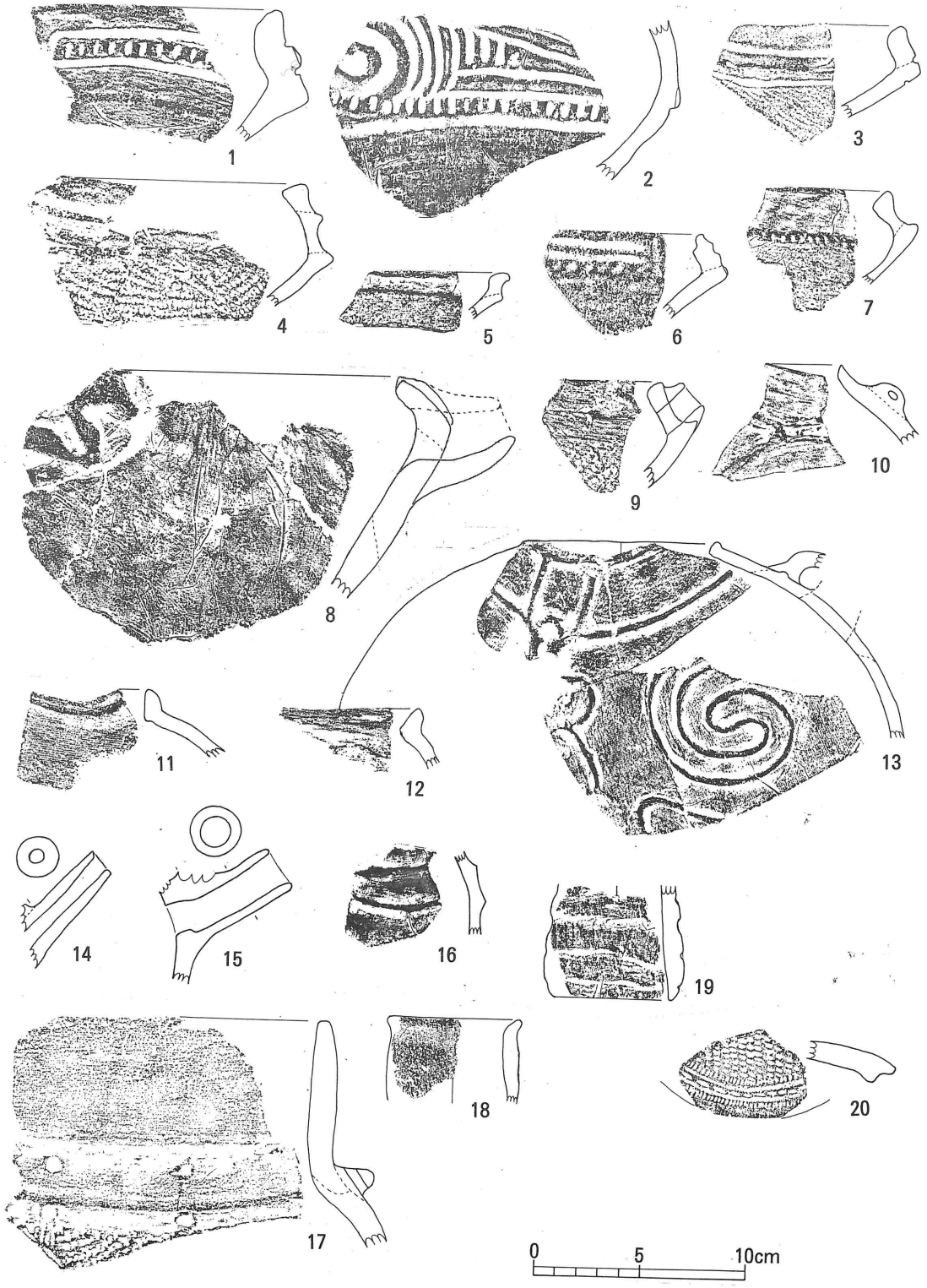
浅鉢形土器と思われるもののうち、図示し得たものは僅かに42点である(第45図1～7第46図1～36)。これらを口縁部形態を中心に分類すると、次の8類に分類することができる。

I類 口縁部がやや内弯しながら口唇部に至る形のもので、口唇部の各稜が明瞭で断面形状が五角形状を呈するもの(第46図1～3)。

口縁部が平縁なものと、波状を呈するものがある。波頂部が双頭を呈していたと思われるものもある(3)。色調は何れも暗褐色を呈し、胎土には細かな金雲母が含まれている。

II類 口縁部がやや内弯しながら口唇部に至るもので、口縁部の内側に幅広の縁を有すると思われるもの(第46図4～22)。

I類同様、口縁部が平縁なものと、波状を呈するものがある。口唇部下端が突出し幅広の縁を有するもの(4, 9, 10, 11, 22)、その縁に沈線文が施されるもの(5)、波頂部が肥厚し突出するもの(6～8)、口縁部下端が丸く膨らみ、胴部との境に僅かに段を有するもの(12, 14, 16, 19, 21)、内面にレリーフ状の文様が施されたもの(9)、内面に稜を



第45図 浅鉢形土器・注口土器他拓影図



第46图 浅鉢形土器拓影图

有するのみのも(13, 15, 17, 18, 20)とがある。色調は淡褐色, 赤褐色, 暗褐色。

Ⅲ類 口縁部が肥厚し, 外面にも明瞭な稜を持つもの(第46図23, 24, 27)。

口縁部下端の稜にかすかに刻みが施されたものもある(27)。色調は赤褐色, 黒褐色を呈し, 胎土には細かな黒雲母を含んでいる。

Ⅳ類 口縁部が肥厚し, その外面に沈線が施されるもの(第46図25, 26)。

波頂部に渦巻文ふうの沈線文が施されるもの(25), 二条の沈線文が施されたもの(26)とがある。色調は淡褐色, 赤褐色を呈し, 前者には多量の黒雲母が含まれている。

Ⅴ類 口縁部が僅かに肥厚し, 外面に段を有するもの(第46図28, 29。)

色調は淡褐色を呈し, 細かな黒雲母が含まれている。

Ⅵ類 口唇部端が丸く, 口縁部の内側が僅かに肥厚し段を有するもの(第46図—33)。

他群に比較すると器厚が薄く, 色調は淡褐色, 暗褐色, 黒褐色を呈し, 細かな黒雲母が含まれている。

Ⅶ類 口唇部端が丸く, 肥厚する口唇部内面に, 幅広の沈線文が施されるもの(第46図34~36)。

小波状を呈する部分に円形刺突文に二条の縦の沈線文が施されたものもある(34)。色調は淡褐色, 赤褐色を呈す。

Ⅷ類 頸部が「く」の字状に屈曲し, 口縁部がやや外反しながら内傾するもの(第45図1~7)。

口縁部に巾広の沈線文や刻み目を有する隆帯文が施されるもの(1, 2, 3, 6), 口縁部外面が凹線状にくびれるもの(4, 5), 屈曲した頸部に刻み目が施されるものがある。色調は赤褐色, 黒褐色, 淡褐色を呈す。

最後にこれらの所属する時期であるが, Ⅰ類は阿玉台式期, Ⅱ類は中期中葉から中期後葉, Ⅲ類は後期初頭, Ⅳ類からⅧ類は後期初頭の堀之内Ⅰ式期に属すると思われる。